
独逸奮闘記

WS

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

独逸奮闘記

【Nコード】

N6525F

【作者名】

WS

【あらすじ】

1900年、6月22日、ルントシュテット家に次男が生まれた。彼は転生者だった……知識を頼りに、成り上がるべく、彼は暗躍（？）を開始した。

プロローグ 全ての始まり（前書き）

あくまでフィクションであり、実在の人物・団体・国家などとは全く関係ありません。

戦争讃美、ナチス讃美でもありません。

ご都合主義なところや勉強不足なところがあると思いますが、できる限り調べて書くのでよろしく願います。

ブローグ 全ての始まり

世界とは一個の巨大なプログラムと見做すことができる。

ここでの世界とは宇宙もひっくるめた、この次元とでも言っても過言ではないものを指す。

この巨大なプログラムの全体像を我々が解析することはおそらくできないだろう。

さて、ここでの問題は这个世界というプログラムが全て正しく動くかどうかなのだ。

どんなに完璧に見えるプログラムであっても、必ず何処かに間違いがある。

そう、プログラムには必ずあるバグというものが。

この物語は転生という天文学的な確率で世界のバグを引き当てた、幸運なのか、不運なのか、判断しにくい人間の物語である。

1900年、6月22日生まれのアシススレーベンの地主貴族、
ルントシュテット家の次男坊。

彼の名はヴィルヘルム・フォン・ルントシュテット。

そんな彼は……転生者だった。

彼が生まれて1ヶ月ほど経ったある日のこと。ようやく、彼は夢ではないことを認識した。

「……だだ」

さて、と彼は呟いても言葉は出ない。

その現実には嘆息しつつもヴィルヘルム・フォン・ルントシュテットは室内を見回す。

豪華なベッド……とは言わないまでも、それなりに贅沢な作りのベビー・ベッドに寝かされていて、部屋には絵画や壺、ソファといった調度品があり、窓からは爽やかな青空を見ることが出来る。

ココは何処だ、と彼はキョロキョロと部屋を見回す。

そこで壁にカレンダーを見つけた。

そこに書かれていた年月を見て、彼は叫んだ。

「だ、だだだだあ!？」

なんだってえ、という言葉を彼は発したつもりだったが、赤ん坊の駄々をこねる声にしか聞こえなかった。

そのカレンダーには西暦1900と書かれていた。

10分程すると彼は落ち着いてきた。

彼は発想の転換を行うことで精神的な安寧を保つ事に見事成功したのだ。

1900年といえばイギリスが世界帝国として振舞うことができた時期である。

そして、ヨーロッパ大陸ではプロイセンを中心に統一を果たしたドイツがヴィルヘルム2世の「陽のあたる場所へ」という標語の下、海外植民地獲得に動き始めようとした時期だ。

さて、彼の行った発想の転換はより悪い時代を考えることだった。中世暗黒時代や石器時代と比べれば遥かにマシであり、成り上がるチャンスに満ち溢れている、と。

そう考えた彼は自分が赤ん坊だというのにも関わらず、ニヤニヤという擬音がピッタリな笑みを顔に浮かべる。

これからの未来知識による薔薇色の人生。

それはすなわち、莫大な富の入手に他ならない。

この時代であれば金があれば基本的に何でもできる、と言っても過言ではない。

将来的に超一等地となるような場所の土地を買占め、そこで豪邸を建てて、悠々自適な生活を送ることもできるし、或いはハワード・ヒューズのように地球上の富の半分を独占することも可能だ。

未来の知識がある、というのはそれほどまでに反則的だ。

そんな風にニヤニヤと笑っている彼は周りから見ればさぞかし不気味な赤ん坊と思われるだろうが、この部屋には幸か不幸か彼しかないもので心配無かった。

そこまで考えて彼は気づいた。

ここは何処の国だ、と。

彼の知る言語とは前世で大学にて習った拙いドイツ語と英語くらいだ。

彼にとって不運なことは、今まで夢の中の出来事だと思っていたために、周りが何か喋っていても、きっぱりと無視していた。

母国語以外の言語では注意深く聞かねば聞き取れないのは当然だ。無論、それがネイティブの方々と遜色無く話し、聞き、読み、書くことができるのなら話は別になるが、残念なことに彼はそこまで熟達してはいなかった。

もしも三国同盟の、いわゆるオーストリア・ハンガリー、ドイツ、イタリアのどれかの国だった場合、第一次世界大戦により非常に大変な被害を被る可能性があった。

彼は世界史マニアとまではいかないまでも、転生前は自分のウェブサイトでリアル志向な架空戦記を執筆していたことがあり、20世紀初頭から半ばまでの歴史・軍事・経済などは色々と調べていた。もっとも余りに調べすぎて訳が分からなくなり結局、頓挫してしまったので、本末転倒だ。

彼が同盟側の国であつたらどうしよう、という不安に襲われてい

ると、コツコツという規則正しい足音が近づいてくるのを聞いた。
やがて足音は部屋の前で止まり、ゆつくりと扉が開いた。

「ヴィルヘルム様、起きていらしたのですか」

入ってきたのはロングスカートにカチューシャをつけたメイド。
それも20世紀後半、日本で見かけるようになったコスプレメイドではなく、本物だった。

歳は10代前半から後半といったところだろうか。

彼女はヴィルヘルムの傍にやってきて、彼を抱き上げる。

この彼女は子守専門のナースメイドであり、ヴィルヘルムのお世話係である。

当然、彼はそんなことを知らない為、本物のメイドをマジマジと見つめる。

彼の内心は単純な、極々普通の男子の抱く感情だった。
すなわち、メイド可愛い、と。

彼女はそんな視線に気づいたのか、ヴィルヘルムににこりと笑ってみせる。

その笑顔に彼は決意する。

すなわち、自分による自分の為の自分だけのハーレムを築く事を。

悲惨な第一次大戦を止める為に、とか世界平和の為に、という目的ではなく、およそ男であるならば誰もが一度は夢見て諦めたことを目的にするところが、何とも情けなかった。

「それではお散歩に行きましょうか？」

彼女は妙に様子がおかしいヴィルヘルムに首を傾げながらも、職務を遂行すべくそう言った。

ヴィルヘルムと彼女、ネリーは屋敷を出て、街にやってきていた。彼は自動車の代わりに馬車が走る道路とレンガ造りの街並みを物珍しげに眺めている。

「この街はヴィルヘルム様の家系であるルントシュテット家と代々繋がりが深いんですよ」

どうにか彼はルントシュテットという単語を聞き取る。

その単語は知っている、と頭の中で考えながら、真剣にヴィルヘルムはネリーを見つめている。

そんな彼にネリーは微笑みながら、言葉を続けた。

「ルントシュテット家は代々軍人の家系で、今年25歳になられるヴィルヘルム様の兄上にあたるカール様も現在、陸軍大学に入る為に勉強なさっています」

ネリーの話の中に出てきたカールという単語と陸軍という単語を聞いてヴィルヘルムはピン、ときた。

陸軍でルントシュテットという家名を持っている人物、そして名前がカール。

思い当たる人物は1人しかいなかった。

カール・ルドルフ・ゲルト・フォン・ルントシュテット。

第二次大戦時には陸軍の長老として、国防軍嫌いのヒトラーに煙たがられながらも敬意を払われ、そのヒトラーに直言できる存在であった。

これでヴィルヘルムは自分が何処の国に生まれたか理解した。

カイザー率いるドイツ、第一次大戦とその敗戦により多大な損害を被り、最終的には第二次大戦の中心となるナチス・ドイツへ変貌していく国家だった。

さて、前世では極々普通の大学生だった彼は当然、軍事教練に参加したことなんぞない。

故にそっち方面の才能があるかどうかは未知数だ。

また、確実な未来として、このままではヴィルヘルムが西部戦線で毒ガスや塹壕への突撃、或いは狙撃などで死ぬ可能性が跳ね上がったことを悟った。

彼が将来どうするか思考に埋没していると、何時の間にか公園に到着していた。

ベンチに座ったところでネリーは彼の異変に気づいた。

ヴィルヘルムは現在、赤ん坊である。

その赤ん坊が「うー」と唸りながら、眉間に皺を寄せて何かを考えている。

ネリーはふと思った。

まさかこちらの言っていることが理解できるのだろうか、と。
自分が今まで話したことの中に何か気になることがあったのだろうか、と。

「ヴィルヘルム様、何か、気になることがありましたか？」

ヴィルヘルムは伝わらないだろうと思ったが、一応、頷いた。

「えっと……ヴィルヘルム様、よろしければ読み書きをお教えしましょうか？」

普通なら不気味に思うか、それとも敬虔なキリスト教徒ならば悪魔憑きとでも思つかもしれないが、幸いにもネリーは良くも悪くも好奇心旺盛な10代の少女であつた。

彼女の言葉にヴィルヘルムは渡りに船とばかりに頷いた。

それから2人は屋敷に戻り、ネリーはヴィルヘルムとカールの父親、ゲルトのところへと赴き、ヴィルヘルムのことを話した。

それを聞いたゲルトは半信半疑ながら、ヴィルヘルムの部屋を訪れ、彼に『はい』か『いいえ』で答える問いかけをして、彼が首を縦に振ったことで証明された。

なお、このときの質問はヴィルヘルムが言葉に対して反応できても、意味が分かるかどうかまでは定かではなかったので、『はい』と『いいえ』のどちらを答えても不正解の無い質問となつた。

その質問は『父を愛しているか』だ。

ゲルトは歓喜し、早速家庭教師を雇おうとしたが、ヴィルヘルム

がネリーを指差したので、ゲルトはネリーをヴィルヘルムお付きのメイドとし、新たに家庭教師も雇うということを行った。

ブログ 全ての始まり（後書き）

ネットでも商業でも日本が頑張るヤツはあっても、ドイツが頑張るヤツがないから自分で書いてみた。

第1話 改変開始（前書き）

改訂しました。

第1話 改変開始

それから月日は流れ、ヴィルヘルムが3歳になった頃、彼はようやく自力で言葉を話し、聞き、読み、書くことができるようになり、更に家庭教師として雇われたシャルロッテの授業により、礼儀作法やこの時代の教養も身につけることができたのだった。

なお、シャルロッテは教育が完了すると同時に雇用契約も切れる予定だったが、ヴィルヘルムのおねだりにより、彼の話し相手として雇うことになった。

また、ヴィルヘルムはゲルトに進言してアメリカのヘンリー・フォードへ出資することを認めさせた。

そのときの説得方法が「誕生日プレゼントに父上の運転する車に乗りたい」という、子供であることを最大限に利用したやり方であった。

ヴィルヘルムの父親であるゲルトも母親であるクララも、手が掛からなくて寂しく思っていた矢先の出来事で、ほいほいと承諾してしまったのだ。

ヴィルヘルムは自室で机の上に画用紙を広げ、あるものを書いていた。

そこに入ってきたのはネリーであった。

「ヴィルヘルム様、3時のお茶とお菓子を用意いたしました」

本来ならここにシャルロットもいるのだが、彼女は現在実家に帰っていて、ここにはいない。

「ん……ちょっと待て。あと少しだ……」

そう言つて、ヴィルヘルムは最後の仕上げを5分ほどで終えた。

「できた。ネリー、これ、どう思う？」

ネリーに紙に書いたものを見せる。

彼女は書かれた絵に思わず息を飲んだ。

絵自体は鉛筆を使って書かれたもので、上手くも下手でもない。しかし、書かれているものが問題だった。

「戦艦……ですか？」

「そう戦艦。イギリスを打倒する為に皇帝陛下が戦艦を作っていると小耳に挟んでね。描いてみた」

彼の計画はどうかしてこの絵を皇帝陛下に届けて、自分に興味を持ってもらい、改革をしよう、というものだ。

早い話が取り入るということである。

彼が描いた絵は史実でアメリカで計画されたモンタナ型。

横から見た図と前から見た図、後ろから見た図、上から見た図を大きな画用紙に描いてある。

もつとも彼は造船技師でもなければ設計士でも無いので、落書きレベルだが、充分に特徴は伝わるだろう。

ドレッドノートが存在していない1903年の時点で、艦の中心線上に主砲を据え付けて、左右両舷を指向できるようにすることは充分過ぎるくらいに革新的であった。

このことを示すだけならば、第二次大戦期の戦艦であれば何でも良いが、敢えてモンタナにした理由は至極単純なものだ。

ヴィルヘルム2世はそこまで軍事に詳しいというわけではない。故に素人目に見たならば、単純に主砲の数が多いほど興味を惹いてくれる、とヴィルヘルムが考えた結果である。

それならキングジョージ5世とかでも主砲の数は同じだが、見た目のバランスを考えてモンタナとなったというわけだ。

また、他の画用紙には戦車や飛行機といったものを紙に書いていたりする。

5号戦車であったり、メッサーシュミットBF109やらフォッケウルフFw190であったり……これらはイギリスもまだ作っていない新兵器である、という触れ込みならばまず間違い無く、食いついてくるとヴィルヘルムは考えたのだ。

実際のところ、ヴィルヘルム2世の人物像というのは他の歴史上の人物と同じく、こういう思想を持ち、こういう性格の人物である、という確実なものがない。

一般的に知られているものでは稚拙な外交政策により、ドイツ帝国を崩壊へと導いた張本人とされており、また他の説では官僚が作成した政策に許可を与えるだけの存在であり、開戦を最後まで防ごうと奔走した人物……というように正反対だ。

ともあれ、ヴィルヘルムはどの説が正しいにせよ、イギリス、フ

ランス、ロシアとうまく付き合わなければ袋叩きにされると知っていた。

というよりも、史実が正にそうだ。

しかしながら、彼はヴィルヘルム2世の家系を考えればそれは余程のことをしない限り、有り得ないと考える。

ヴィルヘルム2世はイギリスのヴィクトリア女王の孫にあたり、ロシアのニコライ2世とは従兄弟同士であり、また両国との関係はビスマルク体制崩壊前まで険悪というわけでも無かった。

ロシアは1894年にフランスと同盟を組んでおり、ドイツが中東進出（いわゆる3B政策）を開始した今、ロシアとの関係は悪化してはいるが、まだ致命的なまでに悪化はしていない。

中東進出を取り止めて、ロシアをフランスよりも大規模に支援すればドイツの側に靡いてくれる可能性はある。

問題はロシアの南下政策とそれに対するイギリスの反発だが、そこはドイツが仲裁をする必要があった。

ともあれ、イギリス、ロシアと一緒に側に立つことは不可能ではない。

そして、この時代では太陽の沈まぬ帝国として君臨しているイギリスは伝統的にフランスを嫌っており、フランスと組むよりはドイツと組む方がまだマシと考える可能性が高い。

イギリスをドイツの側に引き込み、できるならロシアも引き込む。それから穏便に周辺の中小国を併合或いは傀儡化し、ゆつくりと勢力を拡大する。

それがドイツがヨーロッパで生き残りつつ、それなりに繁栄する為の条件であるとし、それらを達成できなくとも、イギリスをドイツの側に引き込むことが生き残る最低条件だとヴィルヘルムは確信していた。

つまるところ、彼の考えはビスマルク体制の維持に少々の追加をしたものといえた。

もっとも、ドイツとして纏まる為にはヴィルヘルム2世の、すなわちドイツ皇帝の権威と権力をドイツのありとあらゆる場所に浸透させなければならぬ。

ドイツは連邦国家であり、分裂の火種は少なくない。

それもその筈で、ドイツという国家は1870年の普仏戦争勝利時、ヴェルサイユ宮殿にて、当時のプロイセン国王ヴィルヘルム1世がドイツ諸侯に推戴される形で成立している。

火種が無いという方がおかしかった。

そのようなドイツを手っ取り早く強化していくにはドイツ皇帝が他者と隔絶した権威と権力を持つ必要がある。

この時代にはまだ影も形も無いスターリンのソ連から強制労働と秘密警察とシベリア送りを取り除いたような、稀に見る独裁国家の方が国内の改革にだけ着目すれば理想的だろう。

その独裁国家は極端に言えば、トップが烏は白いと言えば、それが国内の常識となるような、民主主義者にとっては悪夢とも言えるような国だ。

そして、皇帝の権威・権力を高める方法を間違えれば一気にドイツ分裂・内戦へと突入し、英仏露の介入を招きかねない、というハイスクなものでもある。

しかしながら、そうしないととてもではないがしがらみが多過ぎ

て、大蛇を振るうことはできない。

ヴィルヘルムの心情としては、座して死ぬか、行動して死ぬかというものだ。

彼には野望があった。

それは金持ちになって云々というものも勿論ある。

しかし、それに加えて、自身が惨めな生活を送らないようにドイツについてあれこれ考えたこの3年で更に2つできた。

それは歴史に名を刻むことと、絶対に不可能とされている歴史のIFの実験だった。

さて、ヴィルヘルムが3年経った今でも前の知識をそこそこ詳しく使えることには訳がある。

彼は文字が書けるようになるとすぐに覚えている限りの知識とこれから起こるであろうことを書き記した。

人間の頭は何時までも細部まで覚えていられるようにはできていないが故の苦肉の策だ。

問題はどうかやってヴィルヘルムの考えを皇帝に知らせ、そして、採用してもらうか、だった。

困ったときは父上だ、と思い立ったヴィルヘルムはネリーに告げた。

「ネリー、済まないけど、父上を呼んで来てくれないか？ 見せたいんだ」

「わかりました。すぐに呼んできます」

ネリーはトレイをテーブルに載せ、部屋を出ていく。

彼女を見送って、ヴィルヘルムはお茶を楽しむことにした。

ネリーが出て行っておよそ10分後、グスタフが足早にヴィルヘルムの部屋にやってきた。

そして、ヴィルヘルムが描いたものを見てゲルトは一言。

「ヴィルヘルム、私は海軍には詳しくは無いが……コレは今のイギリスには無い斬新なモノだと思うんだが……」

ヴィルヘルムは毅然と告げる。

「父上、皇帝陛下との謁見を望みます。まずは陛下の考えを変える必要があります」

「どのように？」

「このままではドイツは遠からずイギリスやフランス、ロシアを相手に戦争をすることになります」

ゲルトは思わず唸った。

彼もまた同じ意見であるからだ。

賢い子だとは思っていたが、これほどまでとは……

驚きながら、ゲルトは口を開いた。

「しかし、皇帝陛下と謁見できたとしても、お前ではあしらわれて終わりだろう。それに私の知っている限りではどうも陛下は周辺の国々とは仲良くしたいようだが、陛下の取り巻きが過激というか、好戦的というか、どうもドイツの力を過信しているらしい。彼らを排除せねばどうにもならない。もはやモルトケ元帥もビスマルクもおらん。彼らがいたからこそ、ドイツは平和であつたのだ」

どうする気だ、と視線で問い掛けるゲルトにヴィルヘルムはヴィルヘルム2世の事実には吃驚しながらも、問い掛ける。

「父上の最終階級は？」

その問いにゲルトはピンときた。

「少将だ。参謀本部にもいたし、普仏戦争のときには前線にもいた。それと、知り合いは軍だけではない」

「ではこうしましょう。私の話だけでは説得力に欠けますので、父上の知り合いを集めて、国家の分析やら戦略その他諸々に関する研究機関を作りましょう。父上にはその研究機関の長になってもらい、そこから提出という形にしてもらえば……」

ゲルトは顎に手を当てる。

確かにそれならば無視される可能性は減るだろうが、そこまでうまくいくものだろうか。

その考えを見透かしたのか、ヴィルヘルムは告げた。

「感情的な反論や未来は分からないなどの反論以外のできるだけ多くの反論を封じるだけの根拠を提示すれば納得せざるを得ません。それで納得しなければ、その輩は自身の無能を自ら証明することになります」

「……小さい癖にキツイ奴だな」

苦笑するゲルトにヴィルヘルムは畳み掛ける。

「できるだけ早めに提出し、今のドイツの方針を転換すべきです。時間が経てば経つほど、ドイツの状況は悪化していきます」

「早速取り掛かろう。とりあえず、お前の考えを纏めて出してくれ」

第2話 謁見（前書き）

改訂しました。

第3話も近い内に改訂します。

第2話 謁見

ヴィルヘルムの提案によって、彼の父のゲルトがドイツ中を奔走した結果、組織は1年でどうにか形ができ、翌1905年の1月1日付で正式に発足した。

また、時間との勝負と口を酸っぱくしてヴィルヘルムが言ったが為に、草案という形でヴィルヘルム2世にゲルトが直接ヴィルヘルムの纏めたレポートを機関の発足に先駆けて手渡した。

なお、研究機関の資金に関して、最初期こそ、資金集めに若干苦労したものの、ヴィルヘルムが下手糞ながら、四苦八苦して描いたデフォルメされ、半分擬人化したような動物キャラクター達をシャツに描いて販売するなどの商売に使い、また発想を転換すれば誰でも気づくような、21世紀にあり、20世紀初頭には無かったものを発明(?)し、その特許料を充てることで解決している。

ところで、ルントシュテット家は貴族の家系である。

一般的に、貴族といえば大金持ちであり、資金集めで苦慮などとは信じられないかもしれないが、少なくともプロイセン貴族、いわゆるユニカーはそうではない。

彼らは過去に農場を経営していたりしたが、近代資本主義の波に押されて経営が立ち行かず、生計を立てる為に軍や官界へ入っていた……そういう背景がある。

また軍や官界に入るときは平民出身者よりもユニカー出身者は優遇される為、皆が皆恐ろしい程に優秀というわけでは無い。

そのような中、ルントシュテット家も例に洩れず、数代前の当主

が農場を廃して、軍へと入り、軍内部でそれなりの地位を築いていた。

そのおかげで、他のユンカー出身者と比べればそれなりに良い生活を送っており、更に代々の当主が少しずつ貯めた貯金を充てることでフォードへの出資も可能となったのだ。

1905年3月13日

世界が極東での日本とロシアの戦争に注目する中、ゲルトが長を務める研究機関『ドイツ帝国の繁栄に関する委員会』の本部が置かれている建物にヴィルヘルム2世からの非公式な使者が訪れていた。

「陛下は貴殿の示された案に強く共感していらつしやいます」

使者の第一声にゲルトは内心安堵の息を吐く。

ヴィルヘルムレポートを読み、そんな未来はさすがに有り得ない

だろうと思いながらも、研究機関が発足し、学者や政治家、或いは軍人、官吏達と議論を重ねていくと、レポートの有り得ないと判断した未来と非常に似た未来となる可能性が高いことが分かった。

そのレポートをある時、資料として他のメンバーに見せたところ、誰も彼もが驚愕し、作成者は誰かと問い詰められ、ヴィルヘルムのことを話してしまった。

それから、トントン拍子に話は進み、今ではヴィルヘルムは委員会においては子供でありながら、絶大な信頼を得ていた。

ともあれ「これで駄目だったら、どう責任取るのか」とゲルトは戦々恐々であっただけに彼の安堵は大きかった。

そんな彼の内心を知らずに使者は更に告げる。

「陛下は貴殿との面会を望んでおられます。日時は1週間後……20日の午前10時に再びお迎えに上がります」

ゲルトはその言葉を聞き、あることを思いついた。

「2、3名、助手を連れていっても？」

「構いません」

ゲルトは息子達をヴィルヘルム2世に売り込むチャンスを得たことを内心、喜んだ。

「…………むう？」

自宅の自室にて、机に向かうヴィルヘルムは首を傾げる。
彼の後ろにいる兄のカールはやれやれ、と溜息を吐き、彼の横にいる従弟のゴットハルト・ハインリツィは苦笑した。

陸軍大学に在学しているカールと陸軍士官学校に在学しているゴットハルトは、ゲルトに勧められて委員会のメンバーの一員になっている。

2人共、ヴィルヘルムに驚愕し、モルトケ或いはビスマルクの再来か、とまで思ったものの、すぐにその認識は改めた。

「…………駄目だ。全然分からない」

現在、ヴィルヘルムは兄の勧めで、陸軍士官学校の入学試験の模擬試験を受けていた。

事前に何の勉強もせずに。

その結果は彼の言葉から容易に予測できるだろう。

弟ならば、簡単に満点を取るかもしれない、と思っていたカールとしては残念なような、弟が普通であることが分かって嬉しいような、複雑な気持ちだ。

ヴィルヘルムが周囲から神童と持て囃されることは、普通では有り得ない異常さを際立たせている、とカールは思っていた。

「従兄上、ヴィリー自身に将来、何になりたいか聞いた方が良いでしょう」
あにうえ

ゴットハルトはそう言って、ヴィルヘルムにウィンクしてみせる。ちなみに、ヴィルヘルムの愛称はヴィリーであり、そう呼び始めたのは他ならぬゴットハルトだ。

ともあれ、カールはゴットハルトの言う事もっともだ、と頷き、ヴィルヘルムに尋ねる。

「何になりたいんだ？」

「ニートになる」

即答したヴィルヘルムに2人は単語の意味が分からずに首を傾げる。

彼はそれを見て、補足した。

「自宅で、年がら年中、本を読んだり、何だりして優雅な生活を送

る人のこと」

「何だか知らないが、ニートという単語とその意味は結びつかないような気がする。ともかく、若いうちからそれは無いだろう。私が言うのも何だがな」

「それじゃ小説家になる。異世界に現代人が召喚されて悪魔と戦ったり、或いは国家を作ったりするような物語」

「……まあ、確かに向いてはいるかもしれない」

カールはそう言って頷いた。

それからヴィルヘルムはゴットハルトに視線を移す。彼はヴィルヘルムの視線を受けて、頷き、口を開く。

「出来たら読ませて欲しい。ヘッセの最新作、車輪の下は……」

そこまで言って彼は一度言葉を切り、肩を竦ませる。

「読んでいて憂鬱になる。明るくて、胸が躍るようなものを読みたい。社会批判とかそういうの一切抜きで」

「……たぶん、そういう感じになると思う」
「期待している」

一通り、2人の話が済んだところでカールが口を挟んだ。

「勉強はするように。しておいて損は無い。お前が前線に立つことも有り得ないことではないからな」

そのとき、扉が叩かれ、ゲルトが入ってきた。

ベルリン王宮内にある一室にゲルトとカール、ヴィルヘルムそしてゴットハルトは通された。

従弟に過ぎないゴットハルトが今回の会談に助手として加わっているのはカールとヴィルヘルムがゲルトに頼んだからだ。

ゲルトとしても、特に断る理由は無いので了承したのだった。

ともあれ、一行が部屋に入り、10分と経たずにヴィルヘルム2世がやってきて、会談の開始となった。

「余はそなたらの研究機関の結論に対して、非常に好ましいものであると考える」

ヴィルヘルム2世がまず口火を切り、彼の出す質問に対して、ゲルトが受け答えしていく。

そのような中で助手の仕事は何も無い。

それもその筈で、実際は助手という名の資料などの荷物運びだ。

ゲルトは会談終了間際に紹介する為に彼らを連れてきたと言っても良い。

さて、そのように暇をしているヴィルヘルムは話を聞きながら、こっそりとヴィルヘルム2世を観察していた。

彼のヴィルヘルム2世に対する第一印象はカイゼル髭がよく似合うダンディーなオヤジというものだった。

その視線に気づいたのか、ヴィルヘルム2世がヴィルヘルムへと視線を向けて、尋ねた。

「何か、余に用かね？」

その問いにヴィルヘルムはチャンスだ、とばかりに口を開いた。ゲルトが、カールが何を言うのかと引き攣った顔が、そして、ゴットハルトは興味津々な顔をしているのがヴィルヘルムには見えた。

「はい、陛下。国内の産業基盤を整える為に予算を抽出する為に艦隊法を取り止め、代艦の建造に留め、旧式艦の売却、それでも足りない分は国債で補う。それで問題ありません。しかし、しがらみも多いと聞きます」

率直な言葉にヴィルヘルム2世は驚き、次いで苦笑した。

「1人で国の全てを決定することなどとてもではないが、できぬ」

「それは道理ですが、国の行く末を左右するような、最も重要な決断を下すことが陛下の義務ではありませんか？」

「確かに理想はそうであるが……」

その歯切れの悪い言葉にヴィルヘルムは深呼吸を数度して、気持ちを整える。

彼からすると、非常に拙い事態だ。

権限があちこちに委譲されている為にヴィルヘルム2世ができることは驚く程少ない。

実際にこちらの意見を取り入れて、強力に推進してもらわねば、よろしくない未来が待っている。

故に、後のことは考えずに、彼は大声で、目の前に座るヴィルヘルム2世に言った。

「あなたはフリードリヒ・ヴィルヘルム・ヴィクトル・アルベルト・フォン・プロイセン！ ドイツ帝国皇帝陛下であり、ドイツで最も高い地位に在る方だ！ あなたがこうだ、といえばこうなるような国にしくはああなたはいてもいなくても同じ、ただの飾り物になってしまふ！ それでも良いのか！」

そこまで言われて頭にこない程、ヴィルヘルム2世は温厚ではなかった。

「余が好きで傀儡であると思っているのか！ 余と官吏達、どちらが専門的な知識を持っていると思っている！ どうしろと言っただ！」

ヴィルヘルム2世の言葉をヴィルヘルムは何となく理解できた。

極々普通の近代国家に見られる現象であり、皇帝或いは政治家と官僚の間の溝のようなものだった。

専門知識を持たない皇帝や政治家達は専門知識を持つ官僚達の言うがままになるしかない。

「そもそも、議会はこのレポートとは正反対の思想を持つ輩が多数を占めている！ 予算の承認と国内政策は議会を通さねばならない！」

その言葉を聞き、ヴィルヘルムは穏やかな声で尋ねる。

「陛下の理想を教えてくださいませんか？」

「余の理想は全ての国民に支持される皇帝、全ての列強に愛されるドイツだ」

肩で息をしながらも、ヴィルヘルム2世はそう言った。

「ならば、その理想のうち、国民に支持されるということを実際にしちやいましょう。要は政治家達やその他の諸々ではなく、国民に支持されれば良いのです。政治家よりも官吏よりも軍人よりも、数が多いのは一般人、いわゆる大衆です。不言実行して、大衆から信頼を得るといのが最善ですが、時間が無いので即効的なものをするしかないでしょう」

「即効的なもの？」

ヴィルヘルム2世の問いにヴィルヘルムは薄ら寒さを感じさせる笑みを浮かべ、一言告げた。

「スキヤンダルって怖いですね」

その言葉にヴィルヘルム2世は啞然とした後、極々当たり前の疑問をヴィルヘルムに投げ掛けた。

「……そなたは子供か？」

「見た目に騙されると痛い目に遭いますよ？ とまあ、しばらくベルリンは色々騒がしくなりますので、よろしく願います」
「あ、ああ……分かった」

それからヴィルヘルムはゲルトの方へ顔を向ける。

「父上、1個中隊程度の人数を集めることはできますか？ 集めるのは現役でなくて、退役した方達です」

事態の急展開に呆気にとられていたゲルトはその問いに我に返った。

「それくらいなら可能だが……何をするつもりだ？」

ゲルトは鋭い視線をヴィルヘルムに向けるが、当の本人は軽い口調で言った。

「ドイツが生き残る為には多少の荒療治が必要です。ただし、革命は行いません。ちょっとした抗議活動を行って、陛下が国民に支持される為にあることをしてもらっただけです」

ヴィルヘルムの頭にはナチスの国会議事堂放火事件や日本の5・15事件や2・26事件があった。

第2話 謁見（後書き）

加筆修正済み。

第3話 具体的な改変

国家統括官に就任するなり、ヴィルヘルムは大量の書類の入った箱を台車に乗せて近衛兵に運ばせながら、ヴィルヘルム2世の執務室を訪ねた。

そして開口一番、ヴィルヘルム2世に告げた。

「というわけで陛下。これ全部目を通して許可してくださいな」
「待て待て。それを全部か？」

台車の上にてんこ盛りとなっている書類の群れ。

最低でも数十cm程の厚さがあるその軍勢にヴィルヘルム2世は顰め面で問い掛けた。

その問いにヴィルヘルムは「勿論です」と憎らしいぐらいの笑顔で答える。

やれやれ、と思いながらヴィルヘルム2世はとりあえず一番上の書類を箱から取り、中身を確認する。

「規格の統一？ まあ、当然だろうな」

書類を斜め読みして、許可の判子を押した。

「重要度の高いものが上になっております」

「うむ……飛行機？ 気球みたいなものか？」

視線を書類からヴィルヘルムへと移し、ヴィルヘルム2世が問い掛けてくる。

「はい。将来的には気球よりも遥かに需要のあるものです。戦争にも使えますし」

「なるほど……」

判子の押されるペースに満足したヴィルヘルムは扉の外で待機していた近衛兵を呼び出す。

もう1台の台車を押して、呼ばれた近衛兵が部屋に入ってきた。

うんざりとした顔になるヴィルヘルム2世に笑顔のヴィルヘルム

「他の官僚の方々と打ち合わせして頑張ってくださいね」

「……過去に戻るなら人前に姿を現すなと命じた余を殺したい」

ヴィルヘルムが提出している書類はこうした方がいいんじゃないのか、という抽象的な案ばかりが書かれている。

具体的な方策については一切書かれていない。

無論、これはヴィルヘルム自身がそこまではさすがに分からなかったのだが、結果としてこのことが官僚達的能力が試され、また鍛えられることになった。

国家統括官として人前に姿を現すな、という皇帝の勅命を最大限に利用し、また、朝令暮改は忌むべきものである為にすぐに撤回しないだろう、というヴィルヘルムなりの楽をする為の方法である。

アイディアを出すだけの投げっぱなしのような気がしないでもないが「将来的には統括官として表に出るから」とヴィルヘルムは言っただけでヴィルヘルム2世を励ました。

そのようなやり取りがあったのだが、後に口語で書かれたドイツの歴史書では下のようになった。

国家統括官としてまず第一にヴィルヘルム・フォン・ルントシュテットが行ったことは規格の統一であった。

5年以内にドイツ国内のありとあらゆる規格を統一できるように、国から補助金を出すようにし、統一後は工場の拡大の為に補助金を出すことにするというものだ。

幸いな事に農業国から工業国へと転換している最中のことなので、これに関しては特に混乱は起きず、フォード社を設立し、大成功を収めているヘンリー・フォードを顧問として招いて、ドイツ国内の各企業を指導して回らせることで徹底的な規格統一による均質化それにより、互換性の確保に成功した。

フォード自身も10万ドルもの現金を気前良く投資してくれたルントシュテット家の意向を無視する筈も無く、むしろ精力的に動いて回った。

また、フォード社がアメリカからドイツへと移転してくるというヴィルヘルムとしては嬉しい誤算もあった。

第二に飛行機の開発。

これに関しての主な内容はライト兄弟の誘致であった。

「資金と研究所とスタッフを用意するから、飛行機作ってくれ」と簡単に言えばそれだけだが、資金に苦慮していたライト兄弟は渡りに船とばかりに嬉々としてやってきた。

第三には艦隊法の大幅な縮小及び参謀本部と海軍総司令部を統合し、統合参謀本部、そして陸軍省や海軍省の上位組織として国防省を創設し、更に空軍省と空軍、兵站省を新たに創設し、帷幄上奏権を廃止するなどの軍事全般であつた。

ドイツは参謀本部も海軍総司令部も同じ頃に創設された為に比較的、仲が良かった。

その為に陸軍と海軍による内戦にまでは発展せずに、スムーズとまではいかないものの、致命的な問題は出ずに統合された。

無論、ヴィルヘルム2世が関係各所を回って説得にあたつた影響もあるだろう。

なお、艦隊法の大幅縮小で浮いた予算は国内開発または技術・兵器開発へと、その殆どが回されることになる。

しかし、ヴィルヘルムはそれでも足りないとばかりに旧式化した艦船を南米諸国へ売り払った。

ドレッドノートが出てくればどちらにしろ、対地支援程度にしか役に立たなくなることを見越した上でのことだ。

縮小前の艦隊法はイギリス海軍に対抗できる大艦隊を作り上げるという壮大なものであつたが、縮小後は15年経過した軍艦の代艦建造のみを認めるという全く正反対のものとなつた。

さすがに海軍から文句が出たものの、そこはヴィルヘルム2世が出て説得した。

次に6歳から14歳までを義務教育とし、高等学校進学希望者、

大学進学希望者に対し、優秀な学生に対して奨学金を出し、また各大学に対しても研究資金を提供することにした。

教育の質と量の両方を高めなくては国は豊かにならず、というヴイルヘルムの考えに基づいている。

次に各国から技術者、科学者などの研究者に対してより良い研究環境を提供し、ドイツへの誘致を行った。

多くの研究者達は「優遇」の二文字に惹かれてドイツへとやってきたが、愛国心から断った科学者や技術者もいる。

そんな彼らに対しても研究資金を一定額提供することでドイツに對して好意的にした。

また、ヘンリー・フォードがトーマス・エジソンを引っ張ってきたのもヴイルヘルムにとっては嬉しい誤算であった。

そして、スポンサーであるモルガンとの関係が悪化し、支援を打ち切られてしまったニコラ・テスラまでがやってきた。

テスラがやってきた、という知らせを聞いたとき、ヴイルヘルムは自室で狂喜乱舞したという。

更にヴイルヘルムは他国の若手ドイツ系軍人や有能そうなドイツ系人などの研究者以外の引き抜きも行い始めた。

特にドイツ系アメリカ人のチェスター・ニミッツは最優先で引き抜くように指示した。

このとき、ニミッツはアナポリス（アメリカ海軍兵学校）に在籍しているので、引き抜けるかどうかはわからなかった。

更に憲法を改正し、信教の自由を認めた。

法律もそれに伴って整備された。

ユダヤ教までも認めるというヴイルヘルムの意見に対して流石に

ヴィルヘルム2世が難色を示し、ヴィルヘルムの説得にも関わらずに頑として認めなかった。

仕方が無いのでヴィルヘルムは次善の策を提案した。

すなわち、国籍が欲しいユダヤ人に対して、一定の金額（法外な金額であったという）を提示して、買ってもらうという方法であり、その方法で入ってきたドイツ系ユダヤ人に対して信教の自由を保障するというものだ。

また、ヴィルヘルム自身は人種差別・民族差別撤廃も盛り込みたかったというが、時期尚早と彼自身が判断し、草案としてヴィルヘルム2世に提出したに留まった。

当時、ドイツ人はドイツ人であることに非常に高いプライドを持っていた。

そんなときに人種差別やら民族差別撤廃を持ち出しても、反発されるのが当然だとヴィルヘルムは思ったのだろう。

人種差別、民族差別撤廃をヴィルヘルムが求めたのは単一民族ではどうしても思考が硬直しがちになること、また、人種・民族に限らず優秀な人材が出てくるからだろう。

（冷遇されていた各国植民地の原住民に受けがいいという理由が一番だという説もある）

ともあれ、ヴィルヘルムは代案として移民法を成立させた。

10代前まで遡り、ドイツからの移民であるなら、その子孫はドイツへの移住を許可するというものだった。

ドイツ系に限らず、という風な文言が移民法の条文に盛り込まれるには、より一層の社会的成熟を待たなければならぬと彼は思った。

しかし、少なくとも、こういう風な意識を作り、盛り上げていくことができれば、他のヨーロッパ諸国やアメリカよりは早く、人種・民族差別は無くなるだろうとも彼は思ったのだ。

また、ユダヤ人に関してはヨーロッパの歴史的経緯から見て、嫌われ者である為にヴィルヘルム2世の説得に苦慮したが、ドイツにとっては資金的な意味で絶対に必要だ、と言って、ヴィルヘルムが熱心に説得した。

ヴィルヘルム2世も遂に折れて、ドイツ系ユダヤ人であるならば、という制限を設けて許可した。

他には帝国中央情報局の創設などを矢継ぎ早に指示を出した。

改革第一段階の最後の締めとして、ヴィルヘルムはナウルを除いた南洋諸島及びニューギニアなどの南太平洋の領土、青島を対価としてイギリスに領土交換を持ち出した。

ヴィルヘルムの「中国は市場としては魅力的だが、深入りすると泥沼になる」や「資源が出ないところを持っていても意味がない」という説得でヴィルヘルム2世も折れた。

そういうわけで、ボルネオ島のイギリス領と交換してもらうようにヴィルヘルム2世がイギリスと交渉し、イギリス側としても、中国市場へのより近いアクセスの為に青島は必要であり、ボルネオ島イギリス領の油田と遜色ない対価だと判断して、交換に応じた。

そんな中、ヴィルヘルムはゲルトに進言してクリムゾンなる会社を立ち上げさせ、色々と口を出して、キャラクタービジネスや発想の転換で生まれるような簡単な特許を取得し、それを製品化、販売することで莫大な利益を上げることに成功した。

法律に引っ掛かりそうだが、ヴィルヘルム名義の会社ではない為

に法的にはグレーゾーンだった。

また、日露戦争については国力の増強が第一ということで、直接的な援助はしないこととなった。

それにヴィルヘルム2世とニコライ2世が縁戚関係にある為にヴィルヘルムがそれとなく聞いてみても、ヴィルヘルム2世は日露どちらの支援についても許可を出さなかったのだ。

以上、1930年出版『口語 ドイツの歴史』より。

前述したようにヴィルヘルムはあくまで大雑把な目標を示したに過ぎない。

「という風に余は思っただが、コレは達成できるのか？」

ヴィルヘルムの書類を一通り見終わったヴィルヘルム2世は早速、財務大臣などの文官を集めての会議を行なった。

ヴィルヘルムの提案ということを悟られぬようにする為にあくまでヴィルヘルム2世の提案という形をとっている。

どんなに優れた意見であっても、相応の権威が無くては採用され

ない。

ここでいう権威とは年齢・社会的地位などだ。要は子供の戯言と笑われるのがオチなのである。

「達成はできると思いますが、費用を何処から抽出するのですか？」

もつともな質問にヴィルヘルム2世は軽く頷く。

「これまでの海軍増強を取り止める。そして、陸軍も縮小する」

今までの拡張路線を180度変えるヴィルヘルム2世の言葉は出席者達には好意的に受け止られた。

イギリスと建艦競争をした日には財政の破綻が確実視されている。誰も負ける戦いをしたくはない。

幸いにもまだイギリスとの関係は決定的な破局を迎えていないので修復することは可能だ。

「これより親英路線とする。余程の事態が存在しない限り、これは撤回しない。軍人を抑えるのは余に任せよ。諸君らは余が述べた案を可及的速やかに具体的なものとし、実行に移せ。ドイツの国力増強は急務である」

ヴィルヘルム2世が会議を開いていた頃、ヴィルヘルムは実家で

ヘンリー・フォードとの会談を始めようとしていた。

フォードとしてはヴィルヘルムが融資を父のゲルトに進言してくれなかったならば、今の自分は無かったことがよくわかっていた。

「本日はお招きいただき、誠にありがとうございます」

部屋に入ってくるなり、ドイツ語でそう言って平身低頭するフォードにヴィルヘルムは苦笑する。

知っていれば誰でもやるだろうことなので、彼には後ろめたさがあった。

ともあれ、傍目から見れば子供に大の大人が頭を下げているという、何とも不可思議な光景になっている。

「頭を上げてくださいな。ミスタ・フォード」

流暢な英語でそう返したヴィルヘルムにフォードは思わず頭を上げ、目を丸くした。

「英語はできるのですか？」

「2歳の頃、6ヶ月間ずっと英語漬けの毎日で間違えたらご飯抜きという凄惨な状況になれば誰でも覚えると思いますが」

実際のところ、ヴィルヘルム自身が英語を習いたいと言い出したのだが、神童だと両親や周囲に認知されていた為に起こったスパルタ教育による悲劇ともいえる。

罰がご飯抜きだった為に鞭で打たれなかったという意味ではマシかもしれないが。

「それと、18歳くらいまでが母国語以外の言語を習得し易い時期だそうですね。赤ん坊でもパパ、ママは言えるようになりますからね」

「なるほど……」

思わず感心してしまうフォードは首を左右に振ってそうではない、と頭を切り換える。

「それで本日はどういったご用件でしょうか？」

「単刀直入に言いますと、あなたを顧問としてドイツに招きたいのです。あなたの会社は一定の品質を持った車を大量生産できますからね。それをドイツの企業ができるようにしてもらいたいです」

「それは……」

フォードの言葉を予期していたかのようにヴィルヘルムは「勿論」と言葉を続ける。

「アメリカではあなたの会社とだけ、クリムゾンは取引しましょう」

「クリムゾンはあなたの父親の会社ではありませんか？」

暗にゲルトを通さねば何もできないだろう、というフォードの言葉にヴィルヘルムは笑みを浮かべた。

「ミスタ・フォード、世の中には隠れ蓑という言葉がありましてねえ。名義と事実が違う場合があるんですよねえ」

そう言って、楽しそうに笑うヴィルヘルムにフォードは確信した。目の前の子供こそがクリムゾンの実質的な元締めだと。

「……何て子供だ」

フォードは呆れたような、感心したような、どちらともつかない複雑な表情となる。

「それで、お返事は？ ああ、前もって言っておきますが、クリムゾンのキャラクターは世界中の女性とチビツ子に大人気ですからね。そのキャラクターが何か言ったら、大変なことになるでしょうねえ」

脅迫そのものであった。

ヴィルヘルムは拒否すればフォード社やその製品をキャラクター達に非難させると言っているのだ。

夢と希望を与えるキャラクター達にとっては噴飯ものだが、これが現実であった。

使えるものは藁でも石でも何でも使う。

マキャベリの基本である目的達成の為には手段を選ぶな、ということヴィルヘルムは実践していた。

「我が社としては利益を上げられるので、全く問題はありません」

やり難い。

大人の真似をしているということが分かるような言い回しや態度ではない。

まるでそれが当然であるとも言わんばかりの自然体。

神童というのはただ単に頭が良いというだけではなさそうだ。

フォードはヴィルヘルムの提案にYESと答えながら、心の中でそう思った。

「さて、無事に交渉が終了したところで、フォード社の大量生産について一つ、教えてもらいましょうか」

「構いませんが、予想はついているのでは？」

ヴィルヘルムは頷いて、人差し指を1本立てた。

「何よりもまず重要なのは規格の統一。アメリカではヤード・ポンド法でしたか。我が国はメートル法が主流ですが同じことでしょう。要はネジ一つにいたるまで全く同じものを使って製品をベルトコンベアーで流しながら組み立てていく。そうだと思っんですがね」

「……分かってるのなら私は必要ないのでは？」

フォードの問いにヴィルヘルムはかぶりを振る。

「大雑把に規格統一といっても、私はその具体的な内容については全くもって検討がつかない。そういうわけで世界で最初に成し遂げたあなたにやっていただきたい」

「そういうわけですか」

「そういうわけです。勿論、別途給料も払いましょう。ああそれと、たぶん皇帝陛下が会いたいと言ってくると思うので会ってくださいね。国家レベルで進めるので」

さらりとんでもないことを言ったヴィルヘルムにフォードは啞然とした。

しかし、すぐにその言葉の意味を理解してヴィルヘルムに食って掛かる。

「待ってください！ それは聞いていませんよ！」

「はて？ 私はドイツに顧問として招きたいと言いましたが？」

「そうです！ 国家レベルで、などとはあなたは言っておりません

「！」

ヴィルヘルムは嗜虐的な笑みを浮かべる。

「何度も言いますが、私はドイツに顧問として招きたい、と言いました。ドイツに。すなわち、ドイツ帝国に。誰も民間企業の顧問になれ、とは言つてません。あなたは一時的にドイツ帝国に外部から来た顧問として所属し、国家の規格統一に尽力していただきますからね」

やられた、とフォードは心の底から思った。

そして、やり難い相手という印象は間違っていなかった、と痛感した。

「ドイツでゆつくりしていつてね！」

満面の笑顔でそう告げたヴィルヘルムにフォードが殺意を覚えても仕方がないことだった。

そして、それから数年後、ドイツでのT型フォードの余りの売れ行きの良いさにコストを少しでも下げるべく、アメリカから会社ごとやってくることになるとはこの時点ではフォードは勿論、ヴィルヘルムも思いもしなかった。

さて、日露戦争の結果は少数の人物しか知り得ない史実通りの結果であったが、遂にヴィルヘルムは歴史を変えることに成功する。1905年の第一次モロッコ事件が起きなかった。当然、起きる理由が無い為に起きなかったのだが、それでも何とも言えない達成感をヴィルヘルムは感じたのだった。

そして、1908年に青年トルコ人革命がオスマントルコにて勃発。

その混乱に乗じて、オーストリア・ハンガリーがボスニア・ヘルツェゴビナの両州を領有しようとしたが、ドイツとロシアが圧力を掛けてやめさせた。

1914年に第一次世界大戦が起こってもらっては困るヴィルヘルムとダーダネルス海峡の通行権を得たいが為にトルコに恩を売りたいロシアの思惑が一致した結果である。

これに対して、オーストリア・ハンガリーはドイツが支持してくれると思っていたが故に、彼らにしてみれば裏切られた形になったが、ドイツとの同盟は安全保障上の理由で解消したくてもできなかった。

ヴィルヘルム2世は頃合良し、と見て、当初の予定通りに、南チロル地方を除いたトレンティーノ地方、トリエステ、イストリア地

方、フィウメ、ダルマツィア地方の回収をドイツが支持することにした。

オーストリア・ハンガリー解体の第一段階はイタリアの機嫌を損ねないようにすることだった。

ヴィルヘルムの策はオーストリア・ハンガリーを内乱状態にして、ドイツに泣きつかせる。そこで命と僅かな財産か死を選ばせるといふ、何ともえげつないものだった。

こうして、秘密裏にイタリアとの協議が開始され、洪々ながらイタリアは合意し、南チロル地方はドイツが買収するという形にして、イタリアは併合しないということになった。

そして、第二段階では、内戦が勃発するようにドイツはオーストリア・ハンガリー内部のマジャール人を密かに支援し始めた。

独立後はドイツが独立を保障する、という魅力的な謳い文句につられて、支援を開始して僅か数ヶ月でマジャール人が武装蜂起した。これに対して、オーストリア・ハンガリーは軍によって鎮圧を開始したが、二重帝国全土に飛び火した為に手がつけられなくなった。

そして、1909年6月、オーストリア・ハンガリーはドイツに支援を求めた。

これに対してドイツはオーストリア・ハンガリーをすぐに支援せず、マジャール人の代表と協議した。

ハンガリーの取り分とドイツの取り分を。

結果、旧オーストリア帝国領をドイツ領、安全保障の為にトレンティーノ地方、トリエステ、イストリア地方、フィウメ、ダルマツィア地方をイタリアに割譲、残りがハンガリー領ということになった。

結局のところ、ハンガリー王国領がそのままハンガリーの取り分となった。

マジヤール人達はドイツの機嫌を損ねて潰されては叶わないので、この条件を呑んだ。

そして、1909年8月にドイツはオーストリア・ハンガリー二重帝国皇帝であるフランツ・ヨーゼフ1世に対して、帝国の解体をするならば身の安全とある程度の財産を保障する為に介入するとう、とてもではないが、同盟国に対するものとは思えない条件を突きつけた。

本来なら支配階級であるドイツ人達が反発するが、実際のところ、内戦勃発と同時にドイツは二重帝国内に住むドイツ人の受け入れを開始していた。

内戦が全土に飛び火した後はドイツ人の避難民は激増し、1909年8月時点で二重帝国在住のドイツ人は少数だった。

ヨーゼフ1世は落胆しながら、ドイツの条件を呑んだ。

こうして、オーストリア・ハンガリー二重帝国はその歴史に幕を降ろし、新たにハンガリー王国が誕生。

一番の得をしたのはイタリアであるが、ドイツも最少の労力で大きなものを得ることができたのだ。

第3話 具体的な改変（後書き）

改変の効果が出るのは数年先の話。
ゲームみたいにパツとやってポンとなったら何て楽なんだろう。

第4話 悪巧み

1910年にもなると、ドイツはヴィルヘルムの提案、官僚達の努力、フォードの努力が結実し、好景氣を迎えていた。

鉄道や道路などの一般にインフラストラクチャーと言われるもの整備・新設から始まり、ダム建設や史実のこの時点ではまだ影も形も無かったアウトバーンの建設などの大規模な公共事業による雇用の増大、フォード社製の格安自動車に端を発したモータリゼーションの推進などにより、国民の生活水準は向上、企業の収益も向上、国家の税収も向上するという誰もが嬉しい悲鳴を上げていた。

そんな中、ヴィルヘルムとヴィルヘルム2世は戦争による資源獲得を考えていた。

「やっぱり、ルーマニアが手近でいいと思うんですけどね」

「いやいや、さすがにバルカン半島に手を出すのは問題がある」

「冗談ですよ」

ベルリン王宮内にある皇帝の執務室。

そこでヴィルヘルムとヴィルヘルム2世は頭をつき合わせて相談していた。

現在の課題はドイツ国内で取れない資源をどうするか、だ。

差し当たっては石油とレアメタル。

石炭から石油へと変換する合成石油技術へ多大な投資をしているにしても、実用化はまだまだ先の話であり、また、商業としては成り立たないとヴィルヘルムは知っているのでどうにか油田をより多く確保したいところだ。

イギリスと交換してもらった、ボルネオ島の元イギリス領は油田があるが、やはり多ければ多いほどいい。

ともかく、一応の目処が立っている石油よりも、産出しないレアメタルは重要な問題だ。

「やっぱり一番問題無いのは普通に輸入して備蓄することですね。今まで通り、イギリス、アメリカとの関係重視で」

「……うむ、やはりそうなるか」

ヴィルヘルムは1906年6月にヴィルヘルム2世と共に親善訪問という形でアメリカへと渡り、そこで工業地帯やら油田を視察、その後にセオドア・ルーズベルト合衆国大統領と会談した。

ヴィルヘルムをルーズベルトは訝しげに思ったものの、ヴィルヘルム2世が説明すると、目を丸くして驚いた。

無論、大統領に対してのみヴィルヘルムが実質的な宰相であると説明し、他の補佐官などには気が利く従者程度の説明しかしていない。

そのときにヴィルヘルム2世が使った文句が「セオドア・ルーズベルトという個人を信用して」というものである。

「アメリカ並みとは言わないが、せめてロシア程度の地下資源が欲しいな」

「まあ、無い物ねだりはやめましょう。空しくなりますから」

元日本人として凄く共感できてしまうヴィルヘルムだったが、それでは進まない、と話を打ち切り、話題を転換する。

「一応、石油については目処があります」

「ほう……未来情報か？」

ヴィルヘルム2世に対してヴィルヘルムは去年、自身の経緯及び覚えている限りの史実について伝えた。

ヴィルヘルム2世を信頼しているからヴィルヘルムはそれを明かしたわけだ。

ヴィルヘルム2世自身何かあるとは疑っていたが、強いドイツが見れるならば、と思って放置していた矢先の出来事で、驚くよりも先に納得して終わったのだった。

これによりヴィルヘルムとヴィルヘルム2世との関係は悪化するどころか、より一層、強い信頼で結ばれることになった。

信頼されて悪い気はしないというのは誰でも同じだという証拠だ。

「ええ、トルコに喧嘩を売ります」

ヴィルヘルム2世はきっかり5秒経ってから問い返した。

「何が欲しいんだ？」

「リビアです。掘れば石油が出ます。できればトルコ本土にも上陸を仕掛けたいですが、さすがに海峡の領有はイギリスも認めてくれないでしょう。それに海軍も代艦の建造しか認めていないので、下手したらトルコ海軍にすら負ける可能性が高いので……そういうわけではリビアで手打ちです。今回は他の列強も認めてくれるでしょう。それで開発していたら偶々石油が出た、と」

史実でのイタリア・トルコ戦争の後、イタリアを批判する列強はいなかったことをもとにヴィルヘルムが言った。

フランス辺りが文句を言うかもしれないが、戦争に発展することはないだろう、という楽観的な予測もある。

「うむ……トルコにすら劣る海軍を嘆くべきか、それとも未来の為

の投資と我慢すべきか……」

「我慢してください。1930年代に入れば資源はともかく、工業力ではアメリカに次ぐものにしてみせますから」

がつくりとヴィルヘルム2世は肩を落とす。

「長いんだな……」

「はい。それで列強に対して我が国が被害者と装う為の策ですが、RZIA……帝国中央情報局に命じてやらせる方向でよろしいですか？」

ちなみに、帝国中央情報局をドイツ語にすると「ライヒ Reich ツェントラル Zentral インテルゲンツェ Intelligenz アゲンツル Agentur」となり、頭文字を取ってRZIAとなる。エツィア

「ああ、それで問題ない。その後の統治はどうするんだ？ 下手をすればパルチザンが沸くだろう」

「RZIAに命じて前準備を入念に行います。トルコへの不審を抱かせる方向で。それでもパルチが出てくるようなら、独立してもらいましょう。我が国が独立を保障するとすれば列強も下手には動けません。民衆を怒らせると玉座から落ちるのは歴史が証明していますから」

ヴィルヘルム2世は問題ない、と頷く。

ヴィルヘルムは付け加える。

「ところで陛下。やっぱり東南アジアや南米にももつと進出基地が欲しいですね？」

「……オランダ領東インドとギアナが目的か？」

「ええ。ついでにベルギー領コンゴも欲しいです。幸いなことに曩

肩目無しでドイツ陸軍は質では世界最高だと思われます」

隣に畑で人間が取れる国があるので嫌でも量が最高とはいえない。しかしながら、質に関しては世界最高だと確実に言えるだろう。何故なら、フォード社製のトラックや装軌式装甲車などの大量配備、更には初期型の戦車　それもA7Vといったものではなく、ルノーFT-17によって確立された現代戦車のそれと同じスタイルのものが現役の師団に配備されている。

この戦車は捻りも何もなく一号戦車と名付けられた。ヴィルヘルムが技術者達を集めて、絵に描いてみせ、これと似たようなものを作れ、金は幾ら掛かっても構わないとした成果である。

他にもカチューシャをモデルにしたロケット制圧兵器がある。

陸軍に関しては既に第二次大戦初期レベルに達しているといっても過言ではないのだ。

更に言えば兵站の徹底的な機械化・効率化を推し進めている為に現時点ではドイツ本国に近ければ物量で押し潰すことまでできたりする。

海を渡ったり、地続きではあるが遠隔地だったりすると生産量が消費量にまだ追いつかないので無理である。

ヴィルヘルムがヴィルヘルム2世を通じて国防省に口を酸っぱくして補給の重要性を説き、更には兵站省を創設した成果が出ている。

「だが、さすがにイギリスとフランスが黙っていないぞ。どうやって口実を作る？」

「イギリス、アメリカなどの記者を複数招いて、国境の向こうから撃たせるんです。勿論、撃つのはRZIAの作業員ですが、ドイツ側に向かって、第三者がいるときに撃ち込まれたならオランダ・ベルギーに反論する隙はありません」

「招く為の名目は？」

「ルール地方の見学或いは国境地帯の視察とでもして、それなりの地位にある人物が案内するのはどうでしょうか？ そうすればドイツの陰謀であると普通は思わないかと……まあ、中には疑う輩もあるかもしれませんが、ある程度は仕方ありません。ベストよりもベターです」

「ふむ……下手に他国の政府の人間を呼ぶと疑われるか？」

「はい。この手の場合は記者を呼ぶに限ります。彼らは事実をありのまま伝えてくれるでしょうから」

ヴィルヘルムの言葉にヴィルヘルム2世は大きく頷いた。

「よし、それでいこう。ところで、ティルピッツが陸軍ばかり拡張している、と文句を言ってきたいるんだが……」

「まあ、当然でしょうね。計画書は渡してありますか？」

「当然だ。今後10年は技術的成熟を待ち、人員の育成及び造船所の新設・拡充に励むことは計画書で渡してある。また航空母艦が将来は主役になるだろうことも彼は納得している」

「下からの突き上げ？」

「それもあるが、彼は大艦隊を育て上げたいのだよ。イギリス海軍に負けない大艦隊を」

「浪漫ですね」

「そうだ、浪漫だ。それにイギリスやフランスがドレッドノートに準じた戦艦を作っているという背景もある」

ふむ、とヴィルヘルムは考える。

さすがに何時までも前弩級戦艦のままでは拙いかもしれない。

だが、予算が無い。

削れる予算も無い。

そこまで考えて、ふと彼は気づいた。

国で予算が無いなら余所から持ってくればいいじゃない。

「陛下、私が……というか、クリムゾンが金を出して作ってそれを海軍がレンタルするというのはどうでしょうか？ レンタル料金は2年毎に支払うという形で。まあ、一種の後払いですね」

キャラクタービジネスから始まったクリムゾンは各業界へと進出を果たし、キールやヴィルヘルムスハーフェン、ロストックに造船所を持っている。

1905年から建設され始めたそれらは数万トンの巨大船の建造を視野に入れたものや、小型船や中型船を同時に複数起工できるものだったりと、ともかく巨大な造船所だ。

豊富な資金力にモノを言わせて人海戦術を行って、ようやく去年完成したばかりであり、現在は輸送船を作っている。

クリムゾンに限ったことではなく、他の造船会社でも徹底的な効率化が図られている為に史実の1910年時点と比べたら、起工から竣工までの期間が恐ろしく短縮されている。

具体的に言えばブロック工法の使用だったり、アーク溶接の使用だったりする。

アーク溶接に関しては実験艦を数隻作り、徹底的に試験し、改良を重ねて安全が確認された後に取り入れられた。

「ふむ……建造数は？」

「とりあえず戦艦が4隻に空母が1隻ですね。他に支援艦艇が重巡洋艦4隻、軽巡洋艦6隻、駆逐艦30隻、潜水艦10隻でどうでしょうか？」

「後払いで作れるのか？」

「クリムゾンを舐めてもらっては困りますな。全世界のチビツ子は

勿論、ご婦人方にも商品はバカ売れで、市場シェアナンバーワンです。まあ、キャラクター市場にはウチしかいませんが」

「空母自体は作れるとして、飛行機はまだモノになっていないんじゃないか？」

「ええ、現在、空軍及び海軍航空隊はパイロットの大量育成中です。しかし、何時までも海軍航空隊を陸上に置いておくわけにもいきませんから、実験的な意味も含めて、です」

「飛行機のこれからの見通しは？」

「1920年までにマトモな機体を配備できるように尻を叩いています。民需にも転用ができるので、最優先事項の一つとして」

「わかった。では、ティルピッツにはそのように伝えておく」

1911年になるとリビアやトルコにてドイツ人旅行者への窃盗・強盗事件が増加し始めると同時に、リビアにて駐屯トルコ軍による現地住民殺傷事件が急増し始めた。

しかし、トルコ政府は首を傾げるばかりであった。

実際には食うに困っていたトルコ人をRZIAが雇い、トルコ軍に偽装させてやったり、ドイツ人旅行者を襲うようにやらせたのだ。また、襲われた旅行者達も実際にはRZIAの諜報員であり、事情を知っている者にとっては茶番劇であった。

ともあれ、これで口実ができたので、ドイツはトルコ政府に対して可及的速やかな対策を行うように求めた。

さすがにいきなり戦争を吹っかけるわけにはいかないので、形式的なものだったが警告をしたのだ。

イタリアがリビアに狙いをつけていたが、ヴィルヘルム2世に許可を取った上でリビアを狙っているという情報をリークし、未回収のイタリアの回収を手伝ってもらったということから、イタリアは

今回は引き下がった。

翌年、4月18日にリビアのトブルク港にてドイツ船籍の貨物船が爆発を起こして大破、着底した。

そうして、当初の予定通りにこれをトルコ軍の仕業だとして、5月1日にオスマントルコに対して宣戦布告した。

このことに対して列強はヴィルヘルムの予想通りに静観するに留めた。

1912年5月15日、60隻以上の輸送船に乗船した上陸部隊はトルコ海軍に比べたら発展途上であり、錬度は劣るとはいえ、それでも装備の質では優れているドイツ海軍に護衛されてリビアのトリポリ、ベンガジに上陸部隊を上陸させた。

在リビアのトルコ軍による反撃が多少はあったものの、市街地周辺からトルコ軍を完全に駆逐するのに4日と掛からなかった。

砂漠地帯に逃げたトルコ軍に対してドイツアフリカ軍団はその機動力をフルに使い、ゲリラ戦を取られる前に包囲し、降伏に追い込んだ。

リビア陥落の報を受けて、予定通りにトルコ政府に対してリビアの割譲を求める講和条約を提案し、トルコ政府はこれを受諾、ドイツ・トルコ戦争は6月20日に終結した。

終結と共に早速、リビアの開発が開始された。

「ドイツアフリカ軍団の凱旋帰国……実際のところ、初の実戦が砂漠地帯ということで相当苦労したみたいですが、コレで改良が進みます」

ヴィルヘルムは「ドイツアフリカ軍団の勇姿」という大見出しが出ている新聞から目を離して言った。

彼が目を通した損害報告書と戦闘詳報では敵に撃破された一号戦車や兵員輸送車やトラックは皆無であり、砂漠の環境のおかげで故障して戦闘不能になった車両が多数に上った。

そんな2人がいるのはベルリン王宮内のテラス。

2人は朝日を浴びながら、朝食をとっていた。

「予定通りだな」

「予定通りです。パルチザンが心配ですが、トルコ政府へのネガティブキャンペーンや我が国が信教の自由を認めていることもあり、現地では今のところ、抵抗者はいない模様です」

よろしい、と鷹揚に頷くヴィルヘルム2世。

「それで陛下。そろそろ『高貴なる血』を発動させたいのですか？」

「『高貴なる血』……確か、ロシアからの貴族引き抜き計画だったな？」

「はい。ポリシェビキが出てくれば大量にこちらに逃げてくるでしょうが、それでは遅いので、今からこちらへの移住を勧めておこうと思います。ニコライ2世にもポリシェビキの脅威をしつこいくら

いに伝えるのもこの計画のうちですので、是非とも陛下には頑張っ
ていただきたい」

ロシア貴族に関しては移民ではなく、あくまで一時的な措置なの
でヴィルヘルム2世も許可している。

こうやって地道に恩を売ること、親独派を増やしていくのが狙
いだ。

また、ヴィルヘルムとしては運が良ければロシア貴族の令嬢と仲
良くなりたいなー、という極々個人的な欲望もある。

残念ながら、彼の周りにはメイドを除いて女っ気が全く無かった。

本来なら社交界にデビューして、他の貴族の令嬢とよろしくやり
たいのだが、当然ながら、機密上の問題でヴィルヘルム2世から駄
目出しを貰ったのだ。

「うむ。余としてもそなたから聞いた限り、彼らとは仲良くできそ
うにない。当然、異論などない。ところで……」

そこで、ヴィルヘルム2世が身を乗り出す。

目が好奇心旺盛な子供の如き爛々とした輝きを放っている。

「艦隊はどうなった？」

その言葉にヴィルヘルムは苦笑する。

いつまで経っても男とはこういうものであり、同じ男であるヴィ
ルヘルムも勿論、理解できた。

「各種支援艦艇は既に引渡し済みで、現在は習熟訓練を行っていま

す。主力艦艇につきましては来年4月に竣工予定です」

「そうか……戦艦と空母の性能は？」

「前に性能書を渡しましたよね？」

「別に構わないではないか」

はっはっは、と笑うヴィルヘルム2世。

彼の心情がわからないでもないのでヴィルヘルムは頭の中から主力艦の性能を引っ張り出す。

「うる覚えですが、カイザー級戦艦は35・6cm砲三連装三基、最大速度22ノット。グラーフ・ツェッペリン級空母は航空機30機搭載、最大速度27ノット……だったと思います。詳細な武装について気になるなら、しっかりと確認しておいてください。色々と新技術を盛り込んでいる為に建造費は通常の2倍以上です。小国なら国が傾きますね。支払いは10回払いで支払い完了は20年後を予定しております」

ヴィルヘルムからすれば旧式もいいところだが、この時代では最新鋭の戦艦であることは間違いない。

うむ、と満足げに頷き、更にヴィルヘルム2世は問い掛ける。

「海軍の錬度はどうなっている？」

「アメリカ海軍に数年前から教えを受けていますが……錬度は列強の中では最下位、装備の質が上なのでどうにか戦えるというレベルでしかありません。下手をすれば中堅国にも錬度は劣りますが、年々向上しているという報告を受けております」

満足げな顔で再び頷くヴィルヘルム2世。

「我がドイツは現在、総合的に見て、イギリス、フランスに勝っているか？」

「個々に見れば勝っていると思います」

その言葉にヴィルヘルムは胸を張って答えたのだった。

第4話 悪巧み（後書き）

次はバルカン戦争が勃発。

そして、ハンガリーがドイツに泣きついてきた。

国家の運営がうまくいかない、ロシアが干渉してくる、どうにかしてくれ！ みたいな感じで。

改めて難しいと実感しているんだ。

けど、頑張りたい。

第5話 火薬庫

1912年10月に史実ではバルカン戦争が勃発したが、この世界ではオーストリア・ハンガリーが解体された影響からか、11月になってもまだ勃発していなかった。

ドイツは……より正確に言えば、ヴィルヘルムとヴィルヘルム2世はバルカン半島の情勢ともう一つ、ハンガリーの情勢に目を向けている。

ハンガリーは独立当初こそ、支配者階級のドイツ人が消え、マジヤール人による国を作ろうと意気込んでいたが、すぐに躓いた。理由は主に2つあり、まず国家の運営のノウハウが彼らには無かったのである。

そして、2つ目にして、もっとも大きな理由はロシアによる干渉だった。

軍を国境に多数張り付けるなどの直接的な威嚇行為からハンガリー領内へのロシア人への優遇措置を求めるなどの間接的なものまで、日露戦争で疲弊しているとはいえ、それでもまだ強大な軍事力を背景にハンガリーに迫ったのだ。

これに対してハンガリー政府は「ドイツが独立を保障している。手を出したらタダでは済まないぞ」という風な声明を発表。

ロシアは面白い、とばかりにバルカン同盟をハンガリーに睨めた。バルカン同盟は本来ならオスマントルコに対して向けられるもの

であつたが、ドイツ・トルコ戦争にて、ドイツがリビアを得たことで、ドイツへの恩返しはもういいだろう、と思つたイタリアが動いてオスマントルコへ戦争を仕掛けようとしたのだ。

これを察知したフランスが猛反発し、イタリア近海へと艦隊を派遣。

一時は露仏同盟対独伊同盟の戦争が勃発しそうであつたが、ヴィルヘルム2世とニコライ2世が仲裁に乗り出して、事なきを得た。

こんな情勢の中でトルコに手を出す程、ニコライ2世は愚かではなかつた。

そして、バルカン同盟を囁けられたハンガリーはというと、ドイツに泣きついた。

これに対してドイツは「しょうがないな」といい人の顔をして、ハンガリー国内への義勇軍の派遣を認めさせ、また他国にはハンガリー軍が主力ですよ、とアピールの為に旧式兵器を売り払い、軍事顧問団まで派遣した。

他にもハンガリー政府の危機感を煽つて、他の日用品などの生活物資を10年間に渡る長期売買契約を結ばせ、大量購入を約束させた。

契約の中には転売の禁止も盛り込まれていたが、ハンガリー政府は渡りに船とばかりに承諾した。

ハンガリー政府は、戦争はドイツの支援があつても長期間に渡るものになる、と予測したからである。

さらには不穏分子は纏めて追放、とばかりに史実ではキューバのカストロが行つた政策を模して、ハンガリーへと不穏分子、現体制

に不満を持つ輩などを押し付けた。

具体的に言えば、希望者のハンガリーへの移住許可だったが、ハンガリー政府は独立を守る為にはドイツの言いなりになるしかなかった。

ドイツが取った政策は簡単に言えば、ドイツの現体制が気に入らない輩はハンガリーへの移住を許可・その為に補助金まで出す、というものだった。

このおかげでドイツ国内の反体制者の多くがハンガリーへと移住することになった。

ハンガリーへやってきたのは二重帝国で支配者階級だったドイツ人や不満を持つチェコ人やポーランド人などであった。

彼らは義勇軍という名のドイツ正規軍がハンガリー領内には一歩もバルカン同盟軍を入れないから安全だろう、というものだった。

しかし、彼らの考えは外れることになる。

ハンガリー政府は彼らを強制徴兵して、最前線の部隊へと配置した。

ハンガリー側の理由としては、内戦の火種となりそうな彼らを生かしておくことはできないというものだ。

戦争に掛かりきりになったところで、後ろで不穏な動きをされては堪らない。

ともあれ、実際のところ、ヴィルヘルムにもヴィルヘルム2世にもハンガリーを独立させてやる気はさらさら無く、こうなるであろうから、一時的に手放しただけであった。

あくまでハンガリーから泣きついてきたので、助けてやる。その代価に色々貰う、というやり方である。

これなら他国は文句を言えない。

無償で助けてやる程、お人好しな国家は日本くらいなものである。ましてや、生き馬の目を抜くヨーロッパではそんなことをしたら、たちまちに他国に付け入られてしまうのだ。

そして、1913年5月1日。

遂にバルカン同盟がハンガリーに宣戦布告。

ロシアがドイツを牽制する為に部分的に動員を開始。

対して、ドイツはこれには乗らずに万が一の場合の仲裁をイギリスとアメリカに頼んだ。

万が一の場合とはフランスがドイツへ侵攻してきた場合とロシアがドイツへ侵攻してきた場合である。

モンロー主義の真つ只中であつたアメリカはヨーロッパに関わることを拒否したが、イギリスは承諾した。

ドイツが艦隊法を大幅縮小し、それ以後も海軍力の増強がさして行われていないこと、3B政策の取り止めなどの方針の大転換、また、ドイツ側から友好親善訪問などを積極的に行うなどの、ラブリールをイギリスへと送ったことでイギリスはドイツに対しては友好的であつた。

リビアをドイツが植民地としたことについてはイギリスは非公式に認めてすらいる。

ロシアとフランスへの牽制の為にドイツを味方にすべきだという意見がドイツへの肩入れを後押ししていた。

史実では1904年に英仏協商が結ばれたが、ドイツが1903年に方針を大転換したが為にこの世界では結ばれず、当然、英露協商も結ばれなかったが故に日本を除けばイギリスはヨーロッパではフリーの存在であった。

1913年 5月8日 ルーマニア領内 ブラシヨヴ近郊

「調子はどうだ？」

装甲教導団の第1装甲大隊の大隊長であるハインツ・グデーリアン少佐は指揮下の各装甲中隊を見て回っていた。

彼の大隊は装甲教導団の先鋒となって5日前にハンガリー・ルーマニア国境であるルーマニア軍戦線の薄い所を砲兵の援護の下に後方へと回り込み、ルーマニア軍を包囲。

3日前には装甲教導団の本隊とルーマニア軍主力正面に展開していたドイツ義勇軍及びハンガリー軍と協同でルーマニア軍を撃破し、大量の捕虜を得ていた。

そして、2日前には再び先鋒となって、今度はルーマニア領内へと進撃していたのだった。

本来なら教育部隊にあたる教導団が前線に出てきているのは戦術

のテストや新兵器のテストの為である。

ちなみに、装甲教導団以外にも本格的な装甲師団として編成された第1装甲師団と第2装甲師団が他の戦線に義勇軍として派遣されて、同じように暴れ回っている。

「特に異常はありません。燃料補給も順調で……リビアよりは遙かにマシですよ」

第3装甲中隊中隊長のデーター・アルトマイヤー大尉は自身の乗車する2号戦車の車体を軽く叩きながらそう言った。

一号戦車は武装が7・92mm機銃を2丁装備し、小火器に耐えられる程度の装甲と最大8km/hの速度を発揮したが、今年の3月から配備が開始された二号戦車は37mm砲を1門と7・92mm機銃を2丁装備し、第二次大戦期の戦車に見た目は近づいている。

他に装甲がそこそこ向上し、速度に至っては大幅な向上が見られ、最大12km/hを発揮できる。

一号戦車の開発が始まったのが1906年、開発終了が1909年であり、二号戦車は一号戦車の開発終了と同時にすぐに開発が開始された。

ちなみに二号戦車のエンジンに関してはそれこそ、数々のドラマがあり、技師達の血と涙と汗の結晶であった。

「しかし、今までは半信半疑でしたが、ここまで有効的だとは思いませんでした」

大尉の言葉にグデーリアンは苦笑する。

リビアでは彼の大隊は全ての戦闘車両が砂によって故障し、戦闘に参加できなかったのだ。

ちなみに、戦争終了後はこの教訓が取り入れられて、エンジン部分を丸ごと交換できるようにしたり、整備がし易いように部品を簡略化したり、とこれまた技師達のドラマがあるが省略する。

現在、三号戦車が開発中だが、ヴィルヘルムがディーゼルエンジンを搭載するように、と注文をつけたのでドラマの大量生産中である。

「ともかく、頼むぞ。ルーマニア軍の主力は2日前に撃破したが、予備部隊がいる可能性がある。偵察に向かわせているオートバイ狙撃兵達が帰ってきたら、補給が済み次第出発する」
「了解」

それから30分後、偵察に向かっていたオートバイ狙撃兵達が帰ってきた。

彼らは大隊からまっすぐ20kmほど行ったところにルーマニア軍の陣地があることを報告した。

グデーリアンは予定通りに補給が済み次第、進撃を再開したのだった。

第5話 火薬庫（後書き）

史実とは大幅に離れつつある今回の話。

そもそも第一次世界大戦は起こるのか、起こるとしたらどのような起こるのか、と考える日々。

戦闘描写は難しいので今回は勘弁を。

描写はちょつとしかないですが、他の戦線でも同じように装甲師団が自動車化歩兵師団やハンガリー軍と協同して、バルカン同盟の軍を撃破しています。

トランシルヴァニア地方は二重帝国時代にはハンガリー領だった為に修正しておきました。

次回は戦後処理。

第6話 アンシュルス

後に第一次バルカン戦争と呼称されることになる、ハンガリー対バルカン同盟の戦争は1913年の8月半ば時点でハンガリー軍とドイツ義勇軍はバルカン同盟を構成する諸国の領土の大半を占領していた。

旧来の戦術とは全く違う戦術と見た事もない兵器を駆使するドイツ義勇軍の活躍のおかげで、ハンガリーとの国境付近に集結していたバルカン同盟軍はそれぞれ包囲され、撃破された。

この快進撃に最も驚愕したのはロシアであった。

このまま放置しておいてはバルカン半島からロシアの影響力が完全に失われることを危惧して、ニコライ2世はドイツと同じようにルーマニア領内へ義勇軍を派遣。

また、ドイツ・ロシア国境からドイツ領内への進撃を命じると同時に総動員を開始、フランスも呼応して総動員を開始したところで、イギリスから待ったが掛かった。

イギリスはハンガリー政府に対して、バルカン同盟諸国との講和の仲介をする用意があると公表した。

また、フランスとロシアに対して、あくまでこれはハンガリーとバルカン同盟の戦争であり、ドイツへと戦争を仕掛ける理由が存在し得ないと主張した。

そして、それでもドイツへ宣戦布告するならば、イギリスはドイツの側に立つとも付け加えた。

フランスもロシアもイギリスを敵に回すのは得策ではない、として引き下がった。

理由としては、両国とも挟撃される恐れがあったからだった。

フランスはドイツと戦っているうちに背後にイギリス軍に上陸される危険性、ロシアは背後から日本に攻撃される危険性である。

ハンガリー政府としても、さすがにヨーロッパを巻き込んだ戦争にはしたくないので、ただちにイギリスの提案を承諾し、バルカン同盟諸国も承諾した。

そして、講和会議の場でドイツの予想通りにハンガリー政府は多くの領土を割譲するようにバルカン同盟諸国に対して要求した。

同盟側は当然、猛反発した。

埒が明かないので、イギリスの提示した妥協案 あくまでハンガリーにとつてのものでハンガリー政府を納得させ、バルカン同盟諸国に妥協案を吞ませた。

イギリス側のバルカン同盟諸国を分裂させるやり方も功を奏して、予想よりもスムーズに講和条約は締結された。

講和条約によると、ルーマニア領モルダヴィア地方、セルビア領ヴォイヴォディナ地方をハンガリー領とし、他の国 ブルガリアやギリシアなど に関しては賠償金のみというものであった。

賠償金のみ、ということにした為に領土の割譲を迫られるルーマニア、セルビアに対して、この妥協案で問題ないと判断したブルガリアなどが説得するという分裂状態をイギリスは作り出すことに成功したのだった。

講和条約が締結されて、ドイツ義勇軍や軍事顧問団もドイツへと帰還して、ハンガリー政府が気分を一新して、頑張るぞ、と気合を入れたところで、今度はドイツから支払い請求がやってきた。

10年間に及ぶ売買契約を結んだハンガリー政府であったが、この契約内容を簡単に言えば、受注生産であり、かつ、キャンセル不可のものであった。

しかも、転売も契約で禁止されているから、自国内で消費するしかないという凶悪さである。

幸いにも、支払いは1年毎の分割払いである為に急場凌ぎとしてハンガリー政府は賠償金を支払いにアテたが、ハンガリー政府からしてみれば、非常に拙い事態であった。

賠償金はドイツへの支払いのみに使ったとしても、2年分が精々であり、予算が必要なところは幾らでもある為に実際には不可能だった。

これに対してドイツはまたもやいい人の顔をして、ハンガリー政府に提案した。

ドイツ政府が許可した者の移住を恒常的に認めることと、ドイツとの国境付近のハンガリー領をドイツへと売ってくれば3年分の支払いを免除するというものだった。

ハンガリー政府は渋々ドイツの提案を承諾した。

1914年5月、手始めにドイツはハンガリー西部で国境を接し

ているヴァシュ県、ジェール・モション・シヨプロン県をハンガリーから購入した。

この際にドイツはいつも通りに不満がある者はハンガリーへ移住して良い、とし、その為に補助金を出した。

なお、4ヶ月前の1月にシーメンス事件により、日本で山本内閣が総辞職したりしたが、ヴィルヘルムの心の故郷とはいえ、彼には構っている暇はなかった。

オランダ・ベルギーとの開戦工作やらドイツ系住民居住地域の組み込みなどなどの大量の仕事があったからであった。

最初は平和的にやろうと、オランダやルクセンブルクのドイツ系住民の居住地域をドイツへと組み込むべく、宣伝活動を行って、ドイツ系住民の意識を高めた。

ナチス・ドイツのように少々強引にやろうか、と当初こそヴィルヘルムは考えたものの、それよりも今まで通りの方法でやる方が成功の確率が高いと見てやめた。

イギリスにもお伺いを立てて、許可が出た為に、より大々的に宣伝をやり始めていた。

実際のところ、発展を続けるドイツはオランダやルクセンブルクよりも景気が良い為にドイツ系住民はこれを支持し、ドイツとの合併を求める運動を始めた。

この運動の高まりに、頃合良し、とドイツは各国政府に対して圧力を掛け、またイギリスもこれに続いた。

1914年10月、国民の殆どがケルト人とゲルマン人との混血であり、言語学的にもドイツ語に非常に似ているルクセンブルクがドイツとの合併を発表した。

これに続いて、やはり国民の殆どがゲルマン系であり、広義の民族的な概念という意味ではドイツ人と同じといっても過言ではないオランダが国民に押される形でドイツとの合併を発表。

内側からは国民に、外側からはイギリスとドイツに圧力を掛けられたオランダ政府には対抗する力は無かった。

その為にオランダの植民地も自動的にドイツ領となったので、ヴィルヘルムは小躍りした。

なお、オランダ領東インドでオランダ軍による反乱があったが、ボルネオ島駐留のドイツ陸軍1個師団が鎮圧に乗り出して、2ヶ月と経たずに鎮圧された。

ドイツがオランダ、ルクセンブルクを組み込んで数ヶ月が経過していた。

致命的な問題が起きなかったことをヴィルヘルムは問題に思っていた。

上手く行き過ぎている、と。

ある日、その不安をヴィルヘルム2世に打ち明けるべく、彼の執

務室を訪ねた。

豪華というよりも機能性を重視した、皇帝執務室にて、ヴィルヘルムとヴィルヘルム2世は備え付けの革張りのソファに腰を下ろして、対面していた。

「心配性だな、そなたは」

ヴィルヘルムの言葉に対するヴィルヘルム2世の返答は簡単なものだった。

「しかし、何らかの問題が発生してもいい筈です。ロシアやフランスも静観していましたし……」

「イギリスや日本を相手に回して戦争したくないのだろう。日本人は中々やるからな」

親善訪問でヴィルヘルム2世はイギリスと日本、ついでにアメリカを訪問して、各国で歓迎を受けた。

その中で一番歓迎を受けたのは日本であった。

単に皇帝という地位にある人物が日本に来るのが初めてだったからという理由もあるが、ロシアと正面切って戦う位置にあり、尊敬すべき国と思っている為であるからだ。

日露戦争を通じて、ロシアの強さを嫌という程、国全体で感じたが故であった。

この現地での交流のおかげで、ヴィルヘルム2世の日本人観に変化が生じた。

その為に日本人を少なくとも、東洋の黄色い猿と思うことは無くなっていた。

黄禍論を発表する暇など無く、今まできりきり舞いの日々だったことも一因である。

「それに、もし、そなたと同じような輩が他国に出てきた場合、速やかにスカウトもしくは処理できるようにRZIAは目を光らせている、とそなたは言っていたであろう?」

「それはそうですが、どうにも不安で仕方ありません」

煮え切らないヴィルヘルムに対して、ヴィルヘルム2世はやれやれ、と溜息を吐いた。

「そなたの不安はとりあえず置いておいて、珍しいことにニコライが手紙を送ってきたのだが……」

「手紙……ですか?」

「うむ。要約すると、各地で共産主義的な勢力が台頭しつつある。フランスは助けてくれない。どうにかして欲しい……だそうだ。ロシア軍の兵士や国民は共産主義に染まりつつあるらしい」

「そういえば、最近は逃げてくるロシア貴族が増えましたね。RZIAから不穏な動きについては聞いていますが、そこまで深刻なのですか?」

「手紙が嘘でなければそうだ。そこで、余としてはロシアがソ連になる前にロシアとは友好的な関係になろうと思う。イギリスはフランスとロシア、どちらが嫌いかと尋ねたらフランスと答えるだろうから、まだ余地がある。この件に関しては余が動くので、そなたは静観しておれ。ああ、そなたにとってはいい話があるかもしれない。社交界にも入れさせず、余のその傍で働き、ドイツをここまです導いた功績を余は高く評価している」

ニヤニヤという擬音がピツタリな笑みを浮かべ始めたヴィルヘルム2世にヴィルヘルムは嫌な予感がした。

数秒前までのヴィルヘルム2世がドイツの皇帝ならば、今、ヴィルヘルムの前にいるのは孫をからかう爺様だった。

第6話 アンシュルス（後書き）

再び、ご都合主義炸裂。

オランダ併合とかルクセンブルク併合とか、可能性は無いわけではないってくらい低い可能性なんだろうなー

何か、架空戦記っていうより発展史みたいなことになっている。

けれど、戦争して勝ちたいなら、基盤を整えないと駄目なわけで……

もっとも、戦わないのが経済的な面から見ても倫理的な面から見ても最善だけど。

第7話 火薬庫再燃

1915年3月某日。

旧セルビア領のヴォイヴォディナ地方にて、マジャール人とセルビア人との間で大規模な抗争が勃発した。

これに対して、セルビアは4月、現地セルビア人の保護を名目にヴォイヴォディナ地方へと侵攻、ハンガリーに宣戦布告した。

セルビアに続いて、残りのバルカン同盟諸国もリベンジとばかりにハンガリーに宣戦布告。

ハンガリーにとつての不幸はセルビア軍の動きが予め予期していたかのように、迅速であつたことと、しばらく戦争は起こらないだろう、という楽観的な考えにより、動員は解除され、国家の運営に力を入れていた矢先の出来事だつた。

ハンガリー政府及びハンガリー軍の対応は後手後手に回つた。

ちなみにボスニア及びヘルツェゴビナについてだが、この両地方はオーストリア・ハンガリーが手に入れようとしたが、周辺諸国からの圧力によつて諦めさせられた。

その後、イタリアが声高に領有権を主張した為に各国は認め、イタリア領となつている。

フランスですら、何も言わずに認めた。

もともと、その背景には複雑に絡み合つているところに手を出したくないというものがあつた。

ともあれ、セルビア軍はボスニア・ヘルツェゴビナには手を出さずにハンガリーにのみの絞つていた。

6月上旬時点でブタペストまであと70kmという地点にまでバルカン同盟軍が進出していた。

にっちもさっちもいかなかったハンガリー政府は再びドイツに泣きついた。

これに対してドイツはやっぱり義勇軍を派遣することを決定し、義勇軍がハンガリー入りするまでの当座をしのぐ為にハンガリー政府に武器や弾薬をはじめとした膨大な量の物資の売買契約を結ばせた。

この物資に関しては即日援助可能ということで、即座にその契約をハンガリー政府は承諾した。

これらの物資のおかげでハンガリー軍はブタペスト周辺からジリジリと同盟軍を押し戻し始めた。

そして、1915年8月9日。

バルカン同盟にとっての破局が訪れた。

数多の砲弾がバルカン同盟軍の最前線の陣地へと叩き込まれていた。

砲弾が着弾する度に土と煙が巻き上がり、ときおり人間と思われ

るものが檻樓屑のように舞う。

塹壕に籠った敵に対しては砲撃による被害はあまり無いが、それでも頭を上げさせないという役割は果たしている。

第1装甲中隊の中隊長であるデーター・アルトマイヤー大尉は二号戦車のハッチから身を乗り出して、その光景を眺めていた。

「暇ですね」

ハッチの下からそんな声が聞こえてきた。

操縦手のクルト・ベツカーが余りにも暇なので再度、話し掛けてきたのだ。

二号戦車は4人乗りであり、他に装填手、通信手がいる。

アルトマイヤーは車長兼射手であった。

三号戦車から5人に増える予定だが、その三号戦車は予想通りエンジンに手間取っており、試作車もできていない状態だった。

「あと少しで終わるだろう。事前砲撃は確か、2時間だ」

彼が言い終えたとき、唐突に砲声が止んだ。

それから数秒遅れて、最後の砲弾が敵陣地へと着弾し、土煙を巻き上げた。

アルトマイヤーはおもむろに中に入り、ハッチを閉める。

無線機を通じて、大隊長であるグデーリアン少佐が攻撃開始を命じてきたことを通信手が告げた。

「戦車、前へ（パンツァー、フォー）！」

アルトマイヤーの言葉に呼応するかのように、フォード社製のガ

ソリンエンジンが唸りを上げて、二号戦車が前へと進み始めた。

迫り来る二号戦車に対して、バルカン同盟軍は小銃や機関銃を乱射したが、何処吹く風とばかりに二号戦車は弾丸を跳ね返していく。

前進、発砲、停止を繰り返して、二号戦車の群れは陣地へと迫る。野砲ならば二号戦車を撃破できるが、その野砲は事前砲撃で潰されており、反撃する手段は無かった。

ある同盟軍の兵士は手榴弾を二号戦車の下に投げつけようとして、車載機銃により、蜂の巣にされ、決死の努力を無駄なものへと変えさせられた。

また、機関銃を撃ちまくって進軍を止めようとした2人の同盟軍の兵士はそのまま戦車に踏み潰された。

そして、ドイツ軍歩兵が二号戦車に追いついて、協同するようにとなると、同盟軍は敗走を開始したのだった。

ヴィルヘルムは執務室であることに頭を悩ませていた。

第二次バルカン戦争について、ではなく、ヴィルヘルム2世が持ってきた案件についてだ。

自身に任せるように告げた後、ヴィルヘルム2世は何度かペテルスブルク 所謂、ペトログラードへと足を運び、ニコライ2世と

会談しているのはヴィルヘルムも知っている。

ヴィルヘルム2世が持ってきた案件とは次のニコライ2世との会談に同席するように、というものだった。

今回の戦争にはロシアがそれほど支援していないというのは判明している。

ロシアの代わりに支援しているのがフランスであり、最近では史実でのルノーFT17そっくりの戦車と交戦したという報告が義勇軍から届いていた。

つまり、ロシアはそれほど拙い状況であるということだ。

そんな中で自分を同席させるなど、一体どういうことだ、と。

ヴィルヘルムにはヴィルヘルム2世の意図がさっぱり分からなかった。

第7話 火薬庫再燃（後書き）

戦闘描写は今はこれが限界。

難しい。

第8話 ペトログラードにて

1915年10月19日、ヴィルヘルムはヴィルヘルム2世と共に海路でペテルスブルクへと到着した。

非公式な訪問である為に盛大な歓迎などは無い。

2人はドイツの近衛兵に護衛されて、ドイツ製の自動車に乗り込み、冬宮殿へと向かった。

車に揺られて十数分も掛からないうちに、緑と白の石材を用いたロココ建築の冬宮殿が見えてきた。

ネヴァ川を越え、宮殿広場を横切って、真正面にきたところでヴィルヘルムは感嘆の声を上げた。

冬宮殿はベルリン王宮に勝るとも劣らない壮麗かつ壮大であった。

やがて、車は冬宮殿の門に横付けして止まった。

それぞれの護衛の車から、近衛兵達が降りて、周囲を警戒すると同時に後部座席の片方のドアを開ける。

ヴィルヘルム2世、ヴィルヘルムの順で車から降りると、同時に門の傍で待機していた1人の黒衣を纏った男が2人に近づいてきた。彼はヴィルヘルム2世に一礼し、ヴィルヘルムの前にきて、片膝をついて、頭を垂れた。

ヴィルヘルムが困惑するよりも早く、男が口を開いた。

彼の口から出てきたのはたどたどしいドイツ語であった。

「遙かな時の彼方より、よくぞお出くださいました。私が生きているうちにあなた様と会えたことを聖母マリアに感謝します」

これに対して衝撃を受けたのはヴィルヘルムだった。
すかさず、彼はヴィルヘルム2世へと問い詰めるような視線を送る。

しかし、ヴィルヘルム2世は呆氣に取られた顔であった。

「あなたは？」

ヴィルヘルムは一度、深呼吸してから男に問い掛けた。

「グリゴリー・エフィモヴィチ・ラスプーチンと申す者です。不審に思われておられるかと思いますが、皇帝陛下がお待ちしております。今は我慢してください」

ラスプーチンの先導で、ヴィルヘルム2世とヴィルヘルムは会談場所へと案内された。

その間、見目麗しい装飾などに目を向ける余裕はヴィルヘルムには無かった。

会談場所は応接室のような場所であった。

入って、右手には大窓が幾つもあり、晴天ならば太陽の光を取り込むことができるだろうが、残念ながら、今日はどんよりとした曇り空であった。

部屋の中央に置かれたテーブルとソファ、その一方に壮年の男性が座っていた。

彼は3人が部屋へと入ってくると、立ち上がって、笑みを浮かべ

た。

「久しぶりであるな」

「うむ。そなたも元気そうで何よりだ」

そんなやり取りがヴィルヘルム2世との間で行われた後、男はヴィルヘルムへと視線を移した。

「そなたがヴィルヘルム・フォン・ルントシュテットか？」

「はい。本日はロシア帝国皇帝陛下に謁見を賜り、感謝の極みにございます」

ヴィルヘルムはそう述べた後、一礼した。

その挨拶に男……ニコライ2世は軽く頷いて、ヴィルヘルム2世に問い掛けた。

「彼がドイツの宰相で間違いないのかね？」

「うむ。見た目は幼く、色々とあるが、間違い無く有能だ」

「よろしい。ならば、ルントシュテットよ。一つ、そなたに聞いた
い」

ニコライ2世はヴィルヘルムに再び視線を移した。

「何故、ストルイピンが失敗したか、簡潔に答えよ」

ヴィルヘルムは記憶の中からストルイピンについて引っ張り出す。
ヴィルヘルム2世の信頼に応える為に、ついでに株を上げる為に、
的確な解答をせねばならないのだ。

「最初がいけなかったのだと思います」

「最初……かね？」

ニコライ2世はヴィルヘルムに興味深げな視線を送り、続けるように促した。

「はい。彼は平静の後に改革を行おうとしました。しかし、その平静のやり方に問題があったのです。まずは民衆に飴を与えて甘やかしてから、鞭を振るうやり方であれば民衆はストルイピンに味方したことでしょう。民衆にとって何よりも必要なのはパンです。それが必要なだけ与えてくれる支配者であれば、彼らは誰にでも尻尾を振るでしょう」

「なるほど。他に何かあるかね？」

「陛下をご批判してもよろしいのなら、5時間は話せるほどの量がありますか？」

その言葉にニコライ2世は諦観の笑みを浮かべた。

「余にも、そなたのような者が傍におればよかったのだが……」

この言葉に対して、ヴィルヘルムは凜とした声で告げた。

「ロシア帝国の皇帝ともあろう御方が弱気になっではいけません。ヴィルヘルム2世陛下が何を仰ったのか知りませんが、ロシアを立て直す方法はまだあります」

「そのことについてだが、ヴィルヘルムを交えて、予ねてからの通り、ロシア帝国再生の最終的な内容を決定したい」

ヴィルヘルムの言葉に続いて、ヴィルヘルム2世がそう言った。

そういうわけでロシア帝国再生の最終的な内容が話し合われ、夜の帳が下りる頃にようやく決定した。

ロシア帝国再生の為には一度、ロシアを革命派の手に委ねた後、ドイツの手を借りて叩き潰すというものだった。

無論、皇帝が我先にと逃げ出すのではなく、ギリギリまで留まって戦い、最後の最後に脱出という形を取る。

またフランスが支援してくれないことは明白なので、フランスとの同盟は解消する。

これに対する報酬として、ポーランド及びバルト海沿岸部をドイツへと割譲し、バルカン半島及びトルコでのドイツの行動にロシアは妨害しないことなどが決められた。

そして革命派を叩き潰した暁にはロシアはドイツとの同盟を結ぶことも決定された。

これに関して、ヴィルヘルムはイギリスの反応を懸念したが、ヴィルヘルム2世とニコライ2世の「フランスよりはマシだろう」、「海軍は強いが陸軍は弱いから、ちょうどいいのではないか」という意見に納得してしまった。

イギリスのフランス嫌いは歴史的な経緯もあって相当なものなのであった。

そして、ニコライ2世との会談の終了後、ヴィルヘルムは1人、

グリゴリー・ラスプーチンに呼び出されたのであった。

第8話 ペトロザラードにて（後書き）

次回、ラスプーチンとの会談とロマノフ4姉妹と面会。

第9話 啓示を受けた者

ヴィルヘルムは余りの事態に頭が追いついていなかった。とりあえず、深呼吸して自身を落ち着かせて、もう一度、目の前に座っているラスプーチンに尋ねた。

「すまないが、もう一度、言ってくれないか？」

彼の言葉にラスプーチンは嫌な顔をせず、一度、頷いて再度、言葉を紡ぎ始めた。

「私は聖母マリアから4度、啓示を受けました。1度目は21歳の、農作業をしていたとき、2度目は11年前、3度目は2年前です」

ヴィルヘルムは軽く頷いて、続きを促す。

「1度目の啓示は私に病気の人を救いなさい、というものでした。私はその御言葉通りに修行し、各地を旅して病人を祈祷によって治療しました」

何とも不可思議な話だが、ヴィルヘルムは口を挟まない。

何よりも、彼自身がそういう不可思議な体験をしているのだから。

「2度目の啓示は、これからたくさんの人が死ぬ。少しでも死ぬべき運命の人を救いなさい、というものでした。私はこの御言葉通りに一番、人に影響力がある皇帝陛下の下へと行き、提言しました」

そして、とラスプーチンは続ける。

「3度目の啓示は、遙かな時の彼方より来る者、ロシアを救う。あなたがロシアを愛しているのならば、彼に協力しなさい、と」

「4度目は？」

「今朝のことです。私は夢の中で聖母マリアにお会いし、今日、西方より来る者が遙かな時の彼方より来る者だと教えてくださったのです。そして、私は今日、あなた様を見て、私は確信したのです。あなた様が、聖母マリアの言われた御方だと」

グイルヘルムは深く息を吐いた。
信じても信じなくても、彼にとっても、ドイツにとっても害は無い。

しかし、彼自身はオカルトを信じる人間であった。
無論、それはあくまで個人としてであり、公の場にそういうものを持ち込む程、愚かではない。

もっとも、戦勝祈願や繁栄祈願とかそういう、縁起を担ぐという意味では彼に限らず、誰でも持ち込むが。

「まあ、世の中、不思議なことの人が多いからお前の言い分はいいとして、だ」

最初は敬語で話していたグイルヘルムであったが、ラスプーチンの方から敬語を使わないで欲しいと言ってきたので既に使っていなかった。

「実際にお前の言ったことは合っていることだし、もし、お前が俺をどうにかするつもりならば当の昔にどうにかされている。俺が知りたいのはお前が何をやりたいのか、ということだ」

一応、ヴィルヘルムも貴族の子息ということで剣術を嗜んだり、乗馬を習ったりとしているが、それでも趣味の域は出ていない。

その手の専門家ならば赤子の手を捻るように容易く彼を殺すことができるだろうし、ラスプーチンがその気なら、暗殺者の1人や2人を部屋に潜ませていてもおかしくはない。

「私はただ、人を、ロシアを救いたいです。こんな私ですが、それでも私は人を愛していますし、祖国を愛しています」

真剣な表情で彼は言った。

「だが、俺はドイツ人だ。前は日本人だったが、今はドイツ人だ。そして、国の利益の為に動く輩だ。国家の間に友情は存在し得ない」

国家とは究極的には自分さえ良ければいいという性質のものである。

国際社会とは戦争以外で国家がしのぎを削り合う場なのである。国家の利益、所謂国益の為に国家は動き、他国よりも優位に立つとするのだ。

ヴィルヘルムの意図が読めたのか、ラスプーチンは首を横に振った。

「私が頼んでいるのは宰相としてのヴィルヘルム・フォン・ルントシュテット様ではありません。個人としてのヴィルヘルム・フォン・ルントシュテット様です」

その言葉にヴィルヘルムは目を丸くする。

ヴィルヘルム2世がセオドア・ルーズベルト大統領に言った言葉

そっくりであつたからだ。

やれやれ、とばかりに溜息を吐いて、ヴィルヘルムはラスプーチンの瞳を見据える。

「……条件がある」

「私にできることでしたら何なりと」

「ドイツとロシアの同盟が結ばれた後、お前は僧侶としての修行をしっかりとやって聖母マリアに祈りを捧げること。新たに宗教を起さないこと。政治、経済、行政、司法などの全てに関わらないこと」

ラスプーチンは目を見開き、そして深々と頭を下げたのだった。

第9話 啓示を受けた者（後書き）

キリがいいのでここで終わり。

ロマノフ4姉妹との面会までいかなかったが、すまない。

次回はロマノフ4姉妹が登場する予定、それと何かあるかも？

第10話 皇帝の娘達

翌日、ヴィルヘルムはニコライ2世、ヴィルヘルム2世と共に朝食を取るようになった。

その席上、ニコライ2世がヴィルヘルムに尋ねた。

ヴィルヘルムに許婚はいるのか、と。

何が狙いか分かったヴィルヘルムは素直にいない、と答えた。

当初は王女様とかとの結婚を狙っていた彼であつたが、ここ最近はずつかりとその目的を忘れて、国家の運営に邁進していた。

何故なら、それが非常に楽しかったからである。

自分の出した指示によつて、国が日々成長していくのに対して、ヴィルヘルムは感動すら覚えていた。

しかしながら、完全に忘れていたわけではない。

彼も男であり、可愛い女の子や綺麗な女性とお付き合いしたいと心のどこかでは思っていた。

ヴィルヘルムは名門貴族であるルントシュテット家の次男であり、事情を知る者からすれば若くして社会的地位も充分、容姿は母親譲りの金髪碧眼であつた。

そんな彼であるから、国同士の政略結婚のカードとしても十分に使えるのである。

ニコライ2世は食事の後、娘達を紹介するとヴィルヘルムに告げ

た。

ヴィルヘルムは心の準備の為に一度、与えられている客室に戻っていた。

鏡の前で髪型を整えたり、表情の練習をしたりと無駄な足掻きだが、やらずにはいらなかった。

「しがない大学生だった俺が、皇女と結婚できるかもしれないってどうだ？ 頑張れば報われるっていう資本主義社会万歳」

何だか変なことを口走っているが、何てことはない。
緊張と興奮でおかしくなっているだけだ。

実際のところ、既にヴィルヘルムがロマノフ4姉妹の誰かと婚約することはニコライ2世にとっても、ヴィルヘルム2世にとっても、ヴィルヘルムの両親であるゲルトやクララにとっても決定事項である。

そして、誰と婚約するかは今回の滞在で決まるのだ。

ロシア支援の為の会談ならば1日で事足りるのに、今回の滞在は2週間にも及ぶ。

初日を除いて、ヴィルヘルムは4姉妹の誰かと共に過ごし、双方が気に入ったならば婚約ということになっている。

昨夜、ヴィルヘルムが退席した後、ニコライ2世とヴィルヘルム2世はそれぞれ誰がヴィルヘルムを気に入るか、ということ遅く

まで激論を交わした。

ニコライ2世の意見はタチアナであり、有能だがどこことなく頼り甲斐のないヴィルヘルムをその性格で引っ張るだろう、容姿も最高だというもの。

対してヴィルヘルム2世はマリアだと主張した。

あの愛らしい天使のような容姿を男としてヴィルヘルムが放っておく筈はない、マリアも普通の貴族とはことなく違うヴィルヘルムを気に入る筈だ、と。

4姉妹がヴィルヘルムを気に入らない、という可能性はまずない。彼女達の周囲にはパーティーなどを除いては同年代の男がいない。多少なりとも気に入るだろう、とヴィルヘルム2世もニコライ2世も見ていた。

ともあれ、そんな思惑なんぞ知らないヴィルヘルムは身だしなみの確認を最後に2度行い、部屋を後にした。

待ち合わせ場所である部屋の扉を衛兵が開く。
ヴィルヘルムは深呼吸を一度して、中へと進んだ。

部屋に入っすぐのところにニコライ2世が待っていた。
彼から10m程離れた、部屋の中央には革張りのソファが2つあり、うち1つには4人姉妹が座っていた。
ちらちらと彼女達に視線を送るヴィルヘルム。

「待ちわびたぞ。準備はいいかね？」

そんな彼に対してにこやかな笑みを浮かべて、ニコライ2世が尋ねた。

ヴィルヘルムは軽く頷いた。

ニコライ2世は「うむ」と頷くと、彼と共に4人のところへ向かった。

ニコライ2世はヴィルヘルムに空いているソファに座るように指示した後、娘達に自己紹介をするように指示した。
彼の言葉に4人が自己紹介を始めた。

まず最初に明るい青い瞳と褐色のブロンド髪が特徴的な女性が口を開いた。

「長女のオリガ・ニコラエヴナ・ロマノヴァです」

流暢なドイツ語にヴィルヘルムは目を丸くした。

そんな彼にオリガをはじめ、他の2人は優雅に微笑む。

唯一、一番小柄な金髪で紺青色の大きな瞳が特徴的な少女は皇族とは思えない、まるで街娘のように笑った。

その振る舞いを見て、オリガの右隣にいる赤褐色の髪に濃い青灰色の瞳をした女性が嗜めるようにその少女を軽く睨んだ。

少女は肩を竦めてみせる。

少女の様子にやれやれ、といった風に軽く溜息を吐いて、オリガの隣にいる女性が口を開いた。

「次女のタチアナ・ニコラエヴナ・ロマノヴァです。よろしく」

オリガと同じく流暢なドイツ語で彼女、タチアナは自己紹介した。洗練された彫刻のような、高貴な顔立ちであり、4姉妹の中でもっとも美しいという評価に相応しい美貌だ。

次いで、タチアナの隣に座っている、明るい茶色の髪と大きな青い瞳が特徴的な愛らしい少女が口を開く。

「三女の MARIA・ニコラエヴナ・ロマノヴァです。よろしく」

につこりと彼女はヴィルヘルムに微笑んだ。

彼はその天使のような笑みに茫然自失してしまった。

「あら、MARIA 姉様に見惚れてらっしゃるのかしら？」

MARIA の隣にいる先ほどの少女がからかうような声で言った。

女性の扱いは陶器よりも慎重に、というのがヴィルヘルムの持論だ。

なので、彼は軽く頭を下げて告げる。

「貴女方は皆、美しいのは自明の理です。しかし、私は微笑めばより美しくなると思い、マリア皇女だけでなく、他の方々が微笑んだところを想像してしまいました」

この手の台詞は真顔で言われると胡散臭く感じないものだ。

実際のところ、一般市民としての感覚を未だに忘れていないヴィルヘルムにとってはロマノフ4姉妹は全員、絶世の美女に見えた。また、彼の職場が女つ気がメイドを除けば全くないということもあって、女の基準が酷く甘くなっていることも拍車を掛けている。

ヴィルヘルムの言葉に礼を述べるオリガ達。

からかつてきた少女も素直に礼を述べた。

こういう褒め言葉は彼女らにとっては慣れたものである。

「私が四女のアナスターシア・ニコラエヴナ・ロマノヴァ。よろしく」

最後に少女、アナスターシアが自己紹介をして、今度はヴィルヘルムの番となった。

「ヴィルヘルム・フォン・ルントシュテットです。よろしく願います」

「所用があるので、暫し席を外す。歓談していてくれ」

頃合良し、と見たニコライ2世はそう言っや否や、そそくさと部屋から出て行った。

あとは若い者同士で、というお見合いであるアレだ。

ニコライ2世が部屋を出て行った後、ヴィルヘルムは一息吐いた。やはり偉い人といると気が張るのだ。それが他国の元首ならば普段よりも気が張って当然だろう。

「ヴィルヘルム、ドイツのお話をして」

そんな彼の様子なんぞ知ったことはない、と言わんばかりにアナスターシアが口火を切った。

彼女は性格と体が一致していない。病弱でありながら、おてんばなのだ。

「アナスターシア、失礼でしょう」

「タチアナ姉様、いいでしょう？ 私、ドイツのことを知りたいわ」

「私も知りたいな」

「マリアも！」

「まあまあ、タチアナ。そんなに目くじらを立てないで」

「オリガ姉様！」

その様子にヴィルヘルムは何だかタチアナに親近感を抱いた。

おっとりした長女のオリガ、何だかんだで好奇心旺盛な妹2人に挟まれて、振り回されているということが垣間見えたのだ。

きっと彼女は性格が生真面目な為に苦労しているに違いない、と彼は思った。

彼自身も今ではそうでもないが、ヴィルヘルム2世によく振り回されたのだ。

大和型戦艦が欲しい。
自家用ジェット機が欲しい。
テレビゲームをやってみたい。

という風な具合だ。

ヴィルヘルム2世に21世紀までの出来事や軍事・文化などについて話したのは失敗だったか、とヴィルヘルムはかなり後悔したものだ。

ともかく、タチアナを助けるべく、彼は口を開いた。

「タチアナ皇女、私は別に構いませんから。それに私の方が身分的には下ですので、失礼にななりませんし」

「とんでもありません！ 父上によれば貴方はドイツで宰相にあたる御方でしょう？ ならば、ただの皇女に過ぎない私達よりも上です！」

ニコライ2世はとんでもないことを話していたのだなあ、と思い、ヴィルヘルムは遠い目をする。

彼は軽く頭を左右に振った。

「私としては貴女方に私の母国のことを少しでも知って欲しいと思っております。ですので、ここは私にドイツのことを話させてもらえませんか？」

「そういうことでしたら……」

どうにか会話の糸口を見つけたヴィルヘルムとしては色々と気を引いておきたいのだ。

彼は一度、咳払いをして話し始めたのだった。

第10話 皇帝の娘達（後書き）

どうにか年内に仕上げることができた。

来年もどうぞよろしくお願いします。

来年は最低でも2週間か1週間に1回は投稿したいです。

第11話 共産主義

「まあ、あの小説の作者なの！」

オリガが目を輝かせている。

彼女だけでなく、他の3人も目を輝かせている。

ドイツの全般的な話から、ドイツの文化へと話が移って、そこでオリガがある小説の話をした。

その小説は現代世界からファンタジー世界に行ってしまうというもので、主人公がファンタジー世界であれやこれや騒動を繰り広げるといふもの。

ヴィルヘルムがその作者は自分だ、と明かしたところからこうなっている。

21世紀では使い古されたネタもこの時代では最新なのだ。

その小説、娯楽物としてベストセラーとなっており、この世界の21世紀まで売れ続けるロングセラーとなるのだが、この時点ではまだ2巻が出たばかり。

4人から質問攻めにされるヴィルヘルムは質問に答えながらも、皇女にまで読まれているなんて、と内心吃驚していた。

ヴィルヘルムがロマノフ4姉妹と楽しい一時を過ごしている頃、ヴィルヘルム2世は今までやっていたように各地の軍の幼年学校へと赴いて、共産主義の脅威について数値や図を用いて説明していた。

当初こそ主義主張から相容れないと思っていたに過ぎなかったが、
ヴィルヘルムから聞いたソ連の誕生から崩壊に至るまでの経緯を聞
くと、自分も動かねば、と思ったのだ。

ヴィルヘルム2世は冷酷な独裁者ではない。

故にソ連の、特にスターリンのやった第一次五カ年計画による大
量の餓死者や大粛清などにヴィルヘルム2世は憤慨した。

国民あつてこそその国家であり皇帝である、ということが分からぬ
ほど彼は暗愚ではない。

その為に彼はヴィルヘルムに黙って、ロシアとの関係を強化し始
めたときから共産主義の脅威、実態を説いて回っているのだ。

それも感情的ではなく論理的に。

無論、共産主義を食い止める為に動いているのはヴィルヘルム2
世だけでなく、ヴィルヘルムも同じだった。

しかしながら、ヴィルヘルム2世がどちらかというと予防的な処
置なのに対して、ヴィルヘルムの取った対策は被害の最小限化だ。

ヴィルヘルムは史実で赤軍の英雄と呼ばれることになる軍人達、
1900年代初頭では子供であつたり赤ん坊であつたりする彼らを
家族諸共、高額の補助金と仕事を餌にドイツへと帰化させたのだ。

引き抜いた輩の例を挙げるならば、ミハイル・トゥハチエフスキ
ーやらゲオルギー・ジューコフ、イワン・コーネフ、ニコライ・ワ
トウティン、アレクサンドル・ヴァシレフスキー、セルゲイ・ゴ
ルシコフなどなどの錚々たる顔ぶれだ。

この帰化については誰にも知られぬように、ヴィルヘルムの影響

力が非常に強いRZIAによってこつそりで行われた。

何だかんだでRZIAの立ち位置は親ヴィルヘルム、つまりはヴィルヘルム派閥であるのだ。

ヴィルヘルムが情報機関育成の為に大量に予算を余所から分捕ってくることもそうであることに一役買っている。

ともあれ、将来的には史実の赤軍英雄に指揮されるドイツ軍という性質の悪い冗談が見れる可能性が高い。

ジューコフ、マンシュタイン、トウハチエフスキーの3人が同じ国家の軍の指揮を取るというのは史実では到底ありえないことだった。

他に引き抜いたのは科学者や技術者などを別にすれば政治家のニキータ・フルシチョフ、ニコライ・ブルガーニン、レオニード・ブレジネフ、ラヴレンティ・ベリヤなどの史実でのソ連指導者やNKVDの長がいる。

「とりあえず有能な人材は早いうちに集めて、優遇するなどして刷り込みをしておけ」というヴィルヘルムの指示の下にRZIA創設後の初めての仕事として引き抜かせていた。

ヴィルヘルム自身もさすがに出身地までは記憶していないが、名前だけあれば金と人手を投入して何とかなると考えていた。

RZIAの探し方としてはロシア正教会に金をばら撒いて戸籍を写させてもらったり、聞き込みを行ったり、というものであり、何とかなってしまっただ。

また、刷り込みに関してはRZIAが好意的に解釈を間違えて、

皇帝ではなくヴィルヘルムへの忠誠を誓うようにやっってしまうのだが、現時点ではヴィルヘルムはそれを知らなかった。

この活発な引き抜きにロシア側は気づいたが、彼らからしてみれば農民やら中産階級やら没落貴族やらが対象となっており、貴族階級の高級軍人であるならまだしも、引き抜く理由がさっぱり分からなかった。

史実を知っているからこそ、そして日本ではなく、ヨーロッパの白人国家であるからこそできる芸当であった。

同じ頃、バルカン半島は殺伐とした雰囲気であった。

ドイツ義勇軍とようやく態勢が整ったハンガリー軍の猛攻にバルカン同盟軍はフランスに支援されているとはいえ、持ちこたえることはできなかった。

ドイツ・ハンガリー連合軍は史実の第二次世界大戦時のアメリカの如く、砲弾を湯水のように使用し、圧倒的な火力で制圧した後に戦車を前面に押し立てて、その後を各種車両に乗車した歩兵が続くという、戦術を駆使していた。

機動力と移動速度に優れる為にバルカン同盟軍は1箇所でも戦線を突破されると、後方に回り込まれて、退路を断たれるという事態が頻発した。

無論、バルカン同盟側も先の戦争の教訓を生かして、大量のトラックを装備した自動車化歩兵師団のようなもの、更にはフランスから供与された戦車やフランス義勇軍などのカタログ的には対抗できそうな部隊が存在していたが、如何せん経験不足であった。

付け焼き刃の戦術と装備でどうにかできる程、甘い相手ではなく、そして、何よりも量が違った。

1発撃つと10発以上撃ち返されるといっとうしようもない事態なのだ。

バルカン同盟といっても、その実態は列強と比較して国力が劣る国家の集まりでしかない。

そんな彼らがフランスの支援を受けたとしても、勝てる相手ではなかったのだ。

第11話 共産主義（後書き）

今回、短め。

青田買いができるのに青田買いをやらないヤツはいないと思う。

第12話 無欲か強欲か

ロシアで成果を上げて、ドイツへと帰還を果たしたヴィルヘルムとヴィルヘルム2世を待っていたのは第二次バルカン戦争の結果であつた。

「また地図を書き換えねばならんな」

ヴィルヘルム2世の呟きに同意するように頷くヴィルヘルム。

セルビアは第二次バルカン戦争前と比べて3分の1程度、ルーマニアに至ってはハンガリー軍が強引に居座り、併合という形に持つていつてしまった。

これにより、ルーマニアという国は地図上から消えた。

ブルガリアなどはやはり賠償金のみで済んだが、この戦争は元々セルビアのみが乗り気であつたようで、今回の戦争を機にバルカン同盟から脱退する国が相次いでいた。

事実上、バルカン同盟は瓦解したことになる。

「支払いはどうなっている？」

「ハンガリー政府は今回の戦争の賠償金を代金に充ててきました。完全受注生産ですので、契約を結んだ時点で生産量が決まりますから、完全に代金が足りません。彼らはこれまでと同じように使えない兵器を抱えて喘ぐことでしょう」

ハンガリーに売り渡された兵器の中には、ドイツでは既に2戦級

戦力となった1号戦車なんていうものまであるので、維持費もそこそこ掛かる。

ヴィルヘルムとヴィルヘルム2世の狙いは金と売り払える土地を確保する為に、ハンガリーが暴れてくれることだ。

そうすれば最後には堂々とバルカン半島安定の為に、ドイツの安全保障の為にという大義名分を掲げて、ハンガリーに宣戦布告できる。

その頃にはハンガリー国内は民族同士の抗争や支払いの為に国家予算が必要なところへ回らず、より悲惨な状況になっているだろうが、ドイツとしては知ったことではない。

まさに帝国主義。

無論、事前にハンガリー政府を通さずに直接、国民を密かに援助して、親独にしておく。

これがうまくいけば、もはやハンガリーは戦う前から詰んだも同然だ。

そうなれば、ハンガリー国民に解放軍として迎えられるドイツ軍と石を投げつけられるハンガリー軍という、何だかおかしい図が見られることはまず間違いない。

その頃までに少なくとも、ハンガリー国民をドイツ国民が受け入れられるように態勢を整えておくという課題があるが、そこは発達しつつあるマスメディアを駆使することになる。

お互いにドイツ国民であるから争う必要はない、ということろまで持っていければ言うことなしたが、さすがにそこまでは無理である。

なので、次善の策としてこれまでと同じように、気に入らないなら金をやるから出て行け政策を行うことになる。

受け入れ先としては、バルカン半島に適当な国家を作ってそこに

押し付けるか、フランスに無理矢理行かせるかの2つの案がある。

無論、イギリス、フランス、イタリア、アメリカもこのドイツの最終目標……ハンガリーに喧嘩を売るだろうというところまでは預期していた。

ハンガリーが無くなればドイツと友好関係にあるロシアとの間を遮る物理的な壁は全て無くなる。

これをフランスはもつとも警戒していた。

フランスとロシアは同盟関係にあるが、ドイツがロシアにラブコールを送り始め、それにロシアが答えた辺りから徐々に険悪な関係となっていた。

もし、ハンガリーが消え、ロシアの内紛が収まれば、ロシアがフランスを切り捨てドイツにつくことは明らかだ。

それはビスマルク体制によるフランスの孤立の再来を意味する。

そうなってしまうば、ドイツは植民地を分捕る為にフランスに戦争を仕掛けるのは明白。

先のビスマルク体制との決定的な違いは、ドイツの国力が長期的な戦争にも耐えられる程に充実している点だ。

また、ドイツにとって幸運なところはやるときにやらない臆病な君主どころか、むしろ、やってはいけないときでもやろうとする好戦的な君主であり、比較的臆病な補佐がいることだ。

今まで、仕掛けようとするヴィルヘルム2世をヴィルヘルムがうまく抑えて、国力の充実に努めてくれたのだ。

おかげでドイツは 未来の知識という反則はあるものの 破滅を免れ、繁栄していた。

無論、ヴィルヘルムが過去に実感した、事實は小説より奇なり、
というご都合主義的な、運的要素もあるが。

ともあれ、何としても袋叩きにされのを防ぎたいフランスの最終的な目標はどさくさに紛れて、バルカン半島諸国をドイツへ睨けると同時に宣戦布告。

独露同盟、独英同盟を結ばれ、より強固な関係となる前にドイツを叩くというものだ。

意外なことだが、まだドイツとイギリスは同盟を結んでいない。
しかし、時間の問題であることは明らかだ。

ドイツさえ潰してしまえば後は何とかなる。

それがフランスの考えであつた。

また、列強の末席に名を連ねている日本だが、バルカンでの出来事は対岸の火事程度にしか思っていないという報告が駐日ドイツ大使から2人の下にきていた。

ともあれ、ヴィルヘルムはバルカンの紛争から世界大戦へと発展しないように一計を案じていた。

「ハンガリーにはまた現物支給してもらおうじゃないか」

「ルーマニア方面を分捕りたいと思います」

「すると、トランシルバニアか？」

「はい。ロシアとの関係が友好となつた今であるならば、飛び地を

作ってもどうにかあります。それと、先日お話した通りに……」
「うむ。代理戦争案だな」

代理戦争案と仰々しい名前だが、難しいことではない。

簡単に纏めてしまえば、ヨーロッパ列強諸国にドイツがやったようにバルカン半島の特定国家を支援して、戦争を起こさせて儲けませんか、というものだ。

ヨーロッパに限定しているのはアメリカが介入してくると利益を掠め取られたり、アメリカ的な民主主義国家を建国したり、と好き勝手やられてしまう可能性があるからだ。

幸いなことにモンロー主義が破られていないので、アメリカがヨーロッパにちょっかいを出してくる可能性は少ない。

誘うのは友好国のみでいいのではないか、とかフランスのみにしないでドイツの1人勝ちにし、得るものを無くしてしまえばいいのではないか、という意見があったが、それでは仲間外れにされた方が色々とちよっかいを掛けてくるとしてヴィルヘルムは頑として譲らなかった。

もつとも予想しやすいのは抜け駆けと取られてしまうことだ。

そうなってしまった場合、友好関係にある国家との関係が悪化してしまう。

仮想敵国にそう取られても構わないが、友好国にそう取られてしまうのは非常に拙い。

特にイギリス海軍と比べて弱体なドイツ海軍であるから、海軍国との関係が最優先だ。

今まではうまくやれてきたが、これ以上のバルカン半島でのドイツの勢力伸張はさすがのイギリスも咎めてくる可能性が高い。

ヨーロッパのバランスーとしての役割を果たしてきたイギリスは、

あくまで大陸での同盟者が欲しいのであって、覇者が欲しいわけではない。

その為に先手を打って、列強内で合法的にやれるようにする必要があったのだ。

そんな中、日本はヨーロッパではそこそこやる辺境国家程度の認識でしかなかった。

そして、代理戦争をやる為の元手も無かった。

ロシアに勝った、といっても、そのロシアの評判はヨーロッパでは力を持った田舎の成金という程度である。

ロシアの南下政策を食い止めることに成功した為にイギリスは報酬として中部太平洋のミクロネシア全域とイギリス領であるギルバート諸島を日本にソヴリン金貨1枚という格安の値段で提供している。

また、史実としての相違点として、余りにも日本の前近代的な産業基盤に嘆いたのかどうかは知らないが、イギリス人の学者や技術者などがボランティアとして日本入りし、企業などを指導して回っている。

これらのことをヴィルヘルムとヴィルヘルム2世はアメリカを牽制する為のイギリス政府の差し金と見ている。

イギリスとアメリカは現在、表向きには疎遠であるが、実際には特にイギリスはアメリカに対してよろしくない感情を抱いている。

イギリスからしてみれば、アメリカを手放したのは非常な痛手である。

しかしながら、今ではそのアメリカも相応の国力を持っているが、
為に表立って敵対するのは拙い。

幾らイギリスが強大であっても、ロシアに攻め込んだナポレオンの
ようなことには成りたくないのだ。

アメリカはその国土の広さと大西洋のおかげでイギリスによる再
征服を受けずに済んでいると言っても過言ではない。

故にイギリスはアメリカに対して可も不可もない態度を貫いてい
る。

ともあれ、代理戦争案は各国が絶対に食いついてくる、とヴィル
ヘルムは見ている。

イギリスは無論のこと、ドイツと犬猿の仲のフランスさえも、儲
けられる上に戦訓を得ることができ、あわよくばバルカン半島での
権益拡大も可能となれば食いつかないわけがない。

もともと、ロシアはさすがに余裕が無い故に指を咥えて見ている
ことになる。

しかし、ドイツへの報酬でバルカン半島の権益は手放すことにな
っているので、手を出しても意味がない、と結論するだろう、とい
うのがヴィルヘルムの予想だ。

前述したハンガリー攻撃は代理戦争の最終段階　儲けに儲けて
これ以上はないくらいにハンガリーを絞りつくした後　なのだ。

「バルカン半島についてはそれでいいとして、だ。ベルギー攻撃は
どうなった？」

「来年の4月にでも。意外と工作に手間取りまして」

「よろしい。物騒な話はこれくらいにして、だ」

ヴィルヘルム2世は咳払いを一つして、言葉を紡ぐ。

「思うのだが、ヴィルヘルム、そなたには少々欲が無さ過ぎる」
「……欲、ですか？」

鸚鵡返しの問いにヴィルヘルム2世は鷹揚に頷く。

「暗黙の了解というのが何処にもある。そなたは社交界入りしていないから知らぬのかもしれないが、貴族や王族において、妾の1人や2人いるのは当然であってな」

「はあ……」

「中には二桁の妾がいる輩もいる。ところで、そなたの母親のクララに関してだが、聞いているかね？」

その問いにヴィルヘルムは首を傾げる。

「元々はゲルトの妾だ。ああ、妾の子と蔑むわけではない。そもそも、そなたが生まれたのはクララが正妻となつてからのことだ。制度的には後妻の子ということになる。前妻のアンナは病気でな……ともあれ、ゲルトは軍では堅物の頑固者で通っていた。そんなアヤツですらも、妾を持っていたのだ」

まあ、妾を妻にするなんてことをやるのは一途なアヤツらしいが、とヴィルヘルム2世は快活に笑った。

ヴィルヘルムは道理で兄上と歳が離れているわけだ、と納得すると同時に異母兄弟でありながら、良くしてくれた兄のカールに心の中で感謝した。

「時期を見て話してくれ、と2人から言われていてな。そういうわけでもう少し何でもいいから欲を持て。なんなら、ブランデンブルク門のど真ん中に銅像を拵えても良いぞ？ 作家としての功績を

称えて云々と適当な理由をでっち上げれば問題ない」

「いや、私としてはこれでも結構、欲をかいている方なんです」

「予算を融通したり、軍に意見を通してコマンド部隊を作らせることを欲とは言わん。もっと個人的な欲だ」

「サインをもらったりするのは欲には……？」

「入るわけがないだろう」

ヴィルヘルムの趣味の一つにはサイン集めがある。

何処でも誰にでも、手帳にサインを求めているのだ。

何しろ、当時の偉人達の直筆サインは21世紀ではまず手に入らない。

今のところ、彼の最大の戦果はセオドア・ルーズベルト、ニコライ2世、ヴィルヘルム2世などがある。

「それでは親衛隊を作ってもよろしいでしょうか？」

「親衛隊？」

「はい。任務としては海外への緊急展開ができる陸海空統合の殴り込み部隊として……」

「ああ、わかったわかった。アメリカ海兵隊みたいなものだろう。

名称はナチスから取ってきたんだな」

「はい。制服もナチスを見習って、デザイナーにやってもらおうかと」

「結局のところ、個人的な欲ではないだろう」

「まあ、そうですね……」

しどろもどろに答えるヴィルヘルムに対して、ヴィルヘルム2世は溜息を吐いた。

「こういうところがそなたは日本人だな。余が日本に行ったときに知り合った日本人達も国家の為に私欲を自制するという輩ばかりだ

った」

途方に暮れたようにそう告げるヴィルヘルム2世に対して、ヴィルヘルムは意を決した。

「ええと、その、陛下。本当に何でもいいんですか？」

「好きに言ってくれたまえ」

「ロマノフ4姉妹が全員、欲しいです」

「……そうくるとは思っていた。男としてその選択肢は当然するだろうと」

最近、ヴィルヘルム2世もヴィルヘルムの漫画や娯楽小説に毒されてきている。

21世紀的な、この時代にとっては斬新かつ劇物であるそれらはある種のブームを巻き起こしていた。

特に2次創作物に関しては原作者名を明記しておけば、個人や少人数グループでの営利活動はフリーというやり方も拍車を掛けた。

そういうわけでベルリンでは年2回、2次創作物を持ち寄っての販売会が行われている。

そんな中、男性には学園ラブコメディ物や現代ファンタジー物などがバカ受けである。

特に漫画ではドイツでもっとも上手く絵を描ける絵師を探し出して、描かせている為により反響が凄い。

残念ながら、ヴィルヘルムに絵の才能はあんまりない為に話を作って絵は別人に、という形を取っている。

その漫画ではエロいようでエロくない、21世紀の漫画の常套手段である表現手法を導入している為に破廉恥だ、と批判されながらも男達には絶賛されている。

そんな中、ハーレム物も結構な人気であり、理解を得られつつある。

つまるところ、男にとってそれはまさしく浪漫であり、夢であった。

もっとも、ヴィルヘルム2世が言うように、上流階級ではハーレムのような、正妻以外の女性と関係を持ち、生活を保障するのは当然のこととして受け入れられ、また、男性の社会的地位を高めるものと、この時点では認識されていた。

その為にハーレム物は上流階級での売れ行きは今一だ。
何しろ、実際に体现できるから。

「ニコライとも協議してみるが、そなたの頑張り次第であろうな。少なくとも、先の歓談では彼から好感触だったと聞いている。可能性として3割から4割程度であろう」

3割から4割もある、と考えたヴィルヘルムは気合を入れなおした。

元々の彼の動機を考えれば更に頑張ろうとするのもまた当然のこと。

彼は2週間の中で結構、破天荒にやらかしていた。

馬でペテルブルク市内を4姉妹をそれぞれ1人ずつ後ろに乗せて駆けたり、新作のネタの為に議論したりするなど、双方にとって色々な意味で刺激的な2週間であった。

「だが、それも結局は根本的な解決にはなっていない。ドイツとロシアを結ぶという政治的な意図が介在している」

「そついの無しで、ですか？」

「うむ」

ヴィルヘルムは考える。

4姉妹ゲットの為にも、妾を令、作るのは問題外。
ならば、もっと、即物的な……

彼の脳裏に思い浮かんだのはロシアに縁のある調度品。

「それならロシアのイースター・エッグが欲しいです」

「ほう、中々いいところに目をつけたな」

「それと、イギリスやアメリカ、日本に観光で行ってみたいです」

「よかるう。1、2ヶ月程、休んで来るがよい。代理戦争案と予ねてからの予定であるイギリスとの同盟についてはこちらでやっておこう。護衛は……」

「RZIIAの腕利きを数人引っこ抜いていきます」

うむ、とヴィルヘルム2世は頷き、声を少しだけ小さくした。

「ところで、そなたも妾を持ったらどうだ？ 初夜に男がリードできないのは恥ずかしいぞ？」

「……いやでも、せめて結婚までは誠実でありたいですから……」

「何、そなたの時代と違い、今はそういうものだとは認識されている時代だ。何も問題はないだろう」

何でも無いように告げるヴィルヘルム2世にヴィルヘルムはジト目で尋ねる。

「そついうもんですか？」

「そついうもんだ」

「そついうもんですか」
「うむ」

諦めたようにヴィルヘルムは溜息を吐いた。

まあ、皇帝陛下のお墨付きならいいのかなあ、と思いつつ、護衛は全員女性にしよう、と心の中で誓った。

旅行中にこつそりと手を出す気満々であつた。

第12話 無欲か強欲か（後書き）

こんな風になった。

テストとかあるので、次回は遅くなるかもしれない。

番外編 彼の旅行 イギリス編 その1（前書き）

今回の話はオカルトが出てきます。

実際にあることなので、ノンフィクションになるっぽいですが、とりあえず注意しておいてください。

それと、いつもの政治とか外交とかとは全く関係ない話ですので、その点にもご注意ください。

一応、見ておくと本編で唐突に出てきた人物に戸惑わないで済むと思います。

番外編 彼の旅行 イギリス編 その1

1915年11月12日。

ヴィルヘルムは1ヶ月半に及ぶ観光旅行へと出発した。
最初の目的地はイギリス。

彼の主な目的はイギリスメイドと妾を手に入れ、不味いと評判のイギリス料理を食べ、ブリテン島の各地を観光することだった。

「出ると思って見てみると、如何にも、という感じだなー」

ロンドンのパンフレットを見ながら、城門の前でヴィルヘルムはそう呟いた。

彼が後ろへと視線を向ければ護衛チームがいる。

いい意味で有名というのはなく、悪い意味で有名なロンドン塔。数百年の歴史を持つ、この場所は、主に王位継承争いで破れた王妃、貴族、反逆者などを閉じ込める場所として使われてきた。

そして、残虐な拷問が繰り返し行われ、首を斧でたたき切るという残酷な処刑が長年続けられてきた忌わしい恐怖の場所なのだ。

そんな場所であるから、昼だろうが夜だろうが誰にでも見える幽

霊が闊歩していることでその手の筋では非常に有名である。

彼がこんなところにいるのは無論、観光が目的であった。

そして、もう一つ、どうにか悲劇のヒロインのような美少女幽霊を見つけて、口説いて妾にしよう、というものだ。

ヴィルヘルム2世のお墨付きであり、また、社会的に見ても妾を持つのは当然なことであるかどうか、両親に聞いて、肯定されたので彼は羽目を外すことにしたというわけだ。

しかしながら、最初の相手に選んだのが幽霊というのは何ともマニアックというか、異常というか。

実際のところ、身体を重ねたりできないのは彼も重々承知で、主に話相手とすることに決めている。

彼がそういう風に決意した理由の一つとして、神秘的なものに対する憧れのようなものがあることは確かであった。

「……人選、失敗したかなあ」

彼は今度は小声で呟いた。

ヴィルヘルム一行がロンドンに到着したのは昨日のこと。
いの一番に行くことにヴィルヘルムの心中では決定していたのが、

このロンドン塔であった。

「大丈夫です。ご安心ください」

豊かな胸を張って、そう答えるのは、美しい金色の髪を背中の中半ば辺りまで伸ばしている女性。

彼女は今回の護衛任務の為にヴィルヘルム自らRZIAから引き抜いてきたメンバーのリーダーだ。

彼女を含めて11名が護衛チームであり、全員、それなりに場数を踏んでいるベテランだ。

RZIAの仕事は多岐に渡り、情報収集とその分析という非常に地味かつ大変な作業もあるが、映画や小説であるような、荒事も無論ある。

荒事専門の部署から護衛として8名、そのサポート役に2名、そしてリーダーの彼女という構成になっている。

ちなみにリーダーの彼女、アンナは荒事専門の部署から引き抜かれている。

「アンナ、その足の震えをどうにかしてから言っただけいいんだが」

「武者震いです」

「護衛の癖に襲撃があることを祈っているのかね？」

ヴィルヘルムの切り返しにグウの音も出ないアンナは肩を落とすとして、申し訳ありません、としょんぼりして告げる。

やれやれ、と彼は肩を竦める。

他の面々も似たり寄ったりで、中には十字架を持っていたり、にんにくを握り締めている輩もいる。

「吸血鬼じゃないんだから……」

彼は今度は溜息を吐いた。

「……何とかなるだろう。たぶん、きっと、おそらく」

ロンドン塔の中で襲われたら、幽霊の皆さんに助けてもらおうかな、と割と本気で考えながら、ヴィルヘルムは城門へと歩み始めた。

そんな彼の後を慌てて追う、綺麗なお姉さん方。
何だかとても間抜けな光景だった。

ロンドン塔は監獄・処刑場であるが、それは一面に過ぎず、実際は要塞兼宮殿だ。

城壁内部の構成はホワイト塔を中心として、周囲には幾つもの塔や礼拝堂があるという、事前知識が無ければただの城にしか見えな
い外観をしている。

手始めにヴィルヘルムは一番近い塔に入ってみた。
お供のアンナ達は彼に若干遅れて、おっかなびっくり塔の中に入
った。

塔の内部をゆっくりと歩いて進んでいくと、金色の髪を長く伸ば
した少女と彼は出会った。

より正確には「出遭った」といえるだろう。

その少女は透けていて、後ろが見えていたからだ。

ここで普通の人間、もつと言えは観光客ならば吃驚して悲鳴を上げたり、大慌てで逃げ出すところだろうが、生憎、ヴィルヘルムは色々な意味で普通ではなかった。

「やあ、こんにちは。僕はヴィルヘルム・フォン・ルントシュテットという、さわやかな青年さ」

脇目も振らずに口説きに掛かった。

幽霊をナンパする男なんぞ、滅多にはいない。

もつとも、イタリア人の男なら誰でもやりそうだが。

ともあれ、彼の目的の2つのうち、1つは早速叶う可能性が出てきたことは確かだ。

彼の話す英語が通じたのか、彼女は口に手を当ててくすり、と笑った。

自分のことを自分で、さわやかな青年、とヴィルヘルムが言ったところが受けたようだ。

「今、時間はあるかな？ 良ければ僕の知っている、くだらない御伽噺を聞いてはくれないかい？」

ちなみに、彼のくだらない御伽噺とは彼の書いている小説のことだ。

その問い掛けに彼女は考える素振りを見せる。

そのことから喋れないのだろう、と彼は当たりを付けた。

そのときだった。

真横の石壁から新たに青年の幽霊が飛び出してきたのだ。

彼はヴィルヘルムへと向き直ると、身振り手振りで抗議し始めた。

「……ジェーン・グレイとその夫のギルフォード？」

ヴィルヘルムの問い掛けに青年は何度も頷き、少女の方もごめんなさい、と申し訳無さそうな顔で頷いた。

「人妻ならば仕方がない。すまなかった」

彼は2人に向けて、頭を下げた。
分かればよろしい、とばかりにギルフォードが頷く。

頭を下げておよそ30秒程経ってから、ヴィルヘルムは頭を上げた。

声が無いので、タイミングが分からないのだ。

そんな彼に問題ない、と手をひらひら振ってみせるギルフォード。

「ところで、記念にサインを貰ってもいいかな？」

ヴィルヘルムはサイン帳とペンを差し出した。

2人は頷く代わりにそのペンを床に置くように指示してきた。
ヴィルヘルムは何が起こるのか、と興味津々で床に置いた。

すると、ペンがひとりでに浮き上がった。

そして、彼が持つサイン帳に文字が書かれ始めたのだ。

「ありがとう」

2人の名前が記入されたところで、ヴィルヘルムはお礼を告げた。どういたしまして、と2人は軽く会釈した。

筆談ならできる、と踏んだヴィルヘルムは今度はメモ帳を取り出して、床に置いた。

「悪いけど、声が出る幽霊とかっているのかな？ あと、オススメの場所を教えて欲しいんだけど」

結局、質問以外にも色々と世間話をしたヴィルヘルムは2人と別れた後、アンナ達と合流した。

彼女達は市街戦でもやっているかのように、柱の1つ1つを確認しながらやってきた為に遅れに遅れていたのだ。

合流したときに飛び出してきた幽霊によって、護衛の筈の彼女達がヴィルヘルムに抱きつくというとてもない失態を犯したのだが、役得ということで彼は叱責なんぞしなかった。

ちなみに、ロンドン塔を貸し切っているわけではないので、他の観光客が当然いる。

もっとも、平日の午前なので疎らにいます程度だが、運悪く、その光景を他の観光客達に見られ、生暖かい視線を向けられた。

次に一行がやってきたのは2人に教えてもらった、とある礼拝堂だった。

他に観光客はいない。

「ヴィルヘルム様、大丈夫ですか？」

「……その前にお前達が大丈夫か？」

人間との戦闘や数字には強くても、幽霊にはまるっきり駄目なのが発覚してしまっているの、ヴィルヘルムの彼女達へのここでの信用度は無い。

彼の質問には震える声で、大丈夫だ、と答える彼女達。

ヴィルヘルムは溜息を吐いて、ずんずんと歩いて行く。

待ってくださいよー、と情けない声を上げながら、慌ててその後を追う護衛チーム。

やがて、ヴィルヘルムは、ある幽霊を見つけて立ち止まった。

その幽霊は豪華なドレスを身に纏い、金色の長い髪と白い肌、そして碧い瞳が特徴的だ。

ギルフォードとジェーンから聞いている為か、首はしっかりと、あるべき場所に収まっている。

「私はヴィルヘルム・フォン・ルントシュテット。しばし、お時間をいただけませんか？ クイーン・オブ・ブーリン」

彼の問いに彼女、アン・ブーリンは微笑んで頷いた。

彼女の容姿はエドアール・シボの描いた『ロンドン塔のアン・ブーリン』にそっくりであった。

その後、ようやく追いついた護衛チームが見たものは椅子に座って、談笑するヴィルヘルムとアンの姿だった。

ロンドンの某所にある某カフェ。

平日の午前中ということもあり、通りを行き交うのはスーツ姿の会社員と思われる輩が多かった。

道路に面したそのカフェのテラスにはある輩がいた。

テーブルに山と積まれたフィッシュアンドチップスを食うその姿は、どう見ても普通の若者である。

しかしながら、彼こそがドイツの国家統括官にして実質的な宰相であるヴィルヘルム・フォン・ルトシュテットである。
とてもそうは見えないが。

食べる手を休めて、オレンジジュースを飲んで一息吐いた彼はおもむろに上を向いた。

「フィッシュアンドチップスうめえ」

そう言って再びフィッシュアンドチップ스에齧り付いた。

彼がイギリスに来て今日で5日目。

そして、ロンドン見物に費やしたのは昨日まで。

初日にロンドン塔で彼曰く、最高の案内人を得ることができたのに無駄なく回ることができた。

その案内人とは彼の前の椅子に座って、フィッシュアンドチップスを食う彼を見て、微笑んでいる薄透明の女性だ。

そう、アン・ブーリンだ。

「よく食べるのね」

彼女が透き通る声でそう言った。

「一部の例外を除いて、何でも美味しく食べることができるのが取り柄の一つなんだ」

彼女が案内をしてくれたのだが、こうなった経緯を一言で言うとうィルヘルムが口説くことに成功したというそれだけの話だ。

口説き方としては、くだらない御伽噺から始まって、昨今の文学作品などを話題にすることで興味を引き、彼の幽霊だろうが宇宙人だろうが問題ない、という色々な意味で問題のある発言が止めを刺した。

そんな幽霊な彼女だが、ロンドンっ子は、どうとも思っていないのか、極々普通に彼女に対して挨拶してくる。

現にカフェに入ったときも、ウェイターが彼女に注文を聞く始末だ。

ロンドン塔のアン・ブーリン、と知ってのことなので、尚更性質が悪い。

ところで、ロンドン塔から離れられないのではないか、という至極当然の疑問が出てくる。

しかし、それもまた、ありきたりなやり方で解決できてしまった。

今の彼女はロンドン塔に取り憑いているのではなく、ヴィルヘルムに取り憑いている。

この取り憑くことに関してだが、彼は知らないが、幽霊とコンタ

クトを取り、共存するという事例は過去に幾らかあったりする。

ちなみに、彼女曰く、今まで口説いてきた輩は皆無だったのと。

首なしでいることが多く、また、やってくる観光客達は、お化け屋敷のお化け役みたいにしか思っていないが為に今までそういうことが無かったのだ。

少なくとも、首さえ繋がっていれば問題のない美人なのが彼女だ。

普通、幽霊が取り憑いたと聞いたなら気味悪がるところだが、彼女の場合、当の本人が昼間に誰でも見ることができ、誰とでも話することができるのでから、怖がる必要性が余りない。

そんな彼女は何処でも通り抜けできるから諜報活動に向いていると言えなくもないが、ヴィルヘルムは貴婦人にそのような仕事をやらせるつもりはさらさらなかった。

「しかし、本当に信じられない」

「何が？」

「私を妾にする代わりに、私を捨てたら自分を好きな様に殺していい、なんて本気で言ったことよ」

「分かるのか？」

「長いこと幽霊やって、色々な人間を見てきたから、人を見る目とかそういう観察力には自信があるの」

彼女はそう言って上品に笑った。

「知らない誰かなら１００万だろうが、１０００万だろうがどうに

でもできる。けれど、あなたは身内には甘い。故に、あなたに取り入ろうと、笑顔の仮面を被ってやってくる輩にあなたは裏切られることになるでしょう。もう経験しているかもしれないけど。ともかく、それが私があなたと3日間付き合っただけのこと」

「……まあ、そうだな。身内には心底甘い、と自分でも思っているよ。寂しがり屋なんですね」

彼女がそう判断した根拠となっているのはヴィルヘルムの護衛との接し方だ。

彼のポケットマネーで、ホテルは最上階から1個下の階をワンフロア全て押さえてある。

つまり、護衛チームの分も含めて部屋を取っている。

また、食事などもヴィルヘルムの奢りだ。

あくまで私的な旅行である為に経費は一切落ちない。

その為に護衛チームは全て自腹だったりする。

ヴィルヘルムの資金的な援助により、彼女達は大助かりしているのだ。

そして、ロンドン塔以後は勝手に行動しないで、トイレに行くときすらも彼女達に一声掛けて行っていることで、彼女達の負担がかなり軽減されている。

普通ならば、安全上の点から資金的な援助はするとしても、後者はやらない、とアンは考え、そこを踏まえた上での彼女の観察結果は見事に的中していた。

彼女は更に言葉を続ける。

「つまり、普通の人間ということよ。冷酷な暴君でも無ければ無欲な聖人でもない。ついでに言うなら、ちよつと純粹で甘えん坊」

寝言が可愛かったわー、と笑う彼女にヴィルヘルムは溜息を吐く。そして、護衛チームに視線を向けてみた。

彼の周りにあるテーブル席は全て護衛チームが押さえていた。

偶々、アンナと視線が合った。

彼女は笑顔を見せた。

「あら、もう他の女に手を出すのかしら？」

「……いや、さすがにそこまでやるのは勘弁して欲しいんだが」

アンのからかうような口調に肩を竦めるヴィルヘルム。

「冗談よ。私はどんなにあなたを好いても、肌を重ねることはできないし、あなたの子供を産むこともできない。あの王のようなことさえしなければ、どれだけ妾を作ろうが構わないわ」

夢げに笑う彼女にヴィルヘルムは頭を掻く。

こういうとき、どうすればいいんだ、というのが彼の本心だ。

「まあ、その、なんだ、これからよろしく」

そう言って、彼は身を乗り出した。

そして、彼女の額にキスをした。

微妙にひんやりとした感触をそのとき、彼は感じた。

「……ありがとう」

彼が身体を戻したとき、彼女は顔を俯かせて、小さくそう言った。

番外編 彼の旅行 イギリス編 その1（後書き）

ロンドン編その1。

日常的な描写だけと何か微妙に違う気が……

アメリカ編と日本編も一応、予定にあったり。

しばらく、こういう日常的な話が続く可能性が非常に高いので、内政関係を期待している方には誠に申し訳ないです。

さり気なく、大物に会ったりして色々と交渉するのが次回にあるかも。

番外編 彼の旅行 イギリス編 その2

ヴィルヘルム一行がイギリスに来て既に10日が経過していた。ロンドン観光が終わったのに、未だに一行がロンドン市内に留まっているのには、ある理由があった。

それはイギリス政府の要人との非公式な会談の為であったのだ。

ヴィルヘルムには国家統括官という公人としての立場とルントシュテット家の御曹司という私人としての立場がある。今回は私人としての立場であるので、国家統括官としてではなく、ルントシュテットの御曹司兼特使としてイギリス政府要人に接触するというものだ。

当然ながら、休みに行くのに仕事をするな、とヴィルヘルム2世が渋った。

しかし、ヴィルヘルムも慣れたもので、敢えて自分を特使とすることで国家統括官としての自分を隠す、という情報を選択してリークすることで真実を隠すというものやるべきだと主張して、ヴィルヘルム2世を説得した。

21世紀ではマスコミの常套手段となっているものでも、この時代では最先端の戦術であった。

ヴィルヘルムの最優先目標はウィンストン・チャーチル。

このとき、彼は海軍大臣であった。

第一次世界大戦は起こっており、彼の評判を落とすことになるガリポリの戦いも当然起こっていない為に彼は、その地位を追われていなかった。

ヴィルヘルムはロンドン滞在の8日目には首相であるハーバート・ヘンリー・アスキスと非公式に会談し、ドイツに対するイギリスの態度を聞き出すことに成功していた。

そして、今日はチャーチルとの会談が決まっていた。

午前10時、海軍省の大臣室にて会談は始まった。

「初めまして。ウィンストン・スペンサー」チャーチルです」

「初めまして。ヴィルヘルム・フォン・ルントシュテットです」

双方握手を交わし、革張りのソファに腰を下ろした。
口火を切ったのはチャーチルだった。

「本日はどういった御用件ですか？」

惚けたように尋ねてくるチャーチルにヴィルヘルムは思わず笑み

を浮かべてしまう。

無論、首相との非公式会談の内容についてはチャーチルにも知らされている。

しかし、敢えて彼がそう切り出したのはヴィルヘルムの様子を見る為だった。

そのことを察したが故にヴィルヘルムは笑ったのだ。

「今日は世界最強の海軍を預かる立場にあるあなたにお願いがあつて参りました」

「ほう、お願いですか？」

「ええ、お願いです」

「クリムゾンに船の発注をしろ、とでも？」

「いえ、イギリスの造船会社の仕事を取るような真似は致しませんとも。もつと別のものです」

「伺いましょう」

「戦艦を造りたいとドイツは思っております」

チャーチルは首を傾げた。

ドイツ海軍は現在、戦艦を4隻保有している。

少々老朽化しているが、改装を施しており、まだ充分通用する弩級戦艦だ。

ヴィルヘルムはチャーチルの疑問に答えるべく、言葉を続けた。

「戦艦とは国家の威信の象徴と言っても過言ではありません。イギリス海軍が多数の弩級戦艦を保有しているのはまさしく、イギリスという国家の勢いを示しているでしょう。まさに太陽の沈まぬ帝国。羨ましい限りです」

「ありがとう。イギリス人として嬉しい限りだ。それで、話を聞く限りではドイツは海軍を拡張したい、ということかな？」

「最低でも、イギリス海軍の半分程度は海外領土の防衛の為にも必

要かと思えます。また、国力に相応の軍を持つことはおかしくはないかと」

「しかし、陸はドイツ、海はイギリス、という風に役割分担をしたと思う次第です。首相閣下もそう仰ってはおりませんでしたかな？」

日本の名が出なくてヴィルヘルムは少しか寂しい気持ちになったが、当時のヨーロッパ人の感覚としてはこれが普通なので、訂正するようには言わずに質問に答えることにした。

「はい、そう仰っておりました。しかしながら、私が首相閣下にドイツ海軍について御尋ねすると、もう少し増強しても良いのではないかと仰られました。そのことから、首相閣下の御考えとしては、海外領土くらいは自分で守って欲しい、ということではないですか？」

「確かにそれは至極当然のことです。イギリス海軍としても、負担が軽減される点は歓迎するところです」

チャーチルは「しかし」と続けた。

「私が懸念するのはフランスの動向です。彼の国がドイツを敵視しているのは明白。現在は陸軍を増強している、という情報が入っておりますが、ドイツが海軍を増強するとなればフランスも海軍の増強を開始するでしょう」

「ヨーロッパのバランスとして、それはよろしくない、と？」

「その通りです。あくまで私的な意見ですが、イギリスがヨーロッパに望むのは平穏です」

「植民地経営に邁進する為に？」

ヴィルヘルムのその問いにチャーチルは曖昧な笑みを浮かべた。

ヴィルヘルムはその答えに軽く頷いて、言葉を続けた。

「チャーチル卿、そのフランスの軍拡を口実に100年戦争でイギリスが失ったヨーロッパの領土を取り戻したいと思いませんか？」

彼の提案にチャーチルは言葉に詰まった。

これは彼には知らされていない事柄であった。
アスキス首相が政治的な問題である、と判断し、軍部関係者には洩らさないように周囲に口止めしたからだ。

最低でもノルマンディー地方一帯を抑えることができればブリテン島の安全は大陸側からの攻撃という点に関しては、ほぼ確立されたといっても良い。

フランスという脅威が完全に取り除かれてしまえば、後はドイツと友好関係を維持しながら、適当にやればイギリスの繁栄は約束されているも同然だ。

もっともこれは軍事的な視点に立って見ればという話だ。
こう見ると至極簡単だが、政治的には色々と問題がある。

しかし、それでも魅力的な提案には違いない。

今は同盟国であるが、潜在的な敵国でもあるドイツの動きを牽制することにもなるのだ。

「首相閣下は何と？」

「魅力的な提案であり、検討に値する、と。取り分に関しても既に御話してあります」

「ドイツの取り分は？」

「フランスのノルマンディーやカレーなどの英仏海峡沿岸部及びア

キテーヌなどのビスケー湾沿岸部などのイギリスが失った分以外の全てです。調整に関しては政府間でやっていたきたい」

「欲張りですな」

「昔から目の敵にされてきたのでこれくらいは当然かと。最低でもフランスの全ての海外領土、シャンパーニュ・アルデンヌ、ブルゴーニュ、フランシュ・コンテは譲りたくありません。安全保障とドイツの役割から見て妥当です」

フランスとの戦いは陸上戦闘が中心となるのは明らかだ。

そして、チャーチルは最初にドイツの役割は陸上だ、と言った。

そのことを踏まえるならば、対フランスでの報酬としてヴィルヘルムが言った程度の要求をしても何ら問題はないということになる。

若輩者という侮りがチャーチルには無意識にあつた。

その為に彼は非公式とはいえ、言質を取られてしまったのだ。

彼は皮肉交じりに言った。

「君は良い政治家になれるだろうな」

「私が良い政治家ならば、あなたは良い英雄になれるでしょうな」

ヴィルヘルムは笑みを浮かべて、チャーチルにそう返したのだ。
た。

「メイドの方はどうなった？」

会談の後、迎えの車に乗るなり、ヴィルヘルムは護衛として横に乗っていたアンナにそう尋ねた。

ヴィルヘルムが要人と会っている間、彼女達はメイド候補を集めて回っていたのだ。

孤児が主な対象だ。

幼い頃からそうであるように教育してしまえば裏切ることはないだろう、というのがヴィルヘルムの予想だ。

言い方を変えれば洗脳。

もっとも、これは大抵の国ではよくあることだ。学校教育というものがその最たるものである。

「40人程集まりました」

「少ないな」

「動ける人数が少ないので無茶言わないでください」

「分かった。今度はもっと大人数でやるとしよう」

ヴィルヘルムはこれからの構想として、戦うメイドと戦う執事を養成する専門学校を造ろうとしている。

なお、この執事だが、彼の個人的な欲により、全て女性にしようと思っている。

執事と言えないんじゃないか、と彼自身思わないでもなかったが、

女性の執事は彼の幾つもある拘りの一つであつた。

普通のメイドや執事の仕事ができ、護衛としても使え、骨抜きにするのにも使える……一石三鳥だ、と彼は考えていた。

つまり、自国の要人の護衛、そして、他国からやってきた留学生や要人に接待攻勢を掛けて、親独へとしまつということだ。

私欲が多分に混じっているが、それでも一応、国の為にもなる案である為、ヴィルヘルム2世が彼を欲が無さ過ぎると言ったのも間違ひではなかつた。

番外編 彼の旅行 イギリス編 その2（後書き）

就職活動が忙しい為に次回もかなり遅れます。

番外編 彼の旅行 アメリカ編

時は既に12月前半。

ヴィルヘルム一行がイギリスからアメリカに渡って2週間程が経過していた。

東海岸に上陸した一行はニューヨーク、ボストン、ワシントンD.Cなどを観光した後、再び大統領に返り咲いたセオドア・ルーズベルトに会談を申し込んでいた。

面識があり、かつ国家統括官であるということを知っていた彼は即座に了承し、大統領としての執務との関係上、会談日は12月5日となった。

そして、会談日当日、やってきたヴィルヘルムはホワイトハウスの2階にある、イエローオーバルルームに通された。

2階のこの部屋に通されることは国家元首並みの待遇と言っても過言ではない程の厚遇であった。

冬の陽光が窓から注ぎ込み、かつ、暖炉があるおかげで程よく暖かい室内であれば誰でも気が緩むものだ。

セオドアもその例には洩れず、ヴィルヘルムが到着した時は一般的なアメリカ人らしい、オーバーリアクション気味の動作で歓迎した。

「君と会うのはこれで2度目だな」

「はい。皇帝陛下との視察のときが1度目かと」

「あのときは本当に驚いたものだ。小さな子が首相をやっているんだからな。普通なら気づかんだろう。今年で何歳に？」

「今年で15になりました。そろそろ子供だから、と相手が油断してくれない歳になりつつありまして、私の職務上、物凄く不便です」

ヴィルヘルムの言葉にセオドアは大きな声で笑う。

「それで今日はアメリカにどういった用事かな？」

一頻り笑った後、セオドアが切り出した。

ヴィルヘルムは軽く頷いて、口を開いた。

「アメリカにお願いと要望がありまして」

「ほう？」

目を細めるセオドアの様子を見つつ、ヴィルヘルムは続ける。

「単刀直入に言いまして、ドイツ海軍の増強の容認、共産主義者に対する態度、ヨーロッパで騒動が起こった場合の態度です」

「ドイツ海軍の増強については条件付で認めよう」

「条件とは？」

きたな、と思いつつ尋ねるヴィルヘルムに対して、セオドアは軽く頷く。

「日本だ」

「日本？」

「彼の国の極東でのこれ以上の勢力伸張は望ましくない」

「掣肘して欲しい、と？」

「そうだ。国益に悪影響が出る可能性が高い」

「日本は酷く不憫な位置にありますからね」

「その点に関しては同情せざるを得ないな。インド洋やアラビア海辺りにあれば、きっとこんな話をせずに済んだだろうに」

「まあ、そうなったら日本という国が建国されない可能性が高いですけど」

「それもそうだ」

お互いに同じことを思っただけで苦笑した。

そんな位置にあれば、早晚、ヨーロッパの何処かの国の植民地となっているからだ。

「北極海とかの極地にあつたならば日本はどの国とも友好的にやれただろうな」

「そうですねえ……ま、致し方ありません、日本へはドイツから働きかけるように陛下に進言しましょう」

「うむ。ならばアメリカはドイツ海軍の増強を認めよう。それで共産主義とヨーロッパでの騒動に対する態度だが……」

セオドアは身を乗り出し、興味津々と体で表現する。

「ロシアとフランスでドンパチをやるのかね？」

「その予定です」

「そうか。ヨーロッパに関わると碌なことがない、というのが国内世論だ。だが、もしそちらが必要とするならば動くことも有り得る」

「ドイツとしては好意的中立を保って欲しいのが本音です。それと個人的な意見ですが、アメリカは民主主義を発達させ、より成熟した社会を作り、世界の模範として尊敬を受けるべきだと思います。」

間違つても民主主義を他国に押し売りするような真似をしてはなりません」

「するわけがないだろう。それではアメリカの建国理念に反する……まあ、安全保障と国益の為に多少、ドンパチはするがね。ともかく、君の意見には私も無条件で大賛成だ。理想のアメリカとはそうであるべきだ。だが、理想だけでは食べていけない」

「そんなアメリカに良い仕事を持ってきました。先に言つたようにドンパチをする予定があるので、食糧を大量に買いたいのです。これが契約書です」

鞆から書類を取り出し、セオドアに差し出す。

それを受け取つた彼は目を通していき、やがて読み終わると、書類をテーブルの上に置いた。

「何とまあ、壮大な注文書だ」

呆れた顔で彼はそう言つた。

数千万トンにも上る農作物の注文書に対しての感想としては至極当然のものであつた。

「実際のところ、フランスはともかく、ロシアでは大量の国民も養わなければならないので、それくらいは最低限必要です」

「共産主義、か。実際のところ、どういふものなんだ？」

「共産党のリーダーが皇帝で、党員が貴族、あとは全部奴隷というのが私の印象です。資本の国有化で国民へ分配するとか謳つていますが、国民に分配されるまでにどれくらいが党員の懐に入るのやら。ヨーロッパのどの国とも相容れません。もっとも、世界の全員が裕福になつたという、言うならば資本主義の果てに労働は尊いものだ、という価値観が芽生えてそうなるならまだ納得はできますが」

「なるほど……」

「それにあらゆる宗教や神話を否定するというのが共産主義の特徴です」

「何故？」

「何でも科学的じゃないとか」

ヴィルヘルムの言葉にセオドアは背もたれに寄り掛かり、天井を仰ぎ見る。

「……自分達がこの世の全てを解き明かしているとも思っているのか」

彼は呆れた声色でそう言って言葉を一度切り、数秒してから再び言葉を紡いだ。

「少なくとも、我々とは相容れないな」

「では？」

セオドアは体を起こして、ヴィルヘルムに告げる。

「我々は共産主義を打倒せねばならないだろう。少なくとも、アメリカ国民はそのような体制を望んではない。ドイツとその友好国がフランスとロシアでドンパチを起こしても、アメリカは関与しない。大量の注文ももらったことだしな」

最後の部分をセオドアはおどけて言ってみせる。

その言葉を聞いて、ヴィルヘルムは安堵の息を洩らした。

結果として短期的には心の祖国である日本の利益を妨げることになるが、アメリカと戦って滅ぶよりは遥かにマシだ。

ドイツの利益と日本の利益の両方を追求し、かつ、その2つが衝突しないようにしなければならぬ、と2つの事柄をやらなくてはならないのが彼の辛いところだった。

「ところで、今日はこの後、暇かね？」

「はい」

「君に是非とも会わせたい人物がいるんだ。私の従兄弟なんだがね。今は海軍次官を務めているんだ」

「是非とも会ってみたいですね。アメリカ海軍について色々教えてください」

「うむ、きっと君も気に入ると思う。昼食は彼も交えた3人で食べよう」

セオドアに先導され、ホワイトハウスの1階にあるステートダイニングルームに到着したヴィルヘルムを出迎えたのは男性を見て、ヴィルヘルムは何処かで見たとような感じがしていた。

彼がそう思っている間にセオドアはその男性を紹介した。

「従兄弟のフランクリンだ」

「初めまして。フランクリン・ルーズベルトです」

若干緊張した声で彼はそう名乗った。

ヴィルヘルムは覚った。

若かりし頃の車椅子大統領だ、と。

そして、まさか自分が彼の大統領と話すことになるとは、と妙な気分になった。

そんな彼だったが、着席して料理が運ばれてくると、妙な気分は彼方へと吹き飛んでいった。

普通、地位の高い人物との会食は食事というよりも接待である。しかし、ヴィルヘルムは大食いであり、かつ美食家であるが為に接待なんて知ったことじゃない、とばかりな状態になる。

ヴィルヘルムの様子を見て、セオドアとフランクリンは顔を見合わせた後、微笑んだ。

まるで餌を目の前にした小犬の如きオーラが誰にでも分かるくらいに出ていたからだ。

尻尾があつたら、激しく振られているに違いない。

「食事を楽しめるのはいいことだ。ホワイトハウスの料理を存分に堪能してくれ」

セオドアの事実上の「食べてよし」という言葉にヴィルヘルムは両手を合わせて「いただきます」と言ってから食べ始めた。

昼食はボリユームたっぷりのビーフステーキ。

パンとスープとサラダがついている。

ヴィルヘルムはそんな状態でありながらも、ナイフとフォークを使いこなして優雅に食べるのは幼い頃に行われた、礼儀作法の特訓の賜物であった。

ともあれ、そんなヴィルヘルムの様子もあり、昼食は和やかな雰囲気に進み始めた。

「ところで、先ほどの『いただきます』とは一体何かね？」

セオドアのその問いにヴィルヘルムは食べる手を休める。

「日本の習慣でして、キリスト教での食べる前に主へ祈りを捧げるのと同じようなものです。材料を作ってくれた人や料理を作ってくれた人に感謝の意を示す、という意味です。他国の人との会食でも、宗教的にはまったく問題がないのでやっています」

日本、という部分にフランクリンが若干眉を顰めたが、後半の部分を聞いて、なるほど、と納得したように頷いた。

「ところで、次官殿」

「何でしょうか？」

ヴィルヘルムの呼び掛けにフランクリンは上擦った声で答えた。その様子を見て、セオドアは苦笑した。

「フランク、そう緊張するな。ヴィルヘルム君もフランクとは歳が私よりは遥かに近いのだから、兄に接するように接すればよい。今回の会談などは全て非公式であるからな」

「し、しかし、彼は……」

フランクリンはごくろ、と唾を飲み込んで、意を決したように告げる。

「あのファンタジー小説『現代人が異世界に行ってしまったようです』の作者なんです！ 作者と会った読者で緊張しない人はいるでしょうか、いやいせん！」

力説するフランクリンに目が点となるヴィルヘルムとセオドア。ヴィルヘルムの書いた小説はヨーロッパ各国で翻訳され、漫画にもなり、ベストセラーとなっている。

緻密な設定と世界観、常に一人称視点で書くという手法により、読者にはまるで自分が本当にそこに行っているかのような錯覚を引き起こせるという点と、価格が非常に安いという点が娯楽に餓えた大衆にとっては最高のものであった。

「まあ、落ち着け。深呼吸深呼吸、ひっひっふー」

興奮するフランクリンは言われた通りに「ひっひっふー」と呼吸する。

ネタで言ったのに、とヴィルヘルムは思ったが、ラマーズ法自体がまだ存在していないとはさすがに思わなかった。

「落ち着いたか？」

「はい。その、お見苦しいところをお見せしました」

セオドアの問いにフランクリンは答え、そして立ち上がり、平身低頭して謝罪する彼に思わず苦笑するヴィルヘルム。

ドイツとアメリカのこれからの関係を考えて、このことはドイツにとって有利に働くことになる、と頭の片隅でヴィルヘルムは思っていた。

そのとき、ドアが2度ノックされ、セオドアが許可を出す前に大

統領補佐官が足早に部屋に入ってきた。

そして彼はセオドアの耳元で何事かを囁いた。

セオドアは頷いて口を開いた。

「ヴィルヘルム君、君の祖国がイギリスと同盟を結んだそうだ。おめでとう」

「ありがとうございます。もっとも、アメリカで大統領から同盟締結のニュースを聞くことになるとは思ってもみませんでした」

ヴィルヘルムの言葉にセオドアが笑い、立ち直ったフランクリンも笑った。

そして、その後も穏やかな雰囲気では進んだのであった。

番外編 彼の旅行 アメリカ編（後書き）

こっそり投稿。

次は日本編の予定。

まだ就活中なので、次もかなり遅れます。

番外編 彼の旅行 日本編

1916年1月10日。

ドイツを裏で操っている、と言っても過言ではないヴィルヘルム・フォン・ルントシュテットはのんびりと朝風呂に入っていた。

年越しはアメリカのルーズベルト家で過ごしたヴィルヘルム一行が日本にやって来たのは3日前のこと。

日本側は何処で情報を掴んだのか、それとも、ヴィルヘルム2世が手を回したのかどうかは分からないが、横浜港に着いたヴィルヘルム一行を出迎えたのは驚くべき人物であった。

その人物の先導で東京の陸軍省に出向いた後、ヴィルヘルムは接待攻勢を受けて、今は奥多摩にある高級温泉旅館に連れ込まれているのだ。

旅館を貸切っているが為に他に客はいない。

静謐に包まれた露天風呂からは見事な枯山水が一望できた。

前世において、京都で見たものと似たような風景に、時代は変われど日本だ、とヴィルヘルムに強く実感させる。

おもむろに彼は隣にいる人物に声を掛けた。

「いい湯だ……そうは思いませんか？ 東條大尉？」

「はい、ルントシュテット殿。心が洗われます」

ヴィルヘルムの横にいる男の名前は東條英機。

史実では戦犯とされた人物であったが、ヴィルヘルムは出会ってから僅か数日で東條の性格を見抜いていた。

ヴィルヘルムが元日本人であり、史実を知っていたことを差し引いたとしても、彼にとって東條の性格は酷く分かり易いものであったのだ。

『天皇陛下の忠臣』

それがヴィルヘルムの東條への印象であった。

ふとヴィルヘルムはあることを思いついた。

思い立ったら即実行、善は急げ、とばかりに彼は口を開く。

「大尉、国を動かすとき、もっとも注意しなくてはならないことは何だと思えますか？」

「……私は軍人でありますので、それほど見識があるわけではございませんが、よろしいですか？」

「ええ、どうぞ。あなたの考えを仰ってください」

「それでは畏れながら……国体と陛下の赤子である臣民を護るということを前提に置くことだと存じ上げます」

「なるほど……ところで、もう一つお聞きしたいのですが、東條英機という一個人としては陸海軍は縄張り争いを一度やめて、団結して国家の危機に対応すべきだと思いますか？」

ヴィルヘルムの問いに東條は躊躇無く頷いた。

東條自身も列強と日本の差というものは痛いほど分かっている。

彼は陸軍大学在籍時、成長著しいドイツについて研究をしていた。一通りの書物を読み漁って、ドイツと比べて日本は恵まれている、と彼は実感したのだ。

敵国と陸続きではなく、また、ロシアを除けばすぐに脅威となるような国家がないという点で日本は恵まれている、と。

また、昨年12月にドイツが日英同盟に加わったことにより、万が一ロシアが復讐してきたとしても、ドイツ及びイギリスがヨーロッパで攻撃してくれる為に相対的に日本の負担は減ることになる。世界最強の誉れ高いドイツ軍ならばロシア軍如きあつという間に蹴散らすだろう、という樂觀的な予測もあつた。

ともあれ、彼が出した結論は思い切って陸海共に軍備を削減し、国力の育成に費やすべしというものである。

「ふむ……なるほど、私個人としても日本は昔から心の祖国だと思っ
ていますので、強くなってもらいたいです」

「……ありがとうございます」

深々と頭を下げる東條にヴィルヘルムは曖昧な笑みを浮かべる。
ヴィルヘルムとしてはフランクリン・ルーズベルトと初めて会食したときのような、妙な気分であった。

さっぱりした後は朝食となる。

ヴィルヘルムの要望でメニューは白米、たまねぎと豆腐のみそ汁、焼き魚、たくあん、納豆、だし巻き卵という、日本食の典型とでもいべきものだ。

朝から和食が食べられることに機嫌が良い彼が鼻歌交じりで座敷に向かうと、そこには甚平を着た見慣れぬ男の姿があった。

「おお、お待ちしておりましたぞ」

立ち上がって、にやかな笑顔でそう言ってくるその男に東條が一喝する。

「何者か！？ 無礼であるぞ！」

東條は軍刀をいつでも抜刀できるように、柄に手を掛けている。警備の兵が旅館の周囲を十重二十重に固めているが、その警備を潜り抜けてきた……というよりは正面からやってきた、と考える方が妥当であった。

ともかく、生真面目な東條にとってはこれは当然の対応であった。

「自分は陸軍大尉、石原莞爾と申します。小説家のヴィルヘルム・フォン・ルントシュテット殿とお見受けしますが？」

「そうですが……それで石原大尉。何か御用ですか？」

石原はおもむろに甚平の袖から本を取り出した。

題名は日本語ではなく、ドイツ語で書かれている。

「貴殿がやってきている、と陸軍省で小耳に挟みまして……サインをいただきたいと思った次第です」

「貴様……！」

一瞬で顔が朱に染まり、抜刀する東條。

ふー、と大きく息を吐いて、ヴィルヘルムは今にも斬りかかりそうな東條を手で制止する。

「サインだけでなく、ついでに朝食を食べていったらどうか？」

「ルントシュテット殿!？」

「では、お言葉に甘えて……」

「貴様! 図々しいにも程があるぞ! それでも帝国軍人か! 恥を知れ!」

東條は真っ赤になりながら、怒鳴りつけた。

その迫力は関係ないヴィルヘルムが吃驚するくらいなほどだ。

「はて……私は誘いにお答えしただけなのに、何故、あなたに怒鳴られなければならないのですかな？」

「何を……」

「主賓のお誘いを断る方が余程、失礼にあたるのではないのか、と私は思うのですがね」

自分のことを棚に上げて、いけしゃあしゃあとそう告げる石原にヴィルヘルムは呆れた。

そして、ヴィルヘルムは石原莞爾は記録にあるように変わり者だと認識した。

「よろしいのですか!？」

助けを求めるかのような東條の問い掛けにヴィルヘルムは首を縦

に振ってみせ、口を開く。

「あー、うん、いいから。だから、とりあえず東條大尉は落ち着いてください。血管が切れて死にますよ、そんなに顔を赤くしている」と

若干、投げやりな口調になってしまったのは彼が呆れている証拠であるともいえる。

ヴィルヘルムの言葉に豪快に笑う石原と、唸る東條。

「分かりました。石原大尉、貴様はこの後も私と一緒にルントシュテット殿を護衛しろ」

「しかしですなあ、私はこの格好でして……」

「心配いらん。兵に用意させる。ああ、それで今日の予定だが、ここを昼前に出立し、宮城に向かう。御前会議が開かれるのでな」

にやにやと笑みを浮かべてそう告げる東條に対して、石原はあからさまに嫌な顔をしてみせる。

下手をすれば物理的に首が飛ぶ。

戦時でもあるまいし、若い身空で散るのは嫌だ、と石原は思ったのだ。

そんな石原の様子を横目に見ながら、ヴィルヘルムは問い掛けた。彼からしてみれば、ただひたすらに接待されていたので、予定を聞く間が無く、寝耳に水の出来事だったからだ。

「御前会議は戦時に開かれるものではないのですか？　というか、寝耳に水なんですが……」

「申し訳ありません、私も風呂に入る前に聞いたことなので……御

前会議についてですが、基本的には重要な国策を決定する際に開かれます。イギリスからの現場におけるボランティアを受け入れるかどうかも御前会議にて陛下の御聖断を仰ぎましたので……ともあれ、ルントシュテット殿、本当に申し訳ありませんでした」

頭を下げて、謝る東條にヴィルヘルムは頭を上げるように言いつつ思った。

現場レベルとはいえ、ボランティアの受け入れにも御前会議を開くなんて、何だか随分と非効率な気がする、と。

そして、これが心の祖国の現状だと彼は悲しくなった。

「しかし、私のような一特使が陛下に謁見できるとは……正直、意外です」

「陛下はドイツについて並々ならぬ御関心を抱いております。貴殿からドイツについてお教えくだされば幸いです」

「勿論ですとも。ドイツとしては日本は極東のパートナーだと思っております。日本が変なことをやらかさない限り、ドイツはできる限り日本の味方をする、と思います」

「変な事とは例えば？」

「中国で一悶着起こすとか、ドイツの権益を脅かすようなことですね。まあ、とりあえず朝食にしましょう。お腹が空きました」

ヴィルヘルムとお供2人は昼ご飯のおにぎりとかくあんを旅館で

貰い、そのまま車で宮城へと向かった。

コンクリートで舗装された道路は皆無に等しい為にガタガタと揺られながら、のんびりとした東京の街中を走る。

ヴィルヘルムがよく目にするベルリンの光景は近代的なものであり、彼の記憶にある20世紀の東京と同じような感じだ。

無数の車が舗装された道路を走り、公共交通機関として路面電車、バス、電車、地下鉄が連日、運行している。

公共交通機関では既に蒸気機関車は姿を消していた。

味があつていいが、煙がうざつたいというヴィルヘルムの個人的な理由も絡んでいる。

今では蒸気機関車は一部の私鉄と軍で使われているくらいだ。

そんな裏事情を知らない各国大使、特に駐独アメリカ大使は本国へ「ベルリンは世界で一番発展した街である」と報告している。

それに比べたら、この時代の東京がド田舎でガツカリしたようなけれど何処かホツとしたような、ヴィルヘルムにとっては酷く変な気分であつた。

御前会議は宮城内……いわゆる、皇居内にある一室にて行われることになった。

生まれて初めて皇居に入るヴィルヘルムは緊張と興奮でそわそわと落ち着きが無く、対して石原と東條は緊張と畏れにより、そわそわと落ち着きが無かつた。

本来なら護衛の2人は皇居まで案内した時点で待機していても良い筈だが、何故か案内の近衛兵がついてくるように、と言ったが為だ。

ヴィルヘルム達が部屋に入ると、そこには嘉仁天皇を除いた主だった面々が既に揃っていた。

特にヴィルヘルムの目に止まったのは大隈重信であった。教科書でもお馴染みの明治の元勳である。

その大隈が椅子から立ち上がると次々に他の面々も立ち上がる。

御前会議に出席するのは内閣総理大臣、国務大臣、参謀総長、軍令部総長などであり、日本を動かしていると言っても過言ではない輩だ。

ヴィルヘルムはやっぱり形容し難い、変な気分になった。

「ルントシュテット殿、本日はお越しいただき誠にありがとうございます」

大隈がそう述べて、頭を下げると、他の面々も頭を下げる。

ヴィルヘルムは記憶にある、20世紀の日本の政治家達とは格が違うことを肌で感じた。

1人1人が動乱の時代を乗り越えてきた猛者であるから、当然であるかもしれない。

この人達に自分の記憶にある日本のことを教えたら、自決しかない、とヴィルヘルムは思った。

それから嘉仁天皇が入室してくるまでの間、部屋は重い雰囲気

包まれた。

大隈をはじめとした日本側の面々も緊張しているのか、落ち着きが無いようにヴィルヘルムは感じた。

そして、石原と東條はというと、2人共揃って冷や汗をかいているのがヴィルヘルムには見えた。

やがて嘉仁天皇が入室してくると、日本側の出席者は全員立ち上がった。

ヴィルヘルムも少し遅れて立ち上がる。

皇帝に接する際の礼儀作法を彼は心得ている。

全員揃って一礼し、着席する。

そして、頃合いを見計らってヴィルヘルムは書簡を鞆から取り出した。

それを侍従長の鷹司熙通が受け取り、嘉仁天皇へと渡す。

書簡はヴィルヘルム2世が書いたものをヴィルヘルムが日本語訳したものだ。

ドイツでは英語ができる者は多くいても、日本語ができる者はま
ずいない。

故にヴィルヘルムが翻訳を買って出たのだ。

侍従長から書簡を受け取り、嘉仁天皇が目を通していく。

やがて読み終えたのか、口を開いた。

「遠路遙々、ドイツからご苦勞であった。ドイツの優れた政策や技術をどうか、日本にご教授願いたい」

そう言った後、嘉仁天皇がヴィルヘルムに対して立ち上がり、頭を下げたのだ。

ヴィルヘルムが何か言う前に侍従長が「おやめください！」と叫んだ。

「馬鹿者！ 人に教えを請う時に頭を下げるのは当然のことである！ 汝らはそのようなことも知らぬのか！」

嘉仁天皇の一喝により、一瞬にして静まり返る。

ヴィルヘルムはすぐに返答をする余裕が無かった。
彼の胸中は酷く複雑である。

もし彼がこの世界でも日本人であったなら、一も二もなく肯定しただろう。

しかし、今の彼はドイツ人であり、しかもドイツの宰相でもあるのだ。

今回の旅行で前の祖国である日本に対してある程度のケジメをつける為にも、特使となったのだ。

ヴィルヘルムは咳払いを一つし、言葉を紡ぎ始める。

「陛下、私としては無償でドイツの政策や技術についてお教えしたい、と思います。しかし、私は……」

彼はそこまで言っつて、言葉に詰まった。

喉が渇き、思わず唾を飲み込む。

日本人であったときの記憶が走馬灯のように彼の脳裏を駆け巡る。

彼は目を閉じて、深呼吸を一度行い、再び覚悟を決めたかのように目を開けた。

「私は、ドイツ人です」

そう言い切った後は一気に言葉が口をついて出てきた。

「私は^{マイン・カイザー}皇帝陛下により任命されたドイツの特使です。故にその目標はドイツの利益です。ドイツの利益が結果として同盟国の日本の利益にもなるようにしたい、と私は思っています。ですので、無償での援助はできません。月謝みたいなものだとお考えください。要は等価交換です」

彼の背後に立っている東條が思わず軍刀に手を掛けたが、それを石原が慌てて押し止める。

東條の意見としては天皇陛下が頭を下げているのに何故断るのか、というものだ。

しかしながら、そのような反応をしているのは東條だけであり、他の面々は特に何ら反応をしていない。

良くも悪くも忠臣の東條なのである。

「当然であろう。して、月謝として何を払えば良いか？」

頭を上げて、嘉仁天皇がそう問い掛けてきた。

決意を固めていたのはヴィルヘルム唯一人であり、無礼打ちする気でいたのは東條唯一人である。

その東條も場の雰囲気気まずげに軍刀の柄から手を離れた。石原はその様子に安堵する。

「そうですね……大きなものが2つあります。1つ目は現時点でこれ以上中国での勢力伸張はしない、というものですね」

「中国にドイツの権益はそれほどないと思いますが……？」

青島を手放したことにより、中国でのドイツ権益は大幅に減少している。

大隈の問いにヴィルヘルムは「そうです」と肯定する。

「しかし、中国を市場として狙っている国が太平洋の向こうにあります」

「……アメリカですか」

大隈の言葉に数人が眉を顰める。

「皆さんにお聞きしたいのですが、アメリカと戦って有利な講和を結べる自信はありますか？」

それぞれが顔を見合わせ、小声での会話がなされる。

やがて意見が纏まったのか、大隈が口を開く。

どうやら代表として大隈が意見を述べるように事前に打ち合わせしてあるのだろう、とその様子を見たヴィルヘルムがあたりをつける。

「日本単独では勝ち目は無い。

先の日露戦争の日本海海戦がロシアへの決め手となったのはロシアのバルチック艦隊が一回限りだったからだ。アメリカは一度破れても何度も送り込んでくるだろう。彼の国はそれができる力がある」

彼らの意見はグレート・ホワイト・フリートを目の当たりにしたからこそ、出てきたものだ。

「そうでしょう。」

我がドイツやイギリスが加わっても、アメリカと戦うのは厳しいかと思っています。ですので、アメリカの機嫌をそれなりに取らなくてはなりません。

この点に関しては皇帝陛下も同意見です」

ヴィルヘルムはそこで一度言葉を切って、出席者の顔を見回す。

「私の意見としましては、中国北東部……具体的には東北三省をイギリス、日本、ドイツ、アメリカ、ロシアによる共同統治及び市場にしたいと思います。」

ロシアはともかくとして、アメリカは必ず乗ってくるかと。

日本が許可さえしてくればイギリス、ロシア、アメリカとは我がドイツが交渉しましょう。勿論、日本が不利にならぬよう配慮します。

そして、これが実現したとき、日本の位置が生きてくるのです。極東の憲兵として振舞えば日本の繁栄は約束されたも同然でしょう」

なるほど、と頷く面々にヴィルヘルムは理解が得られた、と確信した。

「どうですか？」

ヴィルヘルムの問いに答えたのは嘉仁天皇であった。

「我が国が列強に追いつく為には安いものだと思つ」

どうか、と嘉仁天皇は大隈に問い掛ける。

大隈は重々しく頷いて、口を開いた。

「問題点が一つあります。」

それは我が国の経済を牛耳られるのではないか、ということです。アメリカ製品の質はドイツ製品には及ばないとはいえ、日本製品よりも悔しいですが、上です。

アメリカ製品が出回ること日本製品が駆逐され、日本企業が倒産となつては目も当てられません」

「その点についてはご心配なく。アメリカと同等かそれよりも上になるように専門家に指導させます。日本製品が一定の地位を得ることができるようさせていただきます」

ヴィルヘルムの言葉に安堵の息を洩らす面々。

「同意が得られたようなので、2つ目の大きな要求に入らせてもらいます。日本にある色々な料理店や和菓子店。それらの店の支店がドイツに欲しいのです」

思わず石原が吹き出した。

「……それはつまり、日本の料理や菓子をドイツで食べたいということですか？」

大隈の問いに重々しく頷くヴィルヘルム。

「特に寿司、天麩羅、鰻、うどん、そば、最中は外せませんね。是非ともお願いします」

「ふむ……朕は特に問題ないと思うが……どうか？」

「いえ、全く問題ないと思いますが……」

信じられないという顔の大隈をはじめとした面々に対して、嘉仁天皇だけは涼しい顔をしていた。

大きな要求の2つ目により、重苦しい空気が霧散した御前会議は、より細かなドイツ側の要求とそれに対する日本側の回答、日本の要求へと移っていった。

御前会議からの帰り、今日の宿泊先となっている帝国ホテルへと近いから、と歩いて向かうヴィルヘルムとお供2人。

時刻は既に16時過ぎ。

なお、ドイツからの護衛であるアンナ達はメイド部隊に必要な人員確保の為に東京中を駆けずり回っている。

また、アン・ブーリンは一足早くドイツへと行っている。

彼女はドイツ大使館でヴィルヘルムが一筆書いて、身分証明としたのだが、幽霊である彼女に遭っても大使館員は酷く冷静であった。

そんな彼女は現在はヴィルヘルムの実家にお世話になっている。

閑話休題

あと少しでホテルというところで、1匹の黒猫がふらふらと横から歩いてきた。

そして、狙ったようなタイミングで3人の前でパタリ、と倒れた。

「……………これは狙っている……………のか？」

その余りのタイミングの良さにそんな言葉がヴィルヘルムから出て何ら不思議ではない。

「猫又の類やもしれませんか」

冗談めかして言う石原にヴィルヘルムはゆっくりと猫に近づいて行く。

そして、猫を優しく抱き上げる。

「……傷は無い……空腹で倒れたのか？」

これも何かの縁だろう、とヴィルヘルムは黒猫を飼おうと決意した。

日々の激務への癒しとして、である。

「というわけでこの猫を飼おうと思いますので、あしからず」

お供の2人にそう宣言したヴィルヘルムの腕の中で猫が一声、弱弱しく鳴く。

その鳴き声は「お腹が空きました」という風に彼には聞こえた。

「名前は燐でいいな。今日からお前は燐だ。渾名はお燐。そういうわけで早速美味しいものを食わせてやろう」

このときのヴィルヘルムの脳裏に火車を引いて、死体を集める某猫又少女の姿が描き出されていたかどうかは定かではない。

ともあれ、彼は猫を撫でながら、帝国ホテルで出されるであろう、豪華な夕食に思いを馳せたのだった。

番外編 彼の旅行 日本編（後書き）

次回更新はやっぱり未定。

第13話 第1次海軍補充計画

1916年の2月某日にヴィルヘルムはドイツに帰還した。帰還した彼はヴィルヘルム2世に詳細な報告を行った後、予想通りに溜まっていた仕事の処理に掛かった。

溜まった仕事が一段落ついた3月上旬。

ヴィルヘルムはレーゲンスブルク郊外にある森林地帯に設けられたある施設を訪れた。

生命研究センターというのがその施設の名前であり、ヴィルヘルムの強力な後押しによって1910年に設立されたものである。

表向きには先進的な医療を研究する施設であり、所長にはフリッツ・ハーバーをはじめとした、ドイツでも特に優秀な研究者や学者が集められていた。

なお、ハーバーだが、ヴィルヘルムによる技術振興政策により、史実よりも早くアンモニア合成法……いわゆる、ハーバー・ボッシュ法をカール・ボッシュとの共同研究で完成させている。

さて、この生命研究センターだが、実際には化学兵器・細菌兵器の開発及びその対策を主目的として設立されたものだ。

これらの兵器は後の世では「貧者の核兵器」と呼ばれており、費用対効果が高く、また恫喝という外交カードにも使える。

無論、実戦において化学兵器禁止条約、生物兵器禁止条約などは

まだ影も形もない時代であるので使えないこともない。

また、ヴィルヘルムはハーバーの研究センター所長就任に伴い、ヴィルヘルム2世が同席する下で自身が実質的な宰相であることを明かしていた。

そうした方がより効率的であるとヴィルヘルム2世が判断したからだ。

ハーバーは研究者、つまり知識探求の中毒者である。

技術者や研究者、学者が他国に比べて遥かに優遇されていることを彼は実感しており、またヴィルヘルムの後ろ盾がある方が融通が利くと判断し、特に文句を言うこともなくヴィルヘルムが子供にも関わらずに宰相であることを受け入れた。

研究センターの応接室にてハーバーとヴィルヘルムは相対した。

「本日はベルリンからご苦勞様です」

ハーバーの挨拶に軽く会釈してヴィルヘルムは切り出した。

彼が来たのは視察ではなく、予ねてからハーバーに最優先で開発させていたものが完成したという連絡がきたからである。

「早速だが、聞かせてもらおう」

「はい。プロジェクトNPが完了致しました。ワクチンの方も順次量産に移れます」

「よろしい。引き続き各プロジェクトを続けてくれ」

プロジェクトNP

NPとはノイエ・ペストの略称である。

日本語にするならば新黒死病とでも訳すだろう、このウイルスは史実において数年後に猛威を奮うことになる『スペイン風邪』と似たようなものである。

これはヒトが免疫を持たない鳥インフルエンザを採取・改良することによって開発されたものだ。

このウイルスの開発に際して、1年間耐えたら無罪放免という条件を下に刑務所から死刑囚、無期懲役刑とされた者などの重犯罪者を連れてきて検体として使っている。

彼らは生物兵器・化学兵器の発展、転じて医療などの発展に大きく寄与していた。

なお、彼らのうち、ワクチンの検体となった者は1年間を耐え抜き、釈放されている者も数人いる。

しかしながら、不思議なことに全員が釈放から1ヶ月以内に事故死或いは病死していた。

「使うのですか？」

「わからん」

ハーバーの問いにヴィルヘルムはかぶりを振った。

「できれば使わないで欲しいです」

ハーバーの言葉にヴィルヘルムは重々しく頷く。

ヴィルヘルムとしても使わないうで済ますのが倫理的に見ても最善である、という考えだ。

しかしながら、使える手は多いに越したことは無いというのもまた事実なのである。

ヴィルヘルムは話題をええるべく、切り出した。

「検体は足りているかね？」

「はい、問題ありません」

「そうか。君らには物理的にも精神的にも苦勞を掛けるが、ドイツの為に尽くして欲しい」

ハーバーは力強く頷いた。

生命研究センターから帰還して数日後、ヴィルヘルムはヴィルヘルム2世と国威発揚の為にイギリス、アメリカからお墨付きをもらったドイツ海軍の拡張に乗り出すべく案を纏めようとしていた。

1916年3月時点でドイツ海軍は弩級戦艦を4隻、小型空母1隻、重巡洋艦6隻、軽巡洋艦8隻、駆逐艦30隻、潜水艦40隻を保有していた。

無論、これらの他にも沿岸警備の為に小型の海防艦やら哨戒艇やら駆潜艇なども多数保有している。

なお、巡洋艦の区別は史実のロンドン海軍軍縮条約に準じた区別である。

この区別もヴィルヘルムが重巡洋艦と軽巡洋艦の区別が無いと嫌だという極々個人的な理由により導入されたものだ。

ともあれ、1個艦隊としてならば十分な戦力であるが、これがドイツ海軍の全てとして考えると非常に心許無い。

もつとも、今ある艦艇は技術の蓄積と向上の為のものであるとヴィルヘルム2世、ヴィルヘルム、軍上層部はそう割り切っていた。

これは海軍だけでなく、陸軍、空軍も同じような傾向だ。

軍の規模は労働力獲得の為に削減された影響もあり、他の列強よりも小さい。

しかし、その為に維持費や人件費などが浮き、技術研究などに予算が多く振り分けられるが為に各軍は試行錯誤を繰り返しながら、より効率的な戦術・戦略の模索、将校や兵の育成などに力を入れていた。

平時にはある程度の軍で充分なのだ。

「やはり戦艦は欲しい」
「道理です」

ヴィルヘルム2世の言葉にヴィルヘルムは即座に肯定した。

1900年代初頭において、戦艦とは圧倒的な力を持った海の女王として君臨している。

外交のカードにも使える戦艦は後の世の核兵器と似ているところがある。

「しかしながら陛下。中途半端な戦艦を作れば他国も同じように造り、結局は数の勝負となってしまいます。故に大艦巨砲主義の極致とも呼ぶべき、これ以上の戦艦は存在しないというものを造る必要があります」

ヴィルヘルム2世は珍しく軍拡に乗り気のヴィルヘルムを不思議に思った。

彼の予想ではヴィルヘルムは経済上の観点から軍拡を渋るというものであり、予想を180度裏切られた形になる。

「君の案を聞こう」

ヴィルヘルム2世の問いにヴィルヘルムは胸を張り、告げた。

「80cm砲搭載の戦艦です。それも3連装4基の」

ヴィルヘルム2世は首を傾げた。

そして聞き間違いではないか、自身の耳を疑い、確認の意味を込めて再び尋ねる。

「もう一度言ってくれないかね？」

「80cm砲3連装4基搭載の戦艦を造りましょう」

ヴィルヘルム2世は肩を竦める。

幾ら飛ぶ鳥を落とす勢いのドイツでもそれは無理だと彼は素直に思った。

その様子を察したのか、ヴィルヘルムは補足すべく、言葉を紡ぐ。

「勿論、今すぐに造れというものではありません。1938年くらいに設計が完了し、1941年か42年辺りに完成すれば問題ないです」

「……即効性に欠けるな。それに問題も多い」

主な問題点としては停泊できる港が無いこと、キールやスエズなどの運河や狭い海峡が通れないこと、建造費・維持費が莫大なものとなることが挙げられる。

また、将来的に航空機が主力となるのならば最終的には無用の長物と化してしまう可能性が高いという点も見逃せない。

ヴィルヘルムはすかさず答えた。

「陛下は私に欲が無い、と仰いました。ならば、私はここで欲の為に国家を使わせていただきます」

その言葉にヴィルヘルム2世はやられた、と両手を上げる。

ヴィルヘルムはその返事に満足し、この戦艦を設計・建造する際のメリットを述べ始めた。

メリットを要約すれば3つに纏められる。

それは各種技術の蓄積と向上、港湾の拡張・浚渫などの大規模公共事業による経済の活性化、国威発揚であった。

少なくとも、最後に挙げた国威発揚という点では最高の成果を上

げるだろう、とヴィルヘルムは考える。

どんなに役に立たないシロモノができたとしても、80cm砲を搭載した超巨大戦艦であると聞けば普通の一般市民は驚愕し、ドイツの力を思い知るだろう……というものだ。

それにこれを建造すればドイツ国内における大艦巨砲主義者達を完全に黙らせることができる。

実際のところ、ヴィルヘルムが提案した理由としては「80cm砲搭載した戦艦って浪漫溢れる代物だから、絶対に建造せねばならない。ドイツといえば変態兵器。変態兵器の無いドイツなんてドイツじゃない」という極々個人的なものによる。

少なくともハウニヴーよりは現実味のある代物だということは確かだ。

「太平洋に回航するときはどうするのだ？」

「スエズ運河とマラッカ海峡の拡張と浚渫をイギリスに持ち掛けます。費用はドイツ持ち、将来的な大型艦の通行の為に云々と口で丸め込めば許可してくれるでしょう」

「建造費と維持費は？」

「4隻建造することでコストを下げると同時に国民に募金を募ります。世界に冠たる祖国の為に協力しよう、と宣伝すればたぶん募金してくれるでしょう。いざとなればユダヤ人から雀り取れば済むことですし」

ヴィルヘルムの言葉を聞いていくうちにヴィルヘルム2世は感じ

た。

もしかして、造れるんじゃないか、と。

「よろしい。ならば一連のその戦艦の計画を『レーヴァテイン』と名付けよう。ドイツの剣という意味を込めて、だ」

「ありがとうございます。では次に……」

それから2人は延々と話し合い、夕方になってようやく案が纏まり、草案という形で国防大臣へと渡された。

そして、そこで修正などがなされた4日後、正式に決定された。

第1次海軍補充計画と名付けられたこの海軍増強案によれば、1923年3月までに戦艦4隻、空母2隻、重巡洋艦4隻、軽巡洋艦6隻、駆逐艦30隻、潜水艦20隻を補充することになる。

また、これとは別にレーヴァテイン計画が進められる。

第1次海軍補充計画の為に特別予算が認可されるが、この計画を隠れ蓑にしてレーヴァテイン計画の予算も下りることになる。

レーヴァテイン計画に関しては国防大臣、海軍総司令官は勿論、意外にも陸軍総司令官、空軍総司令官らも乗り気であった。

海軍に貸しをすることで次回の予算では海軍から譲歩を引き出すという目論見は当然あるが、ドイツ人として祖国の偉大さを示すことができるという個人としての考えもあった。

建艦速度は非常にスローペースだが、海では差し迫った脅威は存

在しないので問題は無かった。

1916年4月1日

ドイツ・ベルギー国境地帯を某高官がドイツは勿論、イギリス、アメリカ、日本の記者団を引き連れて視察をしていたところ、ベルギー国境から数発の銃弾がドイツ側に対して撃ち込まれた。

幸いにも記者団と高官に怪我は無く、守備していたドイツ国境警備隊はただちに反撃を行った。

その日の夕方にはヴィルヘルム2世が「ドイツへの挑発行為であり、断固とした措置を取らねばならない」という旨の声明を発し、記者団が特ダネとしてこの事件を本国に伝え、各国首脳部に情報が伝わったところでドイツは新たに行動を起こした。

ベルギー政府の外務大臣へと駐白ドイツ大使が手渡したドイツ政府の提案ではベルギー領コンゴのドイツへの売却であった。

ベルギー政府はこの提案を拒否すると共にドイツとの一戦は避けられぬと判断し、総動員を開始。

なお、ベルギーに手を出すことはイギリスが安全保障上の理由から普通ならば戦争を仕掛けるところだが、昨年の同盟に参加する際

にある協定をドイツとイギリスは結んでいた。

その協定を要約するならば、ドイツがベルギー領コンゴを領有するに際してイギリスは特に関与しないが、代わりにフランスの大西洋及び海峡沿岸部を全てイギリス領とするというものだ。

この協定はフランス分割という提案にイギリスが乗り気になった証拠でもある。

そして1916年5月16日午前11時、ドイツはベルギーに対して宣戦布告。

ドイツ軍はアイントホーフェン、アーヘン、ルクセンブルクより進撃を開始。

ベルギー攻略作戦、エーデルヴァイスの発動であった。

第13話 第1次海軍補充計画（後書き）

就活、未だ終わらず。

第14話 暗雲

エッセンにある火砲や銃などの製造で有名なクルップ社。

そのクルップ社のトップであるグスタフ・クルップと実質的な宰相にして、krimzon社の実質的な支配者であるヴィルヘルムが会談していた。

ヴィルヘルムがクルップ社にいる理由はレーヴァテイン計画の為だ。

彼は自分が行った方がスムーズに、かつ、情報漏れの可能性が少ない、と見てヴィルヘルム2世に申し出ていた。

krimzon社はキャラクタービジネスから始まり、造船業にまで進出している。

そのような事業展開の中で他の会社と提携したりするのは至極当然のことだ。

また、ヴィルヘルムが企業人として、グスタフと面識があるという点も見逃せない。

「80cm砲……？」

グスタフの問いにヴィルヘルムは軽く頷く。

「1938年までに作って欲しい。艦載砲として」
「……は？」

目を丸くして、問い返すような声を出すグスタフにヴィルヘルム

は苦笑する。

彼の予想通りの反応をグスタフがしたからだ。

「それを搭載した戦艦の建造が決定されてね。その化け物大砲を3連装4基、計12門積んだ戦艦を1942年までに就役させる」

「それは何とも、壮大な計画だ」

呆れたような感心したような顔のグスタフにヴィルヘルムは笑ってみせる。

「これでまたドイツは世界各国から一步も二歩も技術でリードできることになる」

戦艦とはその国の技術の集大成であると言っても過言ではない。

主砲となる大砲を製造する技術、各種装甲や機関を製造する技術、そして何よりも基礎となる造船技術が主であるが、これらに加えて居住性などの人間工学なども必要とされる。

故に攻撃力・防御力・速力が高いレベルで纏まった戦艦を造ろうとすればそれだけに高い技術が要求される。

レーヴァテイン計画は単に80cm砲搭載の戦艦を造るという計画ではなく、これらの技術向上も含めた計画を指す。

結果として、レーヴァテイン計画が完了する頃にはドイツの技術は他国を抜いているということになる。

グスタフはヴィルヘルムの言葉にピンときた。

技術の向上とは階段をゆっくり一段ずつ上がるということに似ている。

駆け上がるようなことはできないのだ。

「とりあえず、40cm程度の砲の試作からでもいいかね？」

「問題ない。先のレーヴァテイン計画以外でも戦艦を造ると思うだろうし。おそらく1943年には13、4隻の戦艦をドイツは持っていることになると思う」

なるほど、とグスタフは頷いた。

1隻で国を潰せるような桁外れの超兵器などならともかくとして、性能が優越した戦艦を持っていたとしても、少数なら困んで袋叩きにできる。

故にそれなりの数を揃える必要があるということは誰でも分かる。

「重さをできるだけ抑えて、射程は長く、威力は大きくして欲しい……まあ、当然の要望だ。今、海軍所属の造船技師と民間の技師達が試行錯誤を繰り返して最適な船体とかを求めているから、詳しいことは彼らと協議してくれ」

「わかった。ところで、その艦のクラス名は決まっているのか？」

「先日の連絡会議ではレーヴァテインの頭文字のLからとって、L級となった。あくまで仮だ」

だが、とヴィルヘルムは続ける。

彼の顔は楽しそうに笑っていた。

「この艦のクラス名はもう決まっている。というか、自分が勝手に決めて、この意見を通させる」
「ほう？」

身乗り出すグスタフにヴィルヘルムは笑みを深める。

「この艦のクラス名はグロス・ドイツチュラント。それしか有り得ない」

1916年 6月24日

アーヘンに設置されている第14軍司令部。

そこでは総司令官に抜擢されたエーリツヒ・ルーデンドルフ元帥が敵味方の駒が置かれた大地図を睨んでいた。
逐次入る報告に女性オペレーター達が駒を動かしていく。

ベルギー攻略軍として編成された第14軍に所属している師団の幾つかはバルカン戦争を経験した歴戦の師団だ。

第14軍の戦力は3個軍団、計16個師団。

その内訳は以下の通り。

第4擲弾兵軍団

第12擲弾兵師団
第22擲弾兵師団
第19擲弾兵師団
第23擲弾兵師団

第12擲弾兵軍団

第3擲弾兵師団
第7擲弾兵師団
第11擲弾兵師団
第5擲弾兵師団

第16擲弾兵軍団

第18擲弾兵師団
第26擲弾兵師団
第17擲弾兵師団
第4擲弾兵師団

第6装甲軍団

装甲教導団

第1装甲師団

装甲擲弾兵師団「グロス・ドイッチュラント」

第3装甲擲弾兵師団

グロス・ドイッチュラント師団は本来ならまだ存在していないが、士気高揚と戦車などの新兵器の運用に特化したエリート師団として、

1913年にヴィルヘルム2世から創設するよう勅命が下され、1914年に創設され、現在に至っている。

また同じように士気高揚の為に歩兵師団は擲弾兵師団と改名されている。

そして、擲弾兵師団であったとしても完全に自動車化されており、素早く移動できる点も見逃せない。

「予想通りといえば予想通りだが……」

ルーデンドルフの呟きを彼の参謀長に抜擢されたエーリッヒ・フォン・マンシュタイン少将は見逃さなかった。

マンシュタインは軍歴こそ浅いが、優秀であると軍内部ではそれなりに評判であった。

勿論、これだけでは将官になることはできない。

彼は知らないが、ヴィルヘルムが強く推薦したが為に今のこの地位にいる。

「フランス義勇軍という名の、フランス正規軍の登場についてですか？」

「うむ」

ルーデンドルフは頷いて、見たまえ、と地図上の3点を示した。

「アイントホーフエン、アーヘン、ルクセンブルクから進撃を開始した各軍は5月20日にはそれぞれの初期目標であるシントトルイデン、リエージュ、ナミユールを占領、その後それぞれの周辺地域を掃討しつつ、手を結び、包囲網を形成。」

そして、26日には包囲網内のベルギー軍を降伏に追い込んでいく。また、包囲網が形成され、ベルギー軍が解囲を目指し動き始め

た段階でブレダよりアントウェルペンを目指し、第6装甲軍団を投入。6月11日にはアントウェルペンを占領している」

しかし、とルーデンドルフは続ける。

「計画ではその後はブリュッセルを目指し、各軍が進撃する筈だが、現れたフランス義勇軍により足止めをされている。

特に第6装甲軍団前面に現れたフランス装甲師団は同軍を4日以上食い止めている。これ以上、戦費を費やすと宰相殿が怒鳴り込んでくる可能性がある」

ドイツをここまで発展させた宰相の噂は軍内部のみならず国民、はては他国にまで及んでいる。

突拍子のないものではフリードリッヒ大王が蘇ったのだ、ローマの五賢帝が補佐についているのだ、というものがある。

「噂の宰相ですか」

「ああ、その宰相だ。まあ、敢えてこうすることで宰相殿のご尊顔を拝めるかもしれないが、それでは軍人としてよろしくない」

マンシュタインは軽く頷いて、刻々と動く駒を見やる。

前線からの情報では現れたフランス軍は今のところ、合計8個師団。

うち、装甲師団は2つ。

攻撃側3倍の法則を適用するならば、あと8個師団を投入する必要がある。

しかし、それは財政上の理由からはできない。

彼はそこまで考えて、ふと気づいた。

視線を地図からルーデンドルフへと向ける。

「政府は義勇軍について抗議していますか？」

「しているが、単なる義勇軍だとフランス政府は繰り返すだけだそうだ。それにうちも同じ事をバルカンでやったから、余り強くは言えない」

それもそうだ、とマンシュタインは頷いた。

そして、再び地図を見たとき、あることに気づいた。

「元帥、一度、国境まで退いてみてはどうでしょうか？」

「国境まで？」

「はい。勿論、全軍が一斉に退くのではなく、それぞれの軍から1個師団を引き抜きます。」

これら4個師団をドイツ領内へと撤収させ、打撃戦力として編成。その後、まず装甲軍団が退却を開始。

ドイツ側へと限界まで引きつけたところで装甲軍団は反転、追撃してくる敵軍を攻撃して釘付けにします。そして、その間に編成した打撃軍によって敵軍を包囲・殲滅するというものです」

「中々大胆な案だな」

負けている時に退くよりも、勝っている時に退く方が遥かに難しい。

成功する可能性は充分にあった。

「よろしい。早速具体的な案を作成してくれ。1時間以内に、だ」
「了解しました」

「撤退？」

アントウエルペンとブリュッセルのちょうど真ん中辺りに位置するメヘレンの街まであと10kmというところまで進出していた装甲教導団第2装甲連隊連隊長のハインツ・グデーリアン大佐は耳を疑った。

彼はバルカン戦争での功績から大佐に昇進、1個連隊を預かる連隊長となっていた。

「はい。先ほど装甲教導団司令部からそう通達がありました。領内まで退く、と」

連絡にやってきた少尉は再度、告げた。

「……妥当な判断かもしれん」

フランス軍により、手持ち戦車の4分の1を彼の連隊は既に失っている。

こちらが与えた損害も多いが、ドイツ軍にとってここは敵地だ。フランス軍、ベルギー軍の方が補給がし易いということは言うま

でもない。

「司令部には了解した、と伝えてくれ」

少尉が敬礼して退出した後、グデーリアンは溜息を吐いた。

「バルカンでの勝利に慢心していたようだ。全く、情けない」

そう呟いて、頭を左右に振る。

ドイツ軍がバルカンで戦訓を得たように、フランス軍もまた戦訓を得ている。

そして、これまで戦ってみた感触から判断すれば、徐々にその差が縮まりつつあることを彼は実感していた。

「これを教訓にして、全軍に伝えなくてはならない。それが教導団の役目だ」

教導団とは簡単に言えば先生である。

その先生が落ち込んでいては始まらないのだ。

しかしながら、彼は近い内に撤退が作戦の内であったことに驚くことになる。

少々、時を遡った6月18日の日曜日。

ニユルンベルクの市内にあるカフェは暇を持て余している学生や親子連れなどで賑わっている。

そのカフェの店内にはある1組のカップルがいた。

「ああ、エリカ。君は何て素敵なんだ。君の碧い瞳はまるでサファ
イアのように……」

真面目な顔で物凄い台詞を吐く、優男にエリカと呼ばれた女性は
頬を赤らめて、俯く。

「アルノルト……その、恥ずかしいわ」

蚊の鳴くような声でそう言うエリカに優男……アルノルトはかぶ
りを振る。

「そんなこともあるもんか。君の金糸のように綺麗で長い髪、サファ
イアのように碧い瞳。まるで女神様だ」

トマトのように真っ赤になっていくエリカ。
今に湯気が出てくるかもしれない。

「ところでエリカ、この前相談したことなんだけど……」

エリカはアルノルトの言葉にこれ幸いとばかりに話題の転換を図る。

「そ、その件だけど、だ、大丈夫！　しっかり持ってきたから！」

恥ずかしさからか、悲鳴に近い声になり、周囲の客から生暖かい視線を向けられる。

その視線に更に恥ずかしくなり……と悪循環に陥る前にアルノルトが助け舟を出した。

「それはよかった。これで教授の課題をクリアできるよ」

アルノルト、エリカの2人が関係は大学と学部が同じであったことから始まる。

もっとも、成績に関しては天と地ほどの差があり、エリカは学部内で1番だが、アルノルトは下から数えた方が早い。

そんな2人が恋人同士になっているのを周囲は不思議がった。

実際のところ、エリカは貴族の令嬢……いわゆる箱入り娘であり、蝶よ、花よ、と育てられている。

故に大学に入るまで男性からの積極的アプローチというものが無かった。

つまり、アルノルトの強引ともいえるアプローチにより、その気になってしまった、というわけだ。

このことはエリカの父親の耳に入り、結婚前にキスもしてはならん、という条件の下で交際を許されている。

「で、でも、取り扱いには気をつけて。絶対に蓋を開けたりしないように」

「分かってるよ」

エリカはアルノルトの返事に鞆から小瓶を取り出す。

一見したただけでは何にも入っていないものだ。

「しかし、教授も嫌な課題を出してくれたもんだね。肉眼で青く見えない段階のアオカビを顕微鏡で観察しろ、なんてさ」

「アルノルト、生物学部の学生として、それは言っではいけないと思うわ」

「それもそうだ。ところで、これって何処から持ってきてくれたの？」

アルノルトの問いにエリカは小声で答える。

「2週間前に私が見学しに行ったところ。生命研究センターの分析室に置いてあったの」

アルノルトの笑みが心なしか深くなった。

「NPって札があったから、誕生したての、新しいアオカビだろうって思っで……」

「ありがとう、エリカ。本当にありがとう」

アルノルトはエリカの両手を握って何度も感謝した。

それからアルノルトは用事がある、と言ってエリカと別れた。

アルノルトはニュルンベルク近郊の1軒屋に立ち寄った。
木製の扉の前に立ち、3度ノックした後、数秒の間を置いて1度
ノックする。

すると中から合言葉を答える、という声があった。

「オルレアンの乙女」

アルノルトの言葉に扉がゆっくりと開く。
彼は素早く部屋の中に入り、扉を閉めた。

扉を開けてすぐの部屋には数人の男が思い思いに過ごしていた。
アルノルトは彼らを一瞥して、部屋の中央にあるテーブルに小瓶
を置く。

「それは？」

男の1人が問い掛けた。

「情報部で話題になっている化学・生物兵器研究所のものだ。クラ

ウツの女を誑かして手に入れてきた」

「よく手に入ったな。クラウツの女は研究所の所員か？」

別の男の問いにアルノルトはかぶりを振る。

「学生だ。クラウツの防諜体制は嚴重だが、こういう事態は想定していないらしい」

実際のところ、生命研究センターに研修などということはできない。

しかしながら、エリカの父親が娘の学業の為、とコネを使ってヴイルヘルム2世に働きかけた結果だ。

また、幾つかの偶然もある。

それは分析室に通されたとき、エリカを案内していた研究員がトイレに1分だけ行ったこと、小瓶が無くなったことにドイツ側が未だに気づいていないこと、そして、エリカが小瓶を盗むなどということを経験も考えもなかったこと。

これらはドイツ側にとって不運なことであった。

「……そろそろここも潮時かもしれん。最近、この辺をクラウツの情報部員と思われる輩がうろついている」

他の男達と比べて、体格の良い男がいった。

「少佐、次は何処に？」

「ドルトムント、ヴイルヘルムスハーフェン、ハンブルクのどれかな」

アルノルトの問い掛けに少佐と呼ばれた男はそう答える。
そのとき扉がノックされた。

ノックの仕方は彼らのメンバーではないことを示している。
彼らは無言で各々の装備を確認すると、少佐が声を掛けた。

「誰だ？」

「宅配便です。ハンコお願いします」

その言葉にお互いの顔を見合わせる少佐達。

「……アロワ、行け。警戒を怠るな」

「はい、少佐」

ベレッタM1915を片手に持ち、もう一方の手はドアノブを握り、アロワはゆっくりと扉を開いた。

そして、扉が開いた瞬間に無数の銃弾が撃ち込まれた。

フランス側のスパイが潜伏しているとの情報を掴んだRZIAは
荒事専門のチームを送り込んでいた。

潜伏しているらしい家を包囲した後、宅配便を装って攻撃する
という至極単純なものだ。

この宅配便を装うという方法はヴィルヘルムからの厳命であり、
マニュアル化されている。

「もういいかしら？」

指揮官として送り込まれたアンナはそう呟いた。

ヴィルヘルムの護衛としてロンドン塔に行ったときは醜態を晒した彼女だが、人間相手なら頼りになるのだ。

機関銃まで動員されたが為に一軒屋の壁は穴だらけになっており、蹴りつけたなら崩壊しそうな程にまできている。

アンナは射撃をやめさせると、数名の部下を家へと突入させた。

家の中へと入った彼らが見たものは五体不満足の死体が幾つかと散乱した家具、割れた小瓶であった。

第14話 暗雲（後書き）

就活の息抜きに更新。

ロマノフ姉妹に関しては話の都合上、次回辺りになる予定。

第15話 感染国家

マンシュタインプランが実行に移されるとベルギー戦線は大きく動いた。

マンシュタインプランに見事に引っかけたフランス軍は貴重な装甲師団を失い、またフランス軍による束縛が無くなったドイツ第6装甲軍団はそのままブリュッセルを目指して進撃を再開。抽出された打撃戦力は擲弾兵軍団の支援へと向かった。

そして7月14日、ベルギー政府はコンゴをドイツへ譲渡するという条件で講和条約を結んだ。

このまま特に何事もなく、ドイツは繁栄していくのだ、とヴィルヘルム2世もヴィルヘルムも思っていた矢先にそれは起きた。

ベルギー戦が佳境に入っていた7月4日、ニルンベルクにて悪質な風邪が流行、その風邪はそれから急速な広がりを見せ、7月20日にはドイツ全土に広がったのだ。

1916年 8月4日

ヴィルヘルムはベルリンにある自宅で悶々としていた。

ドイツ全土で非常事態となっていることを彼は既に知っている。

しかし、ヴィルヘルム2世からの勅命により、自宅待機を命じられていた。

本来ならば緊急対策会議なりに出席し、意見を述べているところだ。

「ご主人様」

長い付き合いとなっている、元家庭教師、現メイドのシャルロットがヴィルヘルムを呼んだ。

その言葉に、いざ鎌倉ならぬいざ宮殿とばかりに寝ていたソファから飛び起き、彼は尋ねる。

「陛下からの使いか？」

「はい。至急出頭するように、と」

「わかった」

手早く着替えてヴィルヘルムは家を飛び出した。

ヴィルヘルムがベルリン宮殿に到着すると、近衛兵により会議室へと案内された。

会議室に入った彼は重苦しい空気に襲われた。

会議室には既にヴィルヘルム2世をはじめとして、財務大臣や内務大臣、外務大臣、国防大臣などの大物が揃っており、彼らが一斉にヴィルヘルムへと厳しい視線を向けているのだ。

「さて、ヴィルヘルム。悪いニュースと、もっと悪いニュース、どちらから聞きたいかね？」

ヴィルヘルム2世の問いにヴィルヘルムは冷や汗が思わず垂れた。

「悪いニュースからで」

「30分前に入ってきたものだが、ドイツ証券取引所で医療系を除いた企業の株価が大暴落だ。そなたの歴史の世界恐慌と似たようなことになるだろう」

悪いニュースでそれなら、もっと悪いニュースはどれだけ悪いんだ、とヴィルヘルムは思うと同時に聞きたくない、とも思った。

しかし、彼は聞かねばならない。

「……もっと悪いニュースは？」

「国内で流行している風邪だが、そなたが開発を推し進めたノイエ・ペストであると判明した。どうしてこうなったのかについては現在調査中だ」

ヴィルヘルムは思わず唾を飲み込む。
ヴィルヘルム2世はその様子を見ながら言葉を更に紡ぐ。

「昨日の段階で死者は50万人を突破。罹患者に至っては測定不能だそうだ」

「……私は銃殺ですか？ 磔ですか？ それとも火あぶり？」

ヴィルヘルムが震える声でそう尋ねると、ヴィルヘルム2世はかぶりを振る。

「そんなことをしても意味がない。そなたの記憶にある、21世紀の日本の政治家共と同じにするな。まずは責任を取れ。全てはそれからだ」

いきなり死刑になることがなく、ホツと安堵の息を吐くヴィルヘルムにヴィルヘルム2世は優しく言った。

「余も、ここにいる大臣達もそなたの功績を知っている。ドイツに変わる切欠を与えてくれたことと大雑把な目標を示してくれたことは今回の失点を補うことができる程、大きなものだ」

ヴィルヘルム2世の言葉に出席者達が一様に頷く。

その視線も厳しいものから優しいものへと変化していた。

ヴィルヘルム2世をはじめとして、ヴィルヘルムを2代目ビスマルクという評価を下している。

その評価は主に3点の理由が挙げられる。

ドイツ帝国初代宰相オットー・フォン・ビスマルクの実質的な後釜に就いたのがヴィルヘルムであったこと。

ヴィルヘルムがドイツに変わる切欠を与えたこと。

そして、イギリス、アメリカから非公式とはいえ、ドイツに対して有利な言質を取ったことだ。

前2つはともかくとして、3つ目はヴィルヘルム自身の手柄である。

この手柄により、ヴィルヘルムはドイツにおいて確固たる地位を築いたと言っても過言ではない。

「安心してやってくれたまえ」

「……はい、陛下」

ヴィルヘルムは頭を深く下げる。

それから1時間の休憩となり、ヴィルヘルムはその間に現状を纏めた報告書や資料を読み漁った。

「案はあるかね？」

会議が再開すると開口一番、ヴィルヘルム2世はヴィルヘルムに問い掛けた。

ヴィルヘルムは力強く頷き、口を開く。

「暴落に関してはひとまず置いておきまして、これ以上の流行拡大を食い止めることが肝心です。」

国内旅行、国外旅行はほぼ完全にストップできていますが、輸入は現在も続いております。これをやめねばなりません。

緊急用の国家備蓄を切り崩すことで3ヶ月は持つでしょう。

その為に何としても3ヶ月で決着をつける必要があります」

「具体的には？」

ヴィルヘルム2世の続きを促す言葉にヴィルヘルムは軽く頷き、言葉を続ける。

「ワクチンの増産については既に指示されていますので、ワクチンを配り始めることは1週間以内には可能でしょう。また、国内にある全ての製薬会社の生産力から考えますと、ドイツ本土にいるドイツ国民、およそ6800万人全員に行き渡るようにするとすると、最低でも3ヶ月は掛かります」

「それで？」

「輸出入の解除は配り始めてから2カ月後を目処にすればよろしいかと。また適当な金額の褒賞を餌にして、各会社を焚きつけばより頑張ってくれるでしょう。そして、ここで一つ問題が出てきます」

「問題？」

「はい、陛下。それは今回のことで迅速にワクチンが供給されたとなると、ドイツの開発した生物兵器による事故ではないか、と他国に疑われてしまう可能性があることです」

なるほど、と頷く出席者達を確認して、ヴィルヘルムは言葉を紡ぐ。

「故に今すぐに宣伝しなければなりません。ドイツの研究者が数年前に国内で発見した新型ウイルスによる大流行だと。ワクチンは実用化寸前だったものを今回の一件で完成を急がせた、と」

「効果はあるのか？」

内務大臣の問いにヴィルヘルムは頷いて肯定する。

「何も言わないよりは疑われる可能性は減少するかと。ドイツは各国から先進的な国として認識されていますから」

「よろしい。では次に株価についてだ。このままでは無意味な軍拡をしなくてはならなくなる」

ヴィルヘルム2世の言葉にヴィルヘルムは頷いてみせる。

このままではそうなってしまう。

しかし、ヴィルヘルムには起死回生の策があった。

それは彼の知る21世紀の日本で取られた政策とヒトラーの大胆な公共事業だ。

「まず国内全世帯に政府が無償で1ヶ月ごとに最低限の生活費を1年間給付します。

この給付金を定額給付金としておきましょう。

更に今回の一件で人口減少が確実ですので、子供がいる家庭には先の定額給付金とは別に子育て給付金を支給します。

1904年に私が発案し、制定された育児法では第1子のみ子育て給付金の給付対象でしたが、今回は第5子までを対象とし、また子供が5人以上いればこの子育て給付金とは別に家庭補助金を支給します」

一度、そこでヴィルヘルムは言葉を切り、更に続ける。

「経営が厳しくなった企業には政府から返済期限を長めに設定した援助金を与え、また経済活性化の為にキール運河や各港湾の拡張工事を行います。これらの工事は遅かれ早かれやる必要があるのです、ちょうど良いでしょう」

「財源はどこから持ってくるのかね？」

ヴィルヘルム2世の問いに、ヴィルヘルムは胸を張って告げる。

「日本にドイツ国債を買ってもらいます。彼の国とは技術交流や文化交流などで友好的ですので、買ってくれるでしょう。ともかく、この危機さえ乗り越えれば何とかあります」

「アメリカやイギリスでない理由は？」

「イギリスは信用できませんし、アメリカに金を与えると強化化する可能性が高いので」

ヴィルヘルムの答えにヴィルヘルム2世は満足げに頷き、大臣達を見回した。

「諸君、大きな問題点はあるかね？」

特に反対意見も無かったが為に、ヴィルヘルムの提案は速やかに実行に移されることとなった。

会議終了後、ヴィルヘルム2世は部屋を出ようとするヴィルヘルムを呼び止めた。

「実はだな、今回の一件は余にも多少の責任があつてだな」

「……調査中ではなかったのですか？」

不思議に思いながらも、ヴィルヘルムはヴィルヘルム2世に問い掛ける。

「ああ、うん、そのだな、実はほとんど調査は終了している。それで、だ……ある貴族が1人娘を溺愛しててな。その娘が生物学を大学で専攻しているから、生命研究センターを見学させてやりたいと……」

「許可したんですか？」

「……すまぬ」

犯人はお前か、とヴィルヘルムは叫びたかったが堪える。

ヴィルヘルム2世が許可を出さねば今回のことを防げた可能性は非常に高かった。

しかし、とヴィルヘルムは思う。

「陛下が許可を出さなくても、何らかの形でいずれこうなっていたかもしれません。それに結局の原因は開発を進めた自分にありますので」

「ああ……その貴族だが、取り潰した。1人娘はRZIAが監禁しているから、会いたければ会いにいくといい」

わざわざ1人娘の居場所を教えるヴィルヘルム2世にヴィルヘルムはピンときた。

ストレスが溜まっているだろうからガス抜きしてこい、というのがヴィルヘルム2世が込めた意味であった。

RZIAはベルリン宮殿から然程離れておらず、歩いていける距離に本局が置かれている。

そのRZIA本局にヴィルヘルムはやってきていた。

「……随分とがらんとしているな」

「ニュルンベルク風邪の直撃を受けまして」

案内の男性局員はそう答える。

ノイエ・ペストはニュルンベルク風邪という名称が一般に定着していた。

ヴィルヘルムはまだ知らないが、ここまで拡大したのは本局所属のアンナ率いる部隊が感染した為という調査結果が出ている。

勿論、アンナ達に非は無い。

当時、彼女らはフランスの間諜がいるから、それを殲滅してこい、という任務で赴いた。

当初は捕縛であつたが、有益な情報は得られそうにないと判断された為に殲滅に変更されていた。

そもそもノイエ・ペストの存在は最重要国家機密である。

一介の情報部員でしかないアンナ達が知っている筈がないので、今回の一件は不可抗力であつた。

それから、ヴィルヘルムは局長室に通され、そこで局長と5分程話した後、一人娘のエリカが収監されている地下の独房へと行くことになった。

「随分とまあ凄いな、色々」と

ヴィルヘルムは独房の中を扉についた小さな窓から見て思わず呟いた。

コンクリートが剥き出しの部屋にはパイプベッドと便器しか無い。そして、ベッドの上にある毛布は膨らんでいた。

「彼女の状態は？」

ヴィルヘルムは看守に尋ねる。

「精神的に消耗しており、収監されて以来、碌に食べていない為にやせ細っております」

「対策は？」

「栄養剤を投与しています」

なるほど、とヴィルヘルムは頷き、看守に目配せして鍵を開けさせる。

彼女は扉が開いても特に反応はしない。

ヴィルヘルムは看守に出るように告げる。

看守は心得た、とばかりに頷いて独房から出て、扉を閉めた。

2人きりになったヴィルヘルムはベッドの傍へと行き、毛布を剥ぎ取る。

彼は思わず口笛を吹く。

頬は痩せこけ、金髪は輝きを失い、碧い瞳は虚ろに、そして肌の色は死体と見間違えるような青白くなっていた。

彼女は自身を見るヴィルヘルムには気づいていないようだ。

ヴィルヘルムは本人と会う数分前まではどう料理してやるうか、と色々考えていたが、彼女を見てそのような気分は吹き飛んでしまった。

同情というものではない。

もっと打算的なものだ。

「初めまして。ヴィルヘルム・フォン・ルントシュテットだ。君のことは色々と聞いているよ。よくもNP……ノイエ・ペストを盗んでくれたね」

ノイエ・ペストという単語に反応してか、彼女の瞳がヴィルヘルムの方を向いた。

濁った瞳とはこういうものを言うんだろうな、と彼女の瞳を見て彼はそう思いつつ、言葉を続ける。

「今の段階で死者50万人以上、罹患者測定不能。幸いにも私やその他の重要人物はドイツ全土に飛び火した頃にワクチンを打っている。それなりの対応ができています」

彼が言い終わると同時にエリカが口を開いた。

「あなたは、何者ですか？」

彼女の声は蚊の鳴くような声だった。

ヴィルヘルムはその問いに笑みを浮かべて答える。

「あるときは小説家、またあるときは会社の経営者……しかして、その正体はドイツ帝国国家統括官……いわゆる宰相だ」

「嘘……ですわね？　このような子供である筈がありません」

先ほどよりも少しだけ大きな声で彼女は言った。

ヴィルヘルムも当然、これだけで信じてくれるとは思っていないので、切り札を出すことにする。

「アルノルト・シュタイナー。君と同じ大学の生物学部所属で課題

の為に君に生命研究センターから何でもいいから持ってくるように君に頼んだ優男。違うかい？」

ヴィルヘルムがそう言った直後、エリカの目が限界まで見開かれた。

「これで信じてくれたかい？」

エリカは驚いた顔のまま、ゆっくりと頷く。

「それはよかった」とヴィルヘルムは笑顔で告げて、彼女にとって致命的な一撃を加える。

「そのアルノルトがフランスのスパイであったことは知っているかい？」

頭を鈍器で殴られたような衝撃がエリカを襲った。

そして、彼女が思っていたものよりも遥かに大きな罪であることに愕然とした。

国家機密の生物兵器をアオカビと間違えて持ってきただけでなく、それを知らなかったとはいえ、フランスのスパイに渡した……間違はなく国家反逆罪に加えて、幾つもの罪が適用され死刑となる。

エリカはそこまで考えて、自分が未だに生かされているのはもしかしたら、生物兵器や化学兵器の被験者にされるのではないか、と思ひ、体を震わせた。

死刑で死ぬのはまだ人間としての尊厳がある。

しかし、被験者になって死ぬのは尊厳など無い。データ採取の為にモルモットとされて終わるのだ。

「まあ、傍目から見れば死刑確定の、もしかしたら生き地獄を味わうことになるかもしれないくらいの重罪であることは間違いない」

だが、とヴィルヘルムは続ける。

「私がそうさせないようにしよう。君には暖かいベッドと暖かい食事に3時のおやつ、メイドも数人いる生活を約束しよう」

エリカはヴィルヘルムをまじまじと見つめた。

彼は事実上、罪に問わないと言っているに等しいからだ。

彼女の様子を見ながら、ヴィルヘルムは更に言葉を続ける。

「対価として、君の残りの人生は全て私が貰い受ける。君は私の言葉だけ聞いていれば良い。君が過去に犯した罪とこれから犯す罪は私が赦そう。元々は私が撒いた種だ。何、それは関係ない。重要なのは君が私の提案を受けるかどうか、だ」

エリカにとってその言葉は酷く甘いものであった。

蛇の言葉に惑わされたイヴ、と言えば彼女の状態がわかるだろうか。

そして、イヴは蛇の言葉を拒絶することはできない。

エリカは体を起こし、ヴィルヘルムの瞳を真っ直ぐに見る。

彼女と同じ彼の碧い瞳はヴィルヘルムの意志を示すかの如く、力強さがあつた。

その瞳を見たエリカは思わず唾を飲み込む。

「あの、どう呼びすれば……？」

恐る恐る尋ねてくるエリカにヴィルヘルムは満足げな顔をする。

「家名で呼ばれるのは余り好きじゃないな」

ヴィルヘルムがそう言うと、エリカは両手を胸の前で握り、ゆっくりと確認するかのように声に出す。

「ヴィルヘルム様」

ヴィルヘルムの名前を告げたエリカの瞳に光が戻り、また同時にその瞳を狂気を孕んでいるように彼は感じた。

事実、ヴィルヘルムの感じた通りに彼女は精神の安寧を得る為に彼に縋ることにしたのだ。

分かりやすくいえば、ヴィルヘルムの狂信者だ。

もっとも、この場合は依存といった方が良いかもしれない。

エリカにはもはや家族も財産も無いということも彼女がヴィルヘルムへ狂信的な忠誠を捧げることによって拍車を掛けることになる。

ヴィルヘルムに捨てられないようにする為に。

良い手駒と妾を得た、彼は心の中でそう思った。

第15話 感染国家（後書き）

何故かアイディアが浮かんでくる。
就活中なのに。

第16話 ヴィルヘルム2世の憂鬱

「大丈夫だった？」

「は、はい」

それは良かった、と頷くヴィルヘルムに対して、マリア・ニコラエヴナ・ロマノヴァは顔を俯かせる。

先ほど、彼女はヴィルヘルムと一緒に乗馬をし、彼が馬を道路を疎らに走る自動車を追い抜く程の速度で走らせた。

その際、マリアは恥も外聞も無く、悲鳴を上げたからだった。

「しかし、君があんなに怖がるなんて驚いたよ」

ロシアに滞在しているヴィルヘルムは今日はマリアとのデートであった。たとえ双方にその気が無くとも、男女が2人つきりということからデートと称するのが相応しいだろう。

「その、あんなに早く走らせるとは思ってもみませんでしたので…」

…」

タチアナから敬語を使うように、と物凄い剣幕で言われたが為にマリアはヴィルヘルムに対して敬語を使っている。

また、ヴィルヘルムに対してもタチアナは敬語を使わないで欲しい、と懇願し、彼は承諾していた。

もつとも、マリアとは正反対にアナスタシアはヴィルヘルムに敬語を使わない。

タチアナの悩みの種はまだまだ尽きない。

「……あの、何か？」

ジーツとマリアを見つめるヴィルヘルムに対して、彼女は首を傾げて尋ねる。

ヴィルヘルムは「ああいや」と、気恥ずかしそうに顔を逸らし、そして、顔を逸らしたまま言った。

「本当に天使みたいに綺麗だなんて思ってたね」

「ありがとうございます」

笑顔でそう言うマリアにヴィルヘルムは「あー」とか「うー」とか唸る。

女性を口説くことは国家を運営するよりも難しい、と彼は頭の中で思いつつ、話題を探す。

残念ながら、同い年の女性と付き合ったことはドイツに生まれてこの方、彼には無い。

その為にどう振舞っていいのかわからない、というのが彼の本音だ。

「ちょ、ちょうど草原だから座って空でも見ようか。青空が綺麗だ」
「私とどちらが綺麗ですか？」

マリアの言葉にヴィルヘルムは泣きたくなり、どう答えればいいんだ、と心の中で叫んだ。

その様子を察したのか、マリアはクスクスと笑った。

皇女と宰相が草原で座って空を見る。ある意味、想像を絶する光景だろう。

ロシア帝国の首都といえど、ベルリンのように近代的なビルディングが建ち並ぶ街並みではなく、中世の面影が若干残っているような、地方都市といった感じた。

その為に都市から少し離れば辺りには何にも無い。

空を見ていたら、ちょうど良い話題が浮かんだヴィルヘルムは口を開いた。

「青い空の向こうに何があるか知っている？」

「星があるのでは？」

マリアの答えに頷いて、ヴィルヘルムは続ける。

「いつか月に辿り着き、そこから星の海へと乗り出していく。第二の大航海時代の幕開けさ。人類は新たな新天地と新たな友人を得ることになる。星の海の彼方へってヤツ」

「あなたの小説に出てくるような星があるかもしれませんね」

「あるさ。星の数は数え切れない程だ。あるとも」

もつとも、と彼は言葉を続け、マリアの顔を見た。

「君の碧い瞳はどんな星よりも綺麗だろうけどね」

これ以上なくらいにくさい台詞だが、そのくさい台詞を彼はサッと言った。

この手の台詞はサッとと言うと効果的だと、彼がこっそり購入したナンパマニュアルに書いてあったので、実践してみたのだ。

「あなたの碧い瞳も綺麗ですよ」

笑顔でそう返してきたマリアにヴィルヘルムは乾いた笑みを浮かべることはできなかった。

暫くの間、互いに言葉を発しない沈黙の時間が流れた後、マリアが尋ねた。

「ヴィルヘルムさんは私達姉妹の中で誰が一番好きですか？」

唐突な問いにヴィルヘルムは期待に胸を膨らませながらも、本心を答えることにする。

下手に着飾っても相手には通用しないだろう、と思ったからだ。

「……誰もが皆、綺麗で皆好きというのが本心。男にとっての基準はやはり容姿だから」

余りにもストレートな物言いに、マリアは目を丸くする。その様子を見て、ヴィルヘルムはようやく一本取った、とばかりに笑みを浮かべた。

「でも、特に誰か、と聞かれたら、君……かな？ うん、ちょっと自信が無いけど、たぶん君」

マリアは今まで経験したことが無い言葉を発するヴィルヘルムに困惑していた。

彼女の知る貴族の男性ならば迷わずにマリアが好きだ、と答える。しかし、ヴィルヘルムはそうではなかった。

ヴィルヘルムはマリアを見つつ、ゆっくりと自分の手を彼女の手
に重ねた。

マリアはビクツと体を震わせたものの、拒否できない。

「マリア……」

ヴィルヘルムは真剣な目でマリアを見つめて、彼女の名を呼んだ。
ごくり、と彼女は無意識的に唾を飲み込む。
瞳に吸い込まれそうだ、と彼女は思った。

そして、彼の顔が彼女へと近づき……

いつまで経ってもやってこない感触にマリアが目を開けると、そ
こにはタチアナの顔があった。

「ふえ？ お姉様？」

「何がお姉様、ですか！ 寝坊ですよ！ 今何時だと思っているの

ですか！」

姉妹の家庭教師役のタチアナの本領発揮である。説教を始めそうになる彼女を遮るようにマリアは自分の寝ている場所が草原ではなく、自分のベッドだと気づいて尋ねた。

「お姉様、ヴィルヘルムさんは？」

タチアナは盛大な溜息を吐く。

「当の昔にドイツに戻っています。全く……」

そう言って、やれやれ、と再び溜息を彼女は吐いた。そして、用件を告げるべく、口を再び開く。

「お父様が話があるから、と呼んでいます。さっさと着替えなさい」

マリアがタチアナと共に広間に行くと、そこには既にニコライ2世、オリガ、アナスタシアが揃っていた。

「マリア、寝坊か？」

「申し訳ありません、お父様」

頭を下げるマリアにニコライ2世は「これから気をつけなさい」と優しく言って揃った姉妹を見回す。

アナスターシアはマリアを見て、ニヤニヤという擬音がピツタリな笑みを浮かべている。彼女はマリアが偶に「ヴィルヘルムさん」と呟いているのを知っていた。他人の恋話ほど面白いものは滅多に無いということだ。

「さて、ドイツで悪質な風邪が流行っているのは知っているな？」

ニコライ2世の言葉に4姉妹が頷く。

「沈静化に向かっていると報告を受けているが、どうにも不安だ。よって、しばらくヴィルヘルム・フォン・ルントシュテットとの婚約は見合わせることにする」

これについて反応は2つに分かれた。

あからさまにショックを受けている者が2人、特に関心を示さない者が2人だ。

ショックを受けているのはタチアナとマリア、関心を示していないのがオリガとアナスターシアである。

「ん？ タチアナ、お前はヴィルヘルムには興味無いとか前、言っておらんかったか？」

首を傾げるニコライ2世。

彼自ら実施した姉妹の意識調査ではマリアを除いた3人は夫となるべき男とは思っておらず、ただの売れっ子小説家とドイツの宰相としか見ていないという結果が出ていた。

「そ、それはですね……」

視線を彷徨わせて、言葉に詰まるタチアナにオリガが微笑み、言

った。

「お父様、タチアナは彼のことが大好きですよ。だって、寝言で言っているくらいですもの」

性格が似ているようだから、相性もいいんじゃないかしら、と締めくくったオリガの言葉にタチアナの顔は羞恥で真っ赤になる。

「お姉様、タチアナお姉様は強敵ですよー」

意地の悪い笑みを浮かべて、小声でアナスターシアはマリアに言った。

マリアも顔を赤くして俯いた。

「そうだったのか？ まあ、ともあれ、しばらく見合わせる。それで、だ。儂としてはマリアもタチアナもアヤツの嫁にやっても良いと思うが、皇帝としての立場から考えると難しい。実に難しい」

「お父様、それならば彼にロシアを舞台にした小説を書いてもらい、その著作権を譲ってもらうというのはどうでしょうか？ 彼の小説は面白いものですから、確実にお金を得ることができます」

オリガが予め解答を用意していたかの如く、すらすらと答えた。

ロシアの復興と発展の為には莫大な金が必要である。

私財を全て使っても足りない程の金だ。

その点、オリガの提案は労力をそれほど掛けること無く、安定して金を得ることができる。

ロシア語に翻訳して、印刷して売り出せば良いだけだ。

各国に対しての輸出品としても使えるだろう。

「ふむ……将来的な価値を考えるとかなり良いな。それならば良いだろう。早速、彼に連絡してみよう。ああ、タチアナとマリアは恋文を作成するように。一緒に送った方が効率的だろう」

恋文という単語にタチアナとマリアはますます顔を赤くしたのだ。
った。

1916年 10月上旬

ニュルンベルク風邪、いわゆるノイエ・ペストの猛威はワクチンの供給が9月半ばから始まると、徐々に沈静化しつつあった。

ドイツにとって幸運なことは他国への感染拡大を防ぐことができたことだ。つまり、世界的な大流行となることを防ぐことに成功したのである。このこととヴィルヘルムの進言した宣伝の効果により、どうにか疑われることは防ぐことができた。

もつとも、それは国民レベルの話であり、同盟国も含めた各国政府はドイツに疑惑の目を向けるようになっていった。

タイミングが良すぎる、というのが各国政府の非公式な見解だ。

その疑惑を晴らすべく、ヴィルヘルム2世は今回の風邪のワクチンを格安で主な列強諸国に提供することを宣言。

同盟国にまで疑われるのは不味いという至極単純な考えである。最低でも1930年代後半まではイギリスや日本と同盟関係でありたい、というのがドイツ首脳部の偽らざる本音だ。

ワクチンを提供することでノイエ・ペストの価値は大幅に減じることになるが、それと比べるべくもない程に同盟国との関係は重要である。

また、このニュルンベルク風邪が沈静化に向かいつつあること、定額給付金や子育て給付金の対象範囲の拡大、大規模公共事業計画の発表などのドイツ政府の対策案により、株を買い戻す動きが加速し、株価の暴落を食い止めることができ、これらの動きから当初はドイツ政府が提案した数のみ購入した日本政府がドイツ国債の大量購入を承諾した。

他にも、倒産しそうであった多くの中小企業も政府による公的資金の投入でどうにか持ち直すことができていた。

そのような喜ばしいニュースがある中で、ドイツの支払った代償は200万人以上の死者である。

そして、この死者数は未だ増加中であった。

最終的な死者数の統計は12月には出てくる予定である。

「合同慰霊祭各地で開催、か」

バスローブを身に纏い、安楽椅子に座っているヴィルヘルムは片手で新聞を持ちながら、もう片方の手で膝に丸まっている黒猫のお燐を優しく撫でていた。

お燐は気持ち良さそうに目を瞑っている。

彼の真正面にある大きな窓からは日光が部屋の中へ差し込んでいく。

窓の外に見える庭には綺麗に手入れされた芝生が植えられており、幾つかある花壇には今は何もないが、向日葵の種が植えられている。

ヴィルヘルムは今日は……というか、数日前から有給休暇を取っていた。

その為にのんびりと自宅で朝から寛いでいるのだ。

もっとも、ただのんびりしていたというわけではない。

「まあ、回復の兆しは見え始めたし、いいんじゃないかなー」

気楽な声でそう言うヴィルヘルムは新聞を傍にあるテーブルの上に置いた。

そして、安楽椅子から少し離れたところにあるキングサイズよりも大きな特注のベッドを見る。

そのベッドは王侯貴族が寝るような天蓋付のベッドだが、ヴィルヘルム自身、貴族なので問題はない。

1人であっても大きなベッドで寝たい、というヴィルヘルムの要望で作られたものだが、今はそこにもう1人いた。

「……いやあ、妾つていいもんですね」

好色な笑みとはこれだ、と言わんばかりのいやらしい笑みを彼は浮かべる。

英雄色を好む、とは言うが、英雄でなくとも普通の男ならば生物として至極当然のことだ。

ともあれ、今回の一件を切欠に彼は「いい人」をやめて欲望を剥き出しにすることにした。

ヴィルヘルムは国家統括官就任以来、戦争などで何人もの人間を関節的に殺している。

これはヴィルヘルム2世や他の高官達も同じだ。

そして、ヴィルヘルムやヴィルヘルム2世達は必要な犠牲だ、と割り切ってきた。

しかし、今回の一件は違う。

ヴィルヘルムが自ら下した決断ではなく、偶発的な事故であった。また、これが仮想敵国内のことならまだ救いがあったが、自国内で行われたのだ。

ヴィルヘルム自身が否定したとしても、ストレスが相当溜まっているだろうことはヴィルヘルム2世にも予測ができた。

故にヴィルヘルム2世はヴィルヘルムが麻薬や酒に手を出して体を壊すよりは、と身元がハッキリとしてちょうど良い女……エリカをあてがったのだ。

言うまでも無いことだが、避妊はしっかりとしているので問題はない。

「にゃーん」

いつの間にか撫でるのを止めていたヴィルヘルムに対して「手を休めるな」とばかりにお隣が鳴き、彼の手を前足で軽く叩く。

彼はお隣に謝り、撫でることを再開する。

「さて、来年度には遂に親衛隊ができる……メイド学校と執事学校は既に生徒の募集が始まっているし……ふふふ、歩く下半身と呼ばれ、蔑まされようが構わない。そういうことを言う輩は事故死か病死するだろうし……っていうか、三桁以上の妾がいる貴族とか普通にいるから言われないと思うんだけどねえ」

上流階級って怖い、とヴィルヘルムは肩を竦める。

独身のそれなりに豊かな貴族と企業のトップを対象にして密に行ったアンケートの結果では、妾が10人以上いることはザラであった。

最多では325人の妾がいる貴族もいた。

このアンケートの対象は女性貴族なども対象となっているが、こちらもちうらで凄かった。

こちらは所謂、男妾というもので、最多では232人の男妾を持つ女性貴族もあり、5人以上の男妾がいることが普通であったのだ。

妾に対してどう思っているか、というアンケート項目については社会的地位の向上と考える者が多数いた。

これは妾となる本人だけではなく、その家族も養う必要があるからで、相応の財力が無ければ妾を持つことなどできないからである。故に妾を多数持つことは社会的なステータスとなっているのだ。

これはドイツに限らず、ロシア、イギリス、イタリア、フランス、日本と事例は幾らでもある。

閑話休題

「それに史実のベリヤみたいなのはさすがにやらないと思うしー、まあ、かなりマシかなー」

ジョン・アクトンは言った。

「絶対権力は腐敗する。絶対的権力は絶対的に腐敗する」

しかしながら、20世紀初頭の現在において、聖人君主では国を治めることができないのもまた事実だ。

歴史を紐解けば、事実は小説より奇なりを地でいつている君主や政治家、貴族が多数出てくる。

転生という事実を除いて考えれば、彼らと比べて、ヴィルヘルムはかなりマシな部類に入ること確かだろう。

人間、力を得れば使いたくなるものだということだ。

「それに親衛隊に関しては陛下から実質的に俺が好き勝手できる許可を貰ったし……というか、アメリカ海兵隊とアメリカ大統領の関係から考えれば、宰相の俺が親衛隊の最高司令官であるのは当然なような気がしないでもない」

親衛隊とは書類上の名前である。

実際は殴り込み部隊の武装親衛隊とアメリカの州兵のような、パータイム兵士が所属する一般親衛隊に分けられる。このうち、武装親衛隊については史実以上のエリート部隊とする予定だ。

その為に指導教官兼將軍として陸海空軍からそれぞれ数十名の軍人を引き抜くことが既に決定されている。

そして、史実での武装親衛隊を知る者ならば、その名を聞いて笑みを浮かべざるを得ない輩が2人含まれていた。

その2人とはパウル・ハウサー大佐とテオドール・アイケ中尉。

ヴィルヘルムが国防大臣と交渉した結果だった。

「しかし、アドルフ・ヒトラー親衛連隊が存在しない……パパ・ゼップをどうにかして取り込まねばならん」

ヨーゼフ・ディートリヒ。

史実においてパパ・ゼップと兵士達から親しまれ、絶大な人気を得ていた人物だ。

下士官としては有能であるが、將軍としては疑問を抱かざるを得ない彼をヴィルヘルムはしっかりと教育を受けさせれば大丈夫だ、と見ていた。

ヴィルヘルムにはある拘りというか、個人的な目標が幾つかあった。

その一つとして、武装親衛隊の最高司令官になる、というもので

あり、加えて、史実で有名な 勿論、悪名高い將軍も含む 將軍達に忠誠を誓ってもらいたい、というものだ。

何のことはない、自分は偉いんだ、ということを実感したいだけである。

国家統括官という地位に就いていても、国家統括官として表に出ることができず、また、国家の発展は主に数字で現される為に実感できないのも当然かもしれない。

親衛隊創設に関して、軍との軋轢は然程無かった。

国防大臣、各軍總司令官がヴィルヘルムの功績を知っているが為にその意見を無下にできず、かつ、海外への展開力に欠ける軍では海外領土で非常事態が生じた時、即応できないというヴィルヘルムの意見が理に叶ったものであったが為だ。

「無いなら……作ればいい。そう、ヴィルヘルム親衛連隊とでも名付けよう。実に簡単なことだ」

そう言っ、ヴィルヘルムはお燐を撫でる手を止めて、膝から下し、椅子から立ち上がった。

「朝食を食べる前にもう一戦しておこう。そろそろ体力も回復しているだろうし」

ヴィルヘルムがこの数日、何をしていたかという、サルのようにやりまくっていただけであつた。

まさに彼の憧れた退廃的な性生活であつた。

その頃、ヴィルヘルム2世は徹夜3日目に突入していた。
彼の部屋には大量の書類が山と積まれている。

基本的にヴィルヘルムは書類をヴィルヘルム2世へと上げる前に
彼自身の権限で判断して、許可を与えている。

その為にヴィルヘルム2世へと上がるものは僅かだ。

ヴィルヘルムが旅行に行った際、予め専門のチームを幾つか作り、
チームリーダーにヴィルヘルム自身が代理権限を与えることで重要
度の高いもののみをヴィルヘルム2世に判断してもらう、という体
制を作ってから出発した為にヴィルヘルム2世の仕事量は然程変化
しなかった。

これらのチームはヴィルヘルムが復帰すると同時に解散となつて
いる。

処理仕切れなかった書類を帰国したヴィルヘルムが捌いたのだが、
それでも相当な量であったことから、彼の普段の仕事量が愉快なも
のであるのは想像に難くない。

彼は日本人的な几帳面さから、その膨大な数の書類を、その日の

内に上がってきたものはその日の内に捌いていたのだ。

しかし、今度はヴィルヘルムはそういうことをせずに休暇を取っていた。

「ヴィルヘルムよ……頼むから早く復帰してくれ。給料、3倍出してもいいから」

「陛下、追加の書類が……」

目の下にクマを作っている補佐官の言葉にヴィルヘルム2世は執務机に突っ伏した。

皇帝の威光も殺人的な量の書類には無力であった。

「早くコンピュータが欲しい。そうすれば部屋が書類で埋もれることも無くなるだろうに……」

ヴィルヘルム2世の言葉は切実であった。

ちなみに、この一件以後、国家統括官の勅命よりも強力な皇帝の勅命が下り、特別予算が組まれ、ドイツの電子産業は最重要国家プロジェクトとしても推進され、莫大な資金が注ぎ込まれることでより発展していくことになる。

「陛下、書類を……」

「……5分でもいいから、眠らせてくれ」

更なる追加の書類を持ってきた補佐官にヴィルヘルム2世はそう言って、机に突っ伏したまま、いびきを掻きはじめた。

後にドイツ国内であるジョークが流行することになる。

それは「皇帝が1ヶ月旅行に行っても仕事に支障は無いが、宰相が3日休むと全ての仕事が止まる」というものだった。

第16話 ヴィルヘルム2世の憂鬱（後書き）

就活終わらないけど、息抜きで書いたらこうなった。

ヴィルヘルムの数日間の休暇で具体的に何があったか知りたい人は
わっふるわっふる、と書き込むとノクターンで分かるかもしれないね
余りにも速い反応にやる気が凄いことになり既にノクターンノベ
ルズに投稿済み NRTもしくは独逸奮闘記で検索すると出ると思
うよ。

第17話 苦悩・革命・ラブレター

1916年 11月中旬

隣国ドイツの脅威が年々高まる中、パリの首相官邸では首相であるレーモン・ポアンカレが陸海軍の総司令官から報告を受けていた。

「敗北主義ではない、と予め断っておきますが……現時点で、ドイツ軍と真正面から殴り合って勝てる自信はありません」

陸軍総司令官が開口一番、ポアンカレにそう告げた。

それに対して、彼は苦々しい顔になり、頷く。

フランスとドイツの総合的な国力の差は5倍以上という報告をポアンカレは受けている。長期戦となれば、フランスがドイツに負けることは火を見るよりも明らかだった。

「しかし、明るい話題もあります。先のベルギー戦で我がフランス陸軍はドイツ軍を一時的に食い止めることに成功しております。我が軍の錬度が向上し、また技術も向上しつつある証だと思われます」
「海軍は？」

ポアンカレの言葉に海軍総司令官が咳払いをして、言葉を紡ぎ始める。

「海軍としましてはドイツ海軍相手ならば勝利する自信はあります。しかしながら、イギリス海軍相手には戦力的に不安です」

当たり前なことを言う海軍総司令官にポアンカレは軽く頷いて、
両名を見て告げる。

「陸軍と海軍はドイツに勝利する為にどのような対策をしているのか？」

フランスに戦わない、という選択肢は存在しない。

遅かれ早かれ、ドイツ企業に自国の経済を牛耳られるような事態
になりかねないからだ。

その点、まだ対抗できるだけの力があるフランスは恵まれている。
デンマークやノルウェーはドイツ企業が大量に進出し、それぞれの
国の企業はドイツ企業との競争に敗れ、多くの企業が倒産の憂き
目にあっている。

これらの国々は強硬手段に訴えることもできず、かといって法律
によってドイツ企業を制限しようとすればドイツ政府が圧力を掛け
てくるが為に悪循環に陥っていた。

反独という利害で一致しているが為にデンマーク、ノルウェーは
相互防衛条約をフランスと結んでいるが、ドイツとの戦争になれば
各個撃破されてしまうのがオチであった。

「陸軍としては新型戦車の開発や戦術の模索をしております。
具体的な作戦計画については後日お渡しできるかと……」

「海軍は潜水艦に注目しています。戦艦を大量建造するよりは費用
が掛からず、かつ、搭載した魚雷でもって戦艦も屠れる可能性がある
からです。性能の低さは数で補えるかと。同じく、具体的な作戦
計画については後日に……」

その言葉にポアンカレは頷き、2人に報告ご苦労、と言い、会談

を終わらせた。

その後、1人、執務室でポアンカレはソファに座り、虚空を見つめる。

「……やはりコミュニストと手を組むしかないか。乗っ取られぬよう注意せねばなるまい……ああ、そうだ。イタリアやトルコにも声を掛けてみるか。まあ、あんまり良い返事はもらえないと思うが……駄目で元々だ。イタリアとも組むとなると、国内の反応が気になるが、一時的なものだから何とかなる筈……いや、何とかしなければならん」

彼がそう決意したとき、ドアをノックする音が聞こえた。

彼が許可を出すと軍服を着た男が1人、入ってくる。

「ああ、君か……何か新しい情報かね？」

ポアンカレは彼にそう尋ねる。

男は陸軍情報部の大佐であり、首相と情報部の連絡役であった。

「はい、閣下。ドイツで国営のメイド学校と執事学校が設立される模様です」

「国営？」

「はい。何でもドイツの宰相の後ろ盾で設立されるそうです。また執事学校も募集対象が女性であることから、おそらくは宰相の世話をするのではないかと」

「……分かっているな？」

ポアンカレの問いに男は頷いた。

「メイド学校に選抜した少女を潜入させます。コードネームはジャンヌ・ダルク。彼女は必ずやフランスに勝利をもたらしてくれるでしょう」

1916年 12月上旬

モスクワにある古ぼけたホテルの一室では3人の男が集まっていた。

彼らはそれぞれくたびれたスーツを着ており、一見したところ、中年会社員に見えないことも無かった。

「同志達よ。フランスからある打診があつたのは聞いているかな？」

1人の男の言葉に残る2人の男は軽く頷く。

「帝国主義者とは手を組みたくは無い、というのが本音だが、組まざるを得まい。最近、地方の労働者達は我らの側に立ち、革命に賛同してくれているが、ペトログラードに近づくにつれ、賛同が得られない」

「暴虐なる皇帝とその側近達が偽善的な施しをしているということ

は分かっている。しかし、民衆はそれを偽善だと知ることはできない」

2人の男の言葉に最初に問い掛けた男は重々しく頷いた。

「由々しき事態だ。これではいつまでも帝国主義者達に労働者達は搾取されかねない。我々はこれまでに以上に団結しなくてはならない。そうではないか？ 同志トロツキー、同志スターリン？」

「勿論だ、同志レーニン」

「我々は団結しなくてはならない。たとえ、帝国主義者と手を組もうとも、最後に勝利するのは労働者である」

ヴィルヘルムが本来そうなるべきであつた歴史を大幅に変えたことはロシア内の共産主義勢力にも影響を及ぼしていた。

日露戦争の敗北でロシア経済に重圧は加わつたものの、第一次世界大戦が勃発せず、またドイツがロシアとの関係改善の為に穀物を安く輸出し始め、さらにヴィルヘルムの「民衆は何よりもパンを求めている」とニコライ2世に進言した為に「如何なる物よりもまず食糧を」というスローガンの下、民衆に食糧を無償で供給し始めたのだ。

これによりペトログラード周辺から徐々に共産主義勢力が後退し始めたのである。

また、ヴィルヘルム2世が論理的に共産主義の脅威を説明したが為に軍内部でも共産主義に対して否定的な雰囲気になりつつあった。これはいかん、と見てとつたレーニンが亡命先のスイスからイタリア、トルコ経由で帰国したのもこの頃だ。

メンシェヴィキはその穏健的なやり方から、ボリシェヴィキから帝国主義者の手先というレッテルを貼られた上に弾圧され、191

4年にはロシア国内から完全に追放されていた。

生き残ったメンシェヴィキ達はドイツへと亡命し、彼らはドイツの労働者達が十分な待遇を与えられていることを知り、自分達も一緒にやりたい、とドイツ政府に協力する旨を申し出ていた。

彼らの処遇を巡ってはヴィルヘルム2世とヴィルヘルムとの間で意見が対立したが、最終的にはボリシェヴィキのように暴力には訴えないこと、体制転覆を企てないことなどの幾つかの条件と共に協力を受け入れることを決定している。

「この同盟だが、イタリアやトルコも加わるそうだ。ノルウェー、デンマークも一応、加わっているから、対ドイツ包囲網と呼べないこともないだろう」

レーニンの言葉にトロツキーとスターリンは笑う。

ドイツ・イギリスという強国を前にしては余りにも頼りない同盟国だからだ。

「フランスから1ヶ月もすれば援助が届くだろう。それまでに賛同者を増やしておかねばならない。来年はより忙しくなりそうだ」

トロツキーの言葉に2人は重々しく頷いた。

1917年 3月初旬

ヴィルヘルムは書類を処理する手を休め、思いっきり背伸びをする。

ふと時計を見れば既に時刻は16時を回っていた。

定時まであとおよそ1時間30分。

妾が出来て以来、彼は定時に帰宅して妾のエリカを愛でることにしていた。

健康である証拠だろう。

何だかんだで体は思春期の男の子なのである。

もつとも、最近ではタチアナとマリアと手紙のやり取りをしているので、罪悪感のようなものを彼は若干感じていた。

しかしながら、タチアナとマリアもヴィルヘルム2世からの手紙でヴィルヘルムが妾を囲っていることを既に承知している。

知らぬは本人ばかりなり、とはまさにこのような状況だろう。

彼は手近に置かれたポットに入った麦茶をカップに注ぎ、飲み干し、喉を潤した後、虚空を見つめる。

「メイド学校と執事学校の生徒も集まっているし……親衛隊も立ち上げ準備段階だし……万事順調だ」

最終的な死者数が235万4367人という大惨事となった昨年のニュルンベルク風邪からも立ち直りつつあり、ドイツの前途は明るいと言って良い。

また今回の人口減少を逆手に取り、ヴィルヘルムは妾に関連する

法律というものを成立させていた。

簡単に説明すれば「同意の下、妾となる者及びその家族を養う義務を妾を囲う者は負う」という現状の確認のような法律であるが「妾の子を差別してはならない」「妾とする者に年齢制限を設けない」という条文も盛り込まれている。

その差別禁止と年齢制限を設けないことについて、どうしてそうしてはならないのか、その理由を説明した長つたらしい文が但し書きとしてついていた。

「しかし……普通の貴族の令嬢とか街娘とかを妾にしたいな。社交界デビューしたいな」

最近マンネリ気味のヴィルヘルムであった。

そのとき、ドアがノックされる。

ヴィルヘルムの顔が真面目なものへと変化する。

「入れ」

威厳のある声はとてもではないが、16歳の少年とは思えない。

伊達に10年以上国家統括官をやっていないかった。

「失礼します」

黒い軍服を着た男が入ってくる。

その軍服は史実の一般親衛隊の黒い制服に似ているが、彼は親衛隊ではない。

そもそも、まだ親衛隊が発足していない。

「閣下、N計画の進捗状況の報告に参りました」

「ああ、どうだね？」

「はい。アドルフ・ヒトラーとの接触到成功しました。彼は自身の生活に不満を抱いており、誘えば承諾するでしょう」

N計画とは、RZIAが進める計画であり、史実での国家社会主義労働者党、いわゆるNSDAPで優秀だった者を登用するというものだ。

ヴィルヘルムがヒトラーに最も期待するものはその弁舌の才能であつた。

そして、N計画について報告している男はRZIAの局長、フラント・カリウスであり、彼もヴィルヘルムの経緯を知っている者だ。なお、RZIAの制服は史実での一般親衛隊の黒い制服であり、ヴィルヘルムの趣味が出ている。

「他のメンバーについては？」

「はい、閣下。実は奇妙な点がありまして」

「奇妙な点？」

尋ねるヴィルヘルムにカリウスは重々しく頷いた。

「ラインハルト・ハイドリヒ、ハインリヒ・ヒムラーについてですが、現時点の調査ではゾフィー・ハイドリヒ、アンゲリカ・ヒムラーの2名があり、両名とも男ではなく女です」

「な、何だってー！」

妙に大袈裟に驚くヴィルヘルムだが、実際のところはそこまで驚いていない。

ただ単にネタに走ってみたかっただけだ。

「……閣下、満足されましたか？」

「うむ、満足した。それでラインハルト、ハインリヒであるという証拠は？」

カリウスも既にヴィルヘルムとは長い付き合いだ。

偶に彼がこういう奇行に走ることがあるのは重々承知していた。

「確たる証拠はありませんが、ハイドリヒ、ヒムラーという性、また出身地などから推測しまして、可能性としてはそれなりに高いかと……どうしますか？」

「勘違いでもスカウトするしかないだろう。野放しにして、反政府組織でも作られたら面倒だ」

「わかりました。では、そのように」

RZIAが調査した段階では今年、4歳になる彼女達の存在が浮かび上がっていた。

しかし、後年、ラインハルト・ハイドリヒという名のプロフェンシング選手がベルリンオリンピックに出場することになり、またハインリヒ・ヒムラーという名の中小企業の社長が有名雑誌のインタビューに出ることで勘違いを悟ることになる。

カリウスが退出した後、ヴィルヘルムは残った書類を片付けよう

と思い、ある報告書を発見する。

「三号戦車がようやく……」

三号戦車A型についての報告書であった。

感無量、とでも言たげな顔でヴィルヘルムは報告書に目を通し始める。

「50口径57mm砲搭載、7.92mm機銃2門搭載、最大速度……」

ヴィルヘルムは笑みを浮かべた。

エリカも引くような、不気味な笑みだ。

「24km/h」

口に出してから、思わず彼は口笛を吹いた。

三号戦車はこれまでの戦車の常識を覆すような高速となったが、この理由はベンツ社とMAN社が車載可能なディーゼルエンジンの開発に成功したからである。

次に彼は値段を見て愕然とした。

「……1両で二号戦車が5両調達できる価格というのはどういうことかね？」

前述した通りにベンツ社とMAN社は確かに車載可能なディーゼルエンジンの開発に成功した。

しかしながら、それはあくまで試作品に近いものであり、とりあえず搭載してみたら好成績だったが為にA型として提案してみた、

という感じである。

もし三号戦車が彼の知る21世紀での90式戦車やエイブラムス、レオパルト並みの従来戦車、つまり二号戦車と隔絶した性能を誇っていたのなら、5倍近い価格というのもまだ納得できたかもしれない。

しかしながら、三号戦車は10年もすれば陳腐化するような性能であつた。

「国防省にある兵器局で間違いないな？」

ヴィルヘルムは報告書が何処から上げられたのか確認すると、椅子から立ち上がった。

国防省兵器局は陸海空軍の兵器全ての制式決定と調達補給を担当している。

無用な重複を避け、一元的な管理により効率化を図る為だ。

今年4月からは親衛隊も兵器局にお世話になることが決定してい

る。

もつとも、親衛隊が使う兵器は陸海空軍と全く同じものになる予定だ。

唯一親衛隊が独自に持つ必要があるのは強襲揚陸艦などの上陸専門の艦艇だろう。

兵器局局長のルートヴィヒ・ヴルツバヒャー少将は怒鳴り込んできたヴィルヘルムに必死に頭を下げていた。

「誠に申し訳ありません！」

「申し訳ありませんで済んだら監査も警察もいらん！」

最近では国家統括官がヴィルヘルム・フォン・ルントシュテットであることを知っている者はそれなりの数にまで増えてきている。

しかしながら、その経緯は知らされていない。

できるだけ自身が自由に動けるようにヴィルヘルム2世と交渉した結果の、苦肉の策であった。

一頻り怒鳴った後、ヴィルヘルムは表情を険しいものから柔和なものへと変えた。

「できれば1・5倍、せめて2・5倍程度にまで抑えて欲しい。コストダウンの為にこちらでも手を打つから」

優しく穏やかにそう言つて、フォローをしておくことも忘れない。こういうことが下位の者から信頼される為のコツだとヴィルヘルムは思っている。

「それと先行試作みたいな感じで三号A型を2両ほど購入すること。私の権限で許可する。性能に目が眩むのはよくあることだ。今度から気をつけてくれたまえ」

「はい……」

国防省兵器局から再びベルリン宮殿へ戻るなり、ヴィルヘルムはヴィルヘルム2世に呼び出された。

「ヴィルヘルム、いきなり怒鳴り込みに行くなんぞ聞いていないぞ？　言えば、余が怒鳴り込んだものを」

「陛下の手を煩わせるまでもないと思ひまして」
「そなたが知られることは色々よろしくない」

渋い顔でヴィルヘルム2世はそう言った。

「以後気をつけます。それで、他に御用は？」
「うむ……これを」

ヴィルヘルム2世がヴィルヘルムに差し出したのは2通の手紙だった。

ヴィルヘルムの表情が喜びに満ちたものへとなっていく。

「で？　交際状況は？」

ニヤニヤという擬音がピッタリな笑みを浮かべて、そう聞いてく

るヴィルヘルム2世。

ヴィルヘルムはフツと、笑って胸を張り答える。

「タチアナとマリアは俺の嫁。4姉妹全員落とせなくても泣かないのが大人」

「何、世の中色々もあるものだ。ひょんなことから変わるかもしれないぞ？ 余とそなたのように」

妙に説得力がある言葉であつた。

第17話 苦悩・革命・ラブレター（後書き）

調子に乗って更新。
何でか筆が進む。

第18話 親衛隊と空軍とフリーリンお姉さんの出張相談i n ヘルリン宮殿（前書

オカルト嫌いな人、リアル大好きな方が最後の方を見ると、蕁麻疹
が出る可能性があります。ご注意ください。

第18話 親衛隊と空軍とプーリンお姉さんの出張相談innヘルリン宮殿

1917年 4月初旬

日本から友好の証として贈られたソメイヨシノが各地の公園で花を咲かせる中、ポツダム郊外に設けられた親衛隊メイド学校及び親衛隊執事学校の入学式が執り行われた。

入学する生徒の大半はヴィルヘルムがRZIAを使い、ドイツ本国に限らず世界各地から集めてきた孤児や路上生活をしている子供、いわゆるストリートチルドレン達である。

スパイが紛れ込む恐れがあるのでは、という声もあったが、最終的にヴィルヘルムが押し切った。なお、当然ながらRZIAは他の情報収集・分析などの業務もあるので、最近ではRZIA内に専門の部署を立ち上げて、その局員達が世界中を奔走し、人種・性別に限らず子供を集めている。

メイド学校及び執事学校は初等部・中等部・高等部と分かれており、基本的に高等部まで進み、卒業した者がメイド或いは執事としてヴィルヘルムのお世話係として配属される。

しかし、優秀であれば飛び級が許可されていたり、またヴィルヘルムが特に望むならば例外として初等部や中等部から引き抜かれることもある、ということも指導教官達には知らされていた。

彼女は1人、ウィングラス片手に壁際に立っていた。

銀色というよりは灰色の髪は肩辺りで切り揃えられ、碧い瞳は興味無さげに目の前の光景を見ている。

入学式は終わり、現在、特設会場にてメイド学校・執事学校合同の親睦会の最中だ。

他の生徒達がわいわい騒いでいる中、彼女はその輪から敢えて外れていた。

「……さつさと終わらないかしら」

彼女の呟きは虚空に消える。

彼女はこういうパーティーなどが苦手だった。

勿論、主人に付き添って、というものならむしろ喜ばしいと思うが。

「あー」

唐突に横から掛けられた声に彼女は内心驚きながらも、平静を装ってそちらへと視線を向ける。そこには人の良さそうな笑みを浮かべた赤髪の少女がいた。

「……私の経験からすると、貴女みたいに人の良さそうな笑みを浮かべた輩には必ず裏があるわ」

「あ、あははは……いやあ、そう言われると困るんですが……」

「ま、いいわ。で？ 何か用？」

「はい。独りでつまらなそうでしたので、声を掛けてみました」

ニコニコと笑顔で赤髪の少女は言う。

コイツはお節焼きだ、と彼女は思った。
そして、この手のタイプにはどんな言葉を言っても意味がないことも彼女は短い人生経験の中で知っていた。

「いやー、私は中国出身で日本に行つて、それからドイツに来たんですが、随分と凄いですね。ホント、故郷とは大違いです。あ、出身はどちらで？」

「さあ？ 物心ついたときはドイツ国内のあちこちを彷徨っていたから。親の顔も知らないわ。たぶん、見た目からするとドイツ出身じゃないかしら」

「それはまた中々ヘビーな人生ですね。ちなみに私は家族を匪賊に殺されて、それから売られて買われて、という人生でした」

「……あなたも随分とヘビーじゃないの」

「そうかもしれませんがね……聞いたところによると、ここにいる殆どの子がそういう感じですよ？」

赤髪少女の言葉に彼女は周囲に視線を巡らせてみた。

ふと、ある少女が目についた。

その少女はまるでフランス人形のような可愛らしい容姿をしている。

そのとき、赤髪の少女が再び口を開いたので、彼女は視線を戻す。

「それですね、ある日本人に買われて日本に渡ったのはいいんですけど、そこで大失敗しちゃいましたね。捨てられたところをヴェルヘルム様に拾われたんです」

「ふうん……」

心底興味無さそうに呟く彼女に赤髪の少女は特に気にする事も無く、尋ねる。

「あなたはどうでしたか？」

「似たようなものね。食う為に体売ってて、あるときやってる最中に相手が首絞めてきて、それで死にそうだったところを助けられた。首絞めると下も締まるみたいだわ」

「……それってホントですか？」

「やってるのがベルリンの公園だったのよ。あの方はそこが散歩コースだったみたいだから。それから三食飯付き、給料も出すっていうから、しばらくメイドやって、私の淹れる紅茶が美味いから俺のメイドになってくれて言われてこうなってるの」

「それって口説かれてません？」

「そうなるかしら。まあ、私としても助けてくれた恩はあるし、それにあの方、物凄く分かり易くて安心できるから」

「ヴィルヘルム様ってプライベートでは我が儘、泣き虫、甘えん坊っていうどうしようも無い性格ですからねえ」

母性をくすぐられます、という赤髪の少女に彼女は首を傾げる。

「あなたもヴィルヘルム様のメイドとして働いた経験があるの？」

「はい。ヴィルヘルム様が日本にいる間に。それから私はヴィルヘルム様の薦めで中国に戻って拳法をやり始めました。少林拳とか八極拳とか知ってます？」

そう尋ねる赤髪の少女に対して、彼女は首を横に振る。

赤髪の少女は特に気にした様子もなく、言葉を続ける。

「まだまだ始めたばかりですから、全然です。学校を卒業したら、また中国へ戻って満足のいくレベルにまでしたいと思います。あ、そっいえば名前言ってませんでしたね？」

「ええ。私はサクヤ・ブライトクロイツ。ヴィルヘルム様に名付け

てもらったの。それまでは名前も姓も無かったから」

「私は劉美鈴。元は美齡でしたけど、過去を吹っ切る為にヴィルヘルム様に付けてもらいました」

この2人に限らず、ヴィルヘルムは集めた子供達で名前が無いものは全て自分で名付けていた。偶にネタに走ってみたりするが、それでも全員マトモな名前である。

また、メイド学校及び執事学校の第一期生のうち、90%以上が訳有りであった。ドイツが豊かになっても国内の犯罪件数は他国よりはマシ程度であり、これが他国となれば言わずもがな。そして、世界中で特に酷い国は統一こそされているものの、それでも治安が悪い中国と混乱が続くロシアであった。

1917年 5月中旬

ヴィルヘルムはベルリン宮殿の自身の執務室にある人物を招いていた。

「楽にしてくれ」

彼の言葉に招かれた人物はソファに腰を下ろす。

それを見届けた彼もその対面のソファに腰を下ろした。

「それでどうかね？」

ヴィルヘルムの言葉に彼が頷いて、鞆から書類を出し、それを彼に渡す。

それを受け取り、ヴィルヘルムは「ほう」と感嘆の息を洩らす。

「よくまあ、こんなに集めたもんだ。トウハチエフスキー元帥」

ヴィルヘルムの言葉に書類を渡した人物……ミハイル・トウハチエフスキーは笑みを浮かべた。

親衛隊の全ての権限がある為にヴィルヘルムはトウハチエフスキーを創設と同時に元帥位を与えている。

親衛隊に限れば何でもできる彼だからこそ罷り通る人事であり、トウハチエフスキー以外にもイワン・コーネフ、ゲオルギー・ジューコフなどは尉官でありながら、既に佐官待遇となっていた。

新しい組織である親衛隊に不足しているのは兵士、将校をはじめとして枚挙に暇が無い。

故に若くても有能となるだろう人物を積極的に厚遇していた。

勿論、勉強不足・経験不足であるからヴィルヘルムはその穴を少しでも埋めるべく、陸軍との合同図上演習やら何やらの開催を正式発足と同時に積極的に行っている。

今のところ、武装親衛隊は陸軍のみであり、海軍、空軍ができるのはもう少し人員が充足されてから、ということになる。

さて、トウハチエフスキーが提出したのはヴィルヘルムの護衛部隊であり、親衛隊最初の部隊でもある「ヴィルヘルム親衛連隊」の名簿であった。

「志願者2000名とか、どうやって集めたんだ？」

「大多数は閣下が集めて、今年適齢に達した少年達です」

「……少なくとも士気と忠誠心は問題ないな。ところで適齢とは何歳のことかね？」

「16歳です。仰った通り、士気・忠誠共に抜群です。彼らを鍛えて数年で使えるようにします。バルカン・ベルギーでの戦訓を取り入れた実戦的な訓練を行うので実際にはもう少し早くなるかもしれません」

なるほど、とヴィルヘルムは頷いた。

彼のやり方はある意味、貧困な子供達を救っていると言えるが、やっていることはオスマントルコのデヴシルメ制度と似たようなものである。

実際、ヴィルヘルムはメイド・執事学校及び親衛隊創設に辺り、このオスマントルコの遺物とでも言うべき制度を一応調査させていた。

勿論、彼には貧困な子供達を救うという良心的な目的もあったが、同時に信頼・信用の置ける自分に対して狂信的な兵隊を手に入れるという目的も付加された。

先のニュルンベルク風邪の一件以来、ヴィルヘルムはある疑念を抱くようになったのだ。

その疑念とは「必要無くなったら暗殺されるのではないか？」というものである。

ドイツの事情を知り過ぎていること、そして、他国に未来情報の漏洩が無いように、だ。

死人に口無し、自分が死んだ後、宰相であったことを公表して英雄に祭り上げてオシマイ。

また、ニュルンベルク風邪の処分が減給3ヶ月で済まされたこともその疑念に拍車を掛けていた。

「強いドイツが見たい」とヴィルヘルム2世は言った。
では、世界でドイツが経済的・軍事的に最も強くなってしまったら？

もし、彼が転生した当時のままであったなら、気にも留めなかっただろう。

しかし、色々と政治の世界を経験した彼はその疑念を抱かずに入られなかった。

「何か問題があったなら、遠慮なく言ってくれ。少なくとも数年以内に親衛隊は実戦に投入される可能性がある」

「フランスですか？ それともロシアですか？」

「おそらくフランスだ。最近、フランスの動きがきな臭い……以前からきな臭いが、最近は特に顕著でな。ロシアとの前に一戦交えることになるだろう」

国防省の予定ではフランスを可及的速やかに攻略した後、返す刀でロシアを攻撃する予定となっている。しかしながら、フランス軍の実力が上がっていることなどを考慮すると、対フランス戦は速まる可能性もあった。

ドイツはフランスが周辺国と秘密裏に同盟を結んでいることを未だに掴んでいない。

それだけフランス側が嚴重に秘匿している証であった。

「親衛隊の早期拡大と実戦化に期待する。以上だ」

トウハチエフスキーが退室した後、ヴィルヘルムは空軍から上がってきた書類に目を通し、思わず笑みを浮かべる。

「……空軍もようやく形が整ってきたか」

ドイツ空軍は主に2つの部門に分かれており、それは戦術空軍、戦略空軍の2つである。

戦術空軍は地上軍の支援を目的とした戦術爆撃、戦略空軍は工業地帯などの敵国の戦争遂行能力そのものをそぎ落とす所謂、戦略爆撃を目的として設立された。

戦略爆撃はコストパフォーマンスが高いとはいえない。

むしろ、相手国の国民の戦意を高揚させてしまう可能性が高い。

しかし、ヴィルヘルムは大国相手に戦略爆撃は有効だ、と考える。たとえ数日であっても、工場の生産をストップさせることができる。ればその分、こちらは多くの兵器を作ることができる。

積みもり積もったその差によって押し潰す、というのが狙いだ。

「このフォッカーD・5は性能からすると、史実のフォッカーD・7クラス……か？ 他にも双発爆撃機とか四発爆撃機とか……中々良いじゃないか」

意外と知られていないが、史実の第一次世界大戦ではイタリアの三発爆撃機のカプロニCa・36、ロシアの四発爆撃機イリヤ・ムロメツツ5、イギリスのハンドレページV-1500、ドイツのツ

エッペリン・シュタツケン R - 6 などが投入されている。

ヴィルヘルムの改変により、技術が加速されている為にこの段階で登場しても、何らおかしいことではなかった。

「……このだな、古臭い感じが何かこう、じんわりとくるものがある」

同封されていたそれぞれの機体の写真を見て、彼は思わず呟く。
第二次大戦から現代に至るまでの航空機と比べたら、野暮ったい印象を抱かせる写真に写った機体は機能のみを追求する輩には到底理解できないだろう、ある種の美しさを持っていた。

「よし、航空機博物館を作ろう。でもって、洩れなく保存だ」

ちなみに彼は戦車博物館なるものも既に作っている。
将来的に艦船博物館も作ろう、と言い出すかもしれない。

「ツエッペリン伯爵からは降下猟兵用の輸送飛行船や通常の部隊を輸送できる大型飛行船なんかも作ってもらっているし……ヘリウムの輸入も順調」

史実では空軍所属であった降下猟兵であるが、装備の開発・調達の煩雑さを嫌った為に陸軍所属となっている。

降下猟兵の発足は1912年のことだ。

飛行船を使うことで迅速に部隊を展開できる、という国防大臣からの提案が始まりである。それからヴィルヘルムの後押しもあり、数年でそれなりの規模を持つ組織となっていた。

ヴィルヘルムが後押しした理由としては飛行船から降下するドイツ軍人という点に惹かれたからであった。

将来的には『最後の大隊』なんていう名称の親衛隊の降下猟兵部

隊を作ろうとすら思っている。

また大型輸送飛行船だが、ヴィルヘルムは21世紀のアメリカ軍の大規模戦略輸送の真似事をやろう、と考えていた。

どちらも発着地点と天候が最大の問題となってくるが、これは飛行船でなくとも言えることだ。勿論、航空機も対空兵器も然程発達していないからこそ可能な芸当であることは言うまでもない。少なくとも1930年代に入ればこのような、飛行船を使った大規模輸送は、後方でならともかく、前線付近ではとてもではないが危なくてできない。

なお、飛行船の浮力として使われるガスは当初こそ水素であったが、現在はアメリカから輸入されているヘリウムが主流である。

「来るべきロシア戦線では飛行船の運用が鍵となる……素早く進撃する為には飛行船が不可欠だ」

そのロシア戦線及びフランス戦線で主力とされている三号戦車はディーゼルエンジンは未だものにならない為にガソリンエンジンを搭載した二号戦車がB型として量産が開始されている。武装・装甲などはA型と同じ、速度と航続距離はA型に比べ低下しているが、それでも全体的な性能向上を果たし、二号戦車よりは強力だ。また、価格を二号戦車の2倍程度に抑えることができたのもヴィルヘルムが許可を出した要因でもある。

ちなみに、価格を抑えることができた最大の要因は徹底的な部品の共通化により他の装甲車両の多くの部品と互換性を確保することができた為であった。

東部戦線でソヴィエト軍を蹴散らすドイツ軍を思い浮かべて、悦に浸っているヴィルヘルムの右耳に妙に冷たい風が当たった。

「ぎゅわっ!？」

椅子から飛び上がらんばかりに驚き、冷たい風が当たった耳を両手で押さえつつ、周囲を見回してみる。しかし誰もいない。不思議に思いながら、顔を前に向けると、目の前にアン・ブーリンの顔があった。

「……お前か」

「それも酷いけど、あんまり会いにきてくれないのも酷いと思うの」
ん、と目を閉じて顔を突き出す彼女にヴィルヘルムは行動でもって示す。

彼女の頭を片手で抱いて、自身の顔を彼女へと近づける。
そして、唇が触れ合う。

ヴィルヘルムの体温と彼女の冷たい体温……体温とっていいかどうかわからないが、ともかく彼は生暖かい感触を感じた。

そして、彼女はヴィルヘルムの閉じた口を舌で突く。

彼が口を開くと、彼女は舌を彼の口内へと進入させ、彼の舌と絡み合わせ、ヴィルヘルムはアンの冷たい舌を、アンはヴィルヘルムの暖かい舌を堪能し始める。

真昼間の仕事場で何をしているんだ、と思えないでも無かったが、誰も見ていないが為に問題ないといえば問題なかった。

やがて、2人はゆっくりと顔を離す。

「……やるのはいいんだけど、後始末が大変なんだよな」

一応、アンに触れることはできるが、唾液がつくことはない。
故に唾液は銀色の橋を作ることなく、下に落ちる。

幸いにも書類に被害は無かった。

「ところでヴィルヘルム」

後始末が面倒だ、と憂鬱な気持ちになっているヴィルヘルムにアンは言葉を掛ける。

「最近、あなたに落ち着きが無いってエリカから聞いているのだけど」

アンは人生の先輩兼妾の先輩としてエリカに頻繁に会いに行っている。

科学者も匙を投げた物質透化を駆使できるアンにとって、生命研究センターで見習いとして働くエリカに会うことは然程難しいことではない。

「……そうでもない」

「あなたは嘘をつくとき、鼻の頭に血管が浮き出るわ」

アンの言葉に慌てて、鼻の頭を押さえるヴィルヘルムはそこで気づいた。

「さ、お姉さんに話してみなさい。何があつたの？」

につこりと笑顔で告げるアンにヴィルヘルムは降参とばかりに両手を挙げ、彼の疑念を彼女に話し始めた。

「まあ、当然のことじゃないかしら」

ヴィルヘルムの話聞き終えたアンは彼にそう告げた。

「けれど、ヴィルヘルム2世があなたを切り捨てることはないと思うわ。だって、彼にはそうする理由がないもの。きつとお咎めが無いに等しいのは、彼が言うようにあなたの功績を鑑みたからでしょう」

身内鼻屑とも言っけど、とアンは繋げる。

「……皇太子殿下などと関係を深めるべきか」

「というか、深めてなかったの？」

「会う機会が無いからな」

「自分より偉い人の親族にもご機嫌を取っておくのは、宮廷での常識よ？」

そんなの知らん、と言いつうになったヴィルヘルムだが、グツと我慢する。

それが常識ならばそれに従うべき……要は郷に入りては郷に従えであつた。

彼1人が文句を言っても変わりはない。故に文句を言う前にさつさと行動するべきだろう。

「それと、ヴィルヘルム2世にあなたの気持ちを打ち明けておくべ

きでしょう。下手をすると、クーデターを狙っているのでは、と勘
繰られるわ」

「……わかった。そうしよう」

ヴィルヘルムの前途は明るいのか暗いのかハッキリとしてはいな
いが、少なくとも、楽なものではないことだけはハッキリとしてい
た。

第18話 親衛隊と空軍とフリーンお姉さんの出張相談iノベルリン宮殿（後書

幽霊がいらないことを明確な根拠と共に証明できる人間って凄いと思う……っていうか、間違い無くノーベル賞ものじゃね？

就活、経済危機に豚インフルが追加されて、最凶なことになっております。

第19話 勅命「根性いれなおしてこい」

1917年6月某日

ヴィルヘルムは自身の不安をヴィルヘルム2世に打ち明けるべく、彼の執務室の扉を叩いた。

「ん？ どうしたヴィルヘルム。そんな思いつめた顔をして」

ヴィルヘルム2世の言葉にヴィルヘルムは知らず知らずに力んでいたことを悟り、深呼吸を一つする。そして、彼は意を決してヴィルヘルム2世に告げた。

「陛下……私は必要無くなったら始末されますか？」

「……は？」

ヴィルヘルム2世は啞然とした顔をヴィルヘルムに披露する。

この瞬間、ヴィルヘルムはドイツ皇帝を啞然とさせるといふ偉業を達成したことになった。

「いや、待て、どうしてそう考えるに至った？ さっぱり話が見えんのだが」

ヴィルヘルムはその言葉に頷き、そう考えるに至った経緯をヴィルヘルム2世に話し始めた。

「ヴィルヘルム……そなたはバカか？」

ヴィルヘルムの話を聞いたヴィルヘルム2世は呆れた顔をして、そう言った。

ヴィルヘルムがその言葉に反応するよりも早く、ヴィルヘルム2世は更に言葉を紡ぐ。

「何度か言っているかもしれないが、そなたのおかげでドイツはここまでこれたのだ」

ヴィルヘルム2世はゆっくりと諭すように告げた。

「確かにそなたは大雑把な目標しか示しておらぬ。しかし、目標が無い状態で頑張るよりも目標があった方がより効率良く頑張れる。国家にとっても人間にとっても目標の設定が重要なのだ。そなたほどドイツの水先案内人に相応しい人物を余は知らぬ」

当時、ヴィルヘルム2世は宰相ビスマルクが辞任した時には「老いた水先案内人に代わって私がドイツという新しい船の当直将校になった」と述べたが、今、彼はそのことを思い出して苦笑する。

「そう、船に将校だけがいても意味がない。水先案内人と将校の両方が必要なのだ」

知らずにヴィルヘルム2世はそんな言葉を発していた。
そして、彼は咳払いを1つして、言葉を続ける。

「いや、そなたが生まれたのがドイツであって良かった。これがフランスであつたなら、と寒気がする。もしそうならば、今頃ドイツはフランスの一地方になっていたに違いない」

うんうん、と頷くヴィルヘルム2世に対し、ヴィルヘルムは問い掛ける。

「しかし、私自身の能力とは余り関係ないような気がするのですが……」

ヴィルヘルムの言葉にヴィルヘルム2世はやれやれ、と肩を竦める。

素直に喜んでから問い掛ければ良いのに、と彼は思った。

「その後ろ向きというか、自虐的な考え方はよろしくないことだ。さて、そなた自身の優秀な点だが、これもまた幾つかある」

顎に手を当てて、ヴィルヘルム2世は告げる。

「第一に事務処理能力だな。そなたほど優れた輩はドイツにはそうおるまい。第二に文才。これもそなたは未来を知っている云々というかもしれないが、それでも世界中で売れているのは事実だ。故にそなたの才能だろう」

「はあ……」

ヴィルヘルムは不満げな顔で曖昧な返事をする。

皇帝に次いで権限が強い国家統括官の地位にある彼としては、も

う少し違う点を評価してもらいたいというのは当然だろう。

「第三に政策立案能力。育児法や親衛隊法、その他諸々の法律の原型を作り上げたことからこれらの官僚よりも優れていると判断できる」

「前世は法学部所属でしたので、それくらいは当然かと……まあ素人の知恵というか生兵法というか、そういうものですが」

その言葉にヴィルヘルム2世は苦笑する。

「余がそう判断したのだから、少しは喜べ。さて、最後に外交官としての能力だ。非公式とはいえ、イギリスとアメリカからドイツに有利な条件を引き出した点は評価に値する」

「ああそれと」とヴィルヘルム2世は続ける。

「日本料理をドイツに持ってきた点も評価できるな。寿司や天麩羅、鰻は美味い。特に寿司は見た目はアレだが、食べてみて、余りの美味しさに頬が落ちそうだった。あれほど驚いたのは生まれて初めてだ……よし、昼は寿司にしよう」

「……それは褒めているんでしょうか？」

「無論、褒めているに決まっているだろう。ああ、ヴィルヘルム、そなたも寿司は食べるか？」

「あ、はい。経費で落ちますよね？」

「問題ない」

ヴィルヘルム2世は執務机の上に置かれたメモ用紙に注文を書き、外にいる衛兵を呼び出してメモを渡した後、彼は再びヴィルヘルムに向き直った。

「さて、日本人からすればその謙虚さは美德かもしれないが、そなたはドイツ人だ。違うか？」

ヴィルヘルム2世の問いにヴィルヘルムはすんなりと首を横に降る……すなわち、自分はドイツ人であると肯定することができた。ドイツ人として生きる覚悟を決めたことが影響しているのだろう。ヴィルヘルム2世はヴィルヘルムの答えに満足げに頷き、言葉を続ける。

「その謙虚さは付け入る隙となる。もつとえばいいように利用されかねん。それに自虐的な考え方は軟弱、臆病とも取られかねない。そなたを矯正するには軍に放り込むのが余が一番だと思っただが、どうかね？」

「……えーと、その間、事務処理は誰が行うので？」

ヴィルヘルム2世は笑みを浮かべてみせる。

「そなたが旅行に行ったときにチームを作ってくれば良い問題ないだろう？」

「……できれば家庭教師みたいにして欲しいな、と思っんですが……」

「何を言う。貴族の子弟ならば軍に入り、それなりの階級に就くのは当然。猶予を2年やろう。これは勅命だ」

ヴィルヘルムは盛大な溜息を吐いた後、ヴィルヘルム2世の勅命を了解した。

1918年2月上旬

「ハンガリーが？」

ヴィルヘルムの確認の意を込めた問い掛けに、RZIA局長であるフランツ・カリウスは重々しく頷いた。

「ふむ……締め付け過ぎたか」

ヴィルヘルム2世はそう呟き、居並ぶ定例会議のメンバーを見回す。

ある程度は予期できていたのか、動揺している者はいない。

1917年は何事もなく過ぎ去ったが、今年は動乱の年になりそうであった。

事の始まりはフランスがロシアのボリシェヴィキやイタリアなどと秘密裏に同盟を結んだ時点にまで遡る。

ポアンカレは彼らと結んだ後も味方を増やすべく、ドイツの属国と化しているハンガリーに目をつけた。ハンガリーはドイツへの支払いのおかげで経済は荒廃し、国民は餓えに苦しんでいた。その困窮するハンガリー国民の為に、ドイツの幾つかの民間ボランティア団体が無償で食糧援助をしており、この為にハンガリーでは国民と政府の間に溝ができ、親独の国民と反独の政府という構図ができている。

もつとも、国民全てが親独というわけではなく、ハンガリーの現

状はドイツのせいではないか、と疑う者もいる為に親独6に対して反独4という比率になっている。

なお、ヴィルヘルムの提案した代理戦争案により、小競り合いはバルカン半島では日常茶飯事となっており、列強諸国は兵器のテストや旧式兵器の売却などで有意義に活用していた。

ともあれ、そのような事情からフランスがハンガリーを味方に抱きこめる可能性はあり、ポアンカレがドイツ戦勝利後の分け前と経済回復の為に支援などをハンガリー政府に提示し、懸命な説得をして、どうにか協力を取り付けることに成功したのである。

ドイツの裏庭と言っても良いハンガリーであるからこそ、RZIAの諜報員達の数も多く、ハンガリー国内に大規模な諜報網を構築していたが故に今回の情報が入ってきたのだ。

「ハンガリー動乱、か……何とも皮肉だ」

ヴィルヘルムの言葉に居並ぶメンバーが苦笑する。

史実の1956年、共産主義……より正確に言えばスターリン主義からの脱却を図った民衆の蜂起が、この世界では反共であるドイツからの脱却を図る為にフランスと結びついたのだ。

変な因縁のようなものを彼が感じてもおかしくはない。

「ともあれ、ハンガリーがフランスにつくのならば早急に脅威を取り除かねばならん」

「しかしながら、フランスが背後から刺してくる可能性もありますので、慎重に動かねばならないかと」

ヴィルヘルム2世の言葉に外務大臣が進言する。

その意見に対して、ヴィルヘルム2世はヴィルヘルムとカリウスに視線を向ける。

2人は心得た、とばかりに頷いた。

「それに関しては問題ありません。あちらに非がある状態にすれば良いのです。トルコやベルギーのように。無論、同盟国に予め伝えておく必要がありますが」

ヴィルヘルムに続いてカリウスも言う。

「RZIAは命令があれば迅速かつ隠密にそうすることができます。ご安心を」

2人の意見に外務大臣は渋い顔をして、口を開いた。

「万が一にも事が露見しないようにしてもらいたい。私が言いたいことはそれだけです」

「他に何か意見がある者は？」

ヴィルヘルム2世が出席者にそう尋ねると、財務大臣が口火を切る。

「可能な限り短期間で決着をつけるようお願いします。ある程度の軍拡は許容しますが、あくまである程度ですので」

国防大臣を睨みながら、そう告げる彼に国防大臣は肩を竦めてみせる。

これもまたおなじみのやり取りであった。
そして、ハンガリー進攻が正式に決定され、この作戦名は「春の目覚め」とされたのだった。

2月の定例会議により、4月中旬を目処に開始されるハンガリー進攻作戦「春の目覚め」に向けて、ドイツ国内では急ピッチでハンガリー進攻兵力の編成・準備が進む中、RZIAはハンガリー国内で反独派と親独派の対立を煽り始めていた。

この動きを悟ったフランス側もドイツとの国境地帯に更に兵力を集め始めたが、ここでフランス側にとって誤算が起きる。

イタリアもまたドイツとの国境に大兵力を集結し始めたのだ。

これを見たドイツは「フランス、イタリア、ハンガリーが秘密裏に同盟を結んでいるのではないか？」と疑いを持ち、部分的に動員を開始し、イタリア国境の兵力を増強し始めたのが3月下旬のことだ。

この段階において、春の目覚め作戦の準備は一応進められていたが延期の可能性は高まっており、その証としてRZIAの工作は無期限停止にされていた。

しかし、一度始まった対立は収まるどころか激化の一途を辿り、4月上旬にはブダペストで大規模な親独派のデモが勃発、その鎮圧にハンガリー政府が軍を投入したことで反独派と親独派の争いは一気に内戦へと発達した。

「拙いな、非常に拙い」

ヴィルヘルム2世の眩きに他の会議の出席者達の心を代弁していた。

4月に入ってからというもの、連日連夜会議が開かれており、メンバーは疲労の色を隠せない。

ハンガリーの親独派が立ち上げた、自由ハンガリー政府から悲鳴のような救援要請が毎日ドイツに届いていた。

ドイツとしてはハンガリーに進攻したい。

しかしながら、フランス、イタリアと事を構えるにはまだ準備が整っていない。

また最近ではロシアで皇帝派とボリシェヴィキの抗争もより激化しているが故にロシアにも注意をせねばならない。

そして、同盟国であるイギリスもフランスと事を構えるのは待つて欲しい、と言ってきている。唯一、日本は列強に力を示そう、とやる気満々だが、日本だけでは戦力的に不安が残っていた。

駐日ドイツ大使館にいる駐在武官からは日本軍はヨーロッパの戦場には不適の、二流軍隊という報告が上がっている。

その理由は主に3点だ。

陸軍が歩兵中心であり、戦車・火炮に乏しいという点、海軍は前弩級戦艦ばかりであり、かろうじて金剛級4隻が就役していたが、その反面、補助艦艇が少ない為にバランスが悪いという点、そして陸海軍に共通する問題点として、生産力に不安があり総力戦には耐えられない、ということである。

史実と同じ程度のフランスならばどうにかなったかもしれないが、ドイツに対抗してフランスもまた富国強兵を国是としており、史実よりも強化している。

もし、日本軍とフランス軍が正面からぶつかったなら、日本軍が叩き潰されるのは目に見えていた。

もっとも日本は先の日露戦争やヨーロッパの情勢、そして同盟国であるドイツやイギリスの支援により、欧米に追いつけ追い越せ、

と工業化を推し進めている。故に陸海軍の予算が史実よりも減少しており、仕方がないといえば仕方がない。

また、中国の東北三省の共同統治・市場化については「ロシアのゴタゴタが片付いた後」ということが参加国の協議によって決まり、実行に移されるのは1930年代前半の予定であった。

「採るべき策は主に3つあると思います」

ヴィルヘルムの言葉に会議のメンバー全員が彼へと視線を向ける。

「1つ目は当初の予定通りにハンガリーに進攻すること。2つ目はハンガリーに進攻せず、フランスとイタリアを叩くこと。3つ目は何もしないで国力増強に努めること。3つ目以外はイギリスに頭を下げる必要があります」

ヴィルヘルムの言葉に真っ先に反応したのは財務大臣であった。

「財政面から言わせてもらいますと、3番目が最善かと思います。そもそも国防省の作戦計画では1920年代にフランスと戦うという予定になっています。その頃にはドイツはフランスもイタリアも鎧袖一触で叩き潰すことができる国力を得ている筈です」

「だが、状況が変わった。このままではハンガリーがフランスについてしまう。ドイツの下腹部を防御するには攻撃よりも多い兵力が必要になる。それは財政面から見て、問題があるのではないか？」

財務大臣の意見に国防大臣が反論する。

それを横目に見つつ、外務大臣が口を開いた。

「最近のポリシェヴィキの活動が活発化している点から、もしかしたら彼らもフランスと繋がっているかもしれません。フランス製の戦車が現れた、という噂もあります」

「それはありえないのでは？ ポリシェヴィキは資本主義を不倶戴天の敵としています」

「しかし、統括官。この時期に活動が活発化していることとそのような噂から万が一ということもあります。また、ポリシェヴィキの活発化により、皇帝派が勢力を大幅に減じていることもまた事実です。ただの農民達が皇帝派の正規軍に対抗できますか？」

議論百出とはまさにこれだ、という状況であった。

この状況を収めるべく、ヴィルヘルム2世は咳払いを1つしてから、切り出す。

「最悪の事態を想定して動くべきだ。また先入観で判断するのもよろしくない」

ヴィルヘルム2世の言葉にヴィルヘルムは仏頂面になる。

彼の反応にヴィルヘルム2世は苦笑し、更に言葉を続けた。

「フランスとポリシェヴィキが結びついている、と想定して我々は動くべきだろう。そして、この場合、我が国としては当初の予定を変更せざるを得ない」

ヴィルヘルム2世はそこで一度言葉を切り、出席者を見回す。

「ハンガリーを攻める。フランス、イタリアは仕掛けてくるだろう。イギリスに頼んでみるが、いざとなれば我が国は単独でフランスとイタリアを相手にせねばなるまい。ポリシェヴィキが仕掛けてくるかどうかは不明確だが、ともかく、ロシアへの支援を増やさねばな

るまい。そしてハンガリー攻略後、準備期間に1年、作戦期間に1年だ。準備期間は防御に徹する。準備が整ったら反撃することになる」

ヴィルヘルム2世は獰猛な笑みを浮かべて、告げる。

「カエルはキャベツを食べることはできん。つまりはそういうことだ」

会議にてドイツの方針が決定され、対フランス・対イタリアに向けての準備及び戦時体制への移行に各省庁が追われる中、ヴィルヘルムはトウハチエフスキーに命じて親衛隊に1年以内にとある師団を創設するよう命じた。

昨年中に親衛隊では幾つかの師団が書類上では創設されており、今回の師団は4つ目のものとなる。

第4SS装甲師団「ヴァルキューレ」

イタリア戦の先陣を務めさせる、女性のみで構成された部隊であり、ヴィルヘルムの趣味が多分に反映された部隊でもある。

基本的にイタリア人は惚れた女と自分の街を守るとき、その2つ

の場合にのみ本気になる。

そんな彼らであるから、国家同士の戦争には余り向いていない。というよりも、歴史的にローマ崩壊以降、イタリアという国は存在しておらず、都市国家が乱立していた。一つの国家として纏まっていなかった点はドイツも似たようなものだが、イタリア人の気質が合わさってそうなっている可能性もある。

ともあれ、ここで重要なのは実質的に1861年のイタリア統一戦争までイタリアという国が存在していなかったということだ。

その為にイタリアという国に帰属しているという意識がイタリア人には薄い。国家同士の戦争において、士気はそこまで高くはないと予想ができる。

そんなイタリア軍に対して女性のみで構成された師団をぶつけたらどうなるか。

ある程度予想がつくが、ドイツにとって有り難い結果になる可能性が高いだろう。

1918年4月27日

「壮観だ」

ヴィルヘルム・フォン・ルントシュテットは小高い丘の上から、眼下に広がる軍勢を見て、思わずそう呟いた。彼は陸軍中佐としてここに立っており、彼がそうなった理由はヴィルヘルム2世の命令

であつた。

ヴィルヘルム2世の命令を要約すると、ちょうどいいから戦場を間近で見に来て、というものだ。そういうわけでヴィルヘルムは装甲教導団の第2装甲連隊の連隊司令部にオブザーバーとして参加している。

勿論、彼は昨年に命令されて以来、暇を見て士官学校から取り寄せた教科書を読んだり、兄であるカールに教えを請うたりして、学んでいるが、それらは所詮付け焼き刃である。そういうわけで実際のお仕事は見聞きしたものをレポートに纏めることだ。

なお、ヴィルヘルム2世が根回ししたが故にヴィルヘルムは中佐という階級に就いている。ある意味、親心と言えなくも無いが、ヴィルヘルムからしたら、下士官や兵士、他の将校からいらぬ反感を買いそうで戦々恐々としていた。

「中佐、ここにおられましたか」

背後から掛けられた声にヴィルヘルムは振り返る。

「ロンメル中尉、見たまえ。これがドイツの力、略してドイツ力だ」
「略すも何もそのまんまな気がします……」

ヴィルヘルムの言葉に答えたのは、彼のお守り役に任命されたエルヴィン・ヨハネス・オイゲン・ロンメル中尉。史実では砂漠の狐と呼ばれ、チャーチルにナポレオン以来の戦術家とべた褒めされた彼は昨年、中尉に任官したばかりであつた。

「中佐、グデーリアン大佐が御呼びです」

「わかった。行こう」

ヴィルヘルムは再度、進軍の合図を待つ兵力を見た後、ロンメル

と共に歩き出した。

「大佐、御呼びですか？」

ロンメルを伴って、連隊司令部へとやってきたヴィルヘルムは一息ついているグデーリアンを見つけて、声を掛けた。

「中佐、先ほど連絡があつてな。本日1200をもって、ハンガリー軍へ攻撃を開始せよ、だ。覚悟を決めておくように。あと20分ほどだから、司令部にいるように」
「了解しました」

しかしながら、ヴィルヘルムはやることがない。

また、彼には恐怖も余り無い。

自身が矢面に立つ事がなく、そして、史実での韋駄天ハインツの活躍を知っている彼としては敵はあつという間に降伏するだろう、という楽観的な考えでもあつた。

歴史の転換点であるにも関わらず、随分と呑気な考えである。

「中尉、始まるまでに君の武勇伝を聞かせてくれないか？」

「では、僭越ながら、バルカンで1個大隊を捕虜にしたときのこと

をお話しさせていただきます」

戦闘開始まで、ヴィルヘルムはロンメルの話をもとを取ったりするなどして、聞くことになる。後に欧州大戦と呼ばれる大戦争の幕開けは刻一刻と近づいていた。

第19話 勅命「根性いれなおしてこい」（後書き）

軍で根性いれなおしてこい系のことを皇帝に言われた。

むさ苦しさで俺の寿命がヤバイ。エリカ可愛いよエリカ。

by ヴィルヘルム

第20話 大戦勃発

1918年 4月27日 午前11時

宣戦布告文がベルリンの外務省にて外務大臣から駐独ハンガリー大使に、そして、ハンガリーのブダペストでは同じように駐洪ドイツ大使からハンガリー政府の外務大臣に手渡された。

宣戦布告の口実……もとい、大義名分は在ハンガリーのドイツ人保護というものであり、その為にRZIAによりドイツ人が害された、という情報が各国へ盛んに喧伝されていた。

それからおよそ30分後、事態を知ったフランスがハンガリー側に立ってドイツに宣戦布告、オスマントルコ及びイタリアもまたフランスに続いて、ドイツに宣戦布告。

対してイギリスが同盟条項に則り、ドイツ側に立って参戦、オーストラリア、ニュージーランド、カナダなどがイギリスに続いて参戦、日本もまたドイツ側に立って参戦。

欧州を発火点とし、各国を巻き込んだ大戦争の勃発であった。

ベルリン王宮の皇帝執務室にて、ヴィルヘルム2世はソファに座り、ただ目を閉じて連絡が来るのを待っていた。

フランスをはじめとした反独諸国が連合を組んで、ドイツに宣戦布告することは当の昔に想定された事態。

そして、イギリスをはじめとした同盟国がすぐに動けないのもまた予定された事態。

何ら焦ることはない。

今の彼は明鏡止水の境地に至る為に瞑想をしている……という高尚なものではなく、ただ単に暇だからそれっぽく格好をつけているだけだ。

ポーズをするのにも飽きてきた頃、慌しい足音を彼は聞いた。

部屋の扉がノックされる。

彼が許可を出すや否や、「失礼します」という声と共に足早に補佐官が入室してきた。

「陛下！ 性根の腐ったブタ野郎のフランスとその他の国が我が国に対して宣戦を布告しました！」

普段なら叱責されるだろう、その汚い言葉遣いに対して、ヴィルヘルム2世は笑みを浮かべる。そう言うように指導したのがヴィルヘルムである、と知っていたからだ。

何故、そのように言うのかヴィルヘルム2世が彼に問い掛けたところ、様式美という答えが返ってきている。

フランス側から戦争を吹っかけられた場合には必ずそう言うのが彼の様式美らしい。

そして、彼の要望通りにそう言う補佐官も律儀だった。

「報告ご苦労。軍や各省庁には全て予定通り、と伝えるように」

ヴィルヘルム2世はそう言って、補佐官を下がらせると、昼食を

頼むべく、執務室に備え付けられた大量のメニューを取り出した。

同日 午前12時過ぎ

「こいつは凄い。鉄の暴風だ」

ヴィルヘルムは小高い丘の上に立ち、双眼鏡で戦場を覗いていた。

彼の横にはロンメル中尉が同じようにしている。

105mm、127mm、155mmの各種野砲の间断ない砲撃により、難聴になるのではないか、というくらいに辺りは五月蠅かったが、ロンメルにはヴィルヘルムの声が不思議と聞こえた。

「まだ始まりです！」

ロンメルは怒鳴った。

その声に気づいたのか、ヴィルヘルムが彼へと顔を向ける。

そのとき、無数の光の矢が独特の飛翔音を発しながら、ハンガリー軍の陣地へと撃ち込まれた。

皇帝のオルガンの異名を取る多連装ロケット「ヴルカン」が発射されたのだ。

トラックに発射台のレールを取り付けた、史実のソ連軍のカチューシャやマリーカそのまんまであり、面制圧兵器としてドイツ軍では多用されている。

「きれいな花火だ！」

その花火を受けている側からすれば堪ったものではないが、完全に人事であるのですっかり観客気分のヴィルヘルム。当然、彼のやることは軍人で生計を立てている者からすれば、良いものではない。故にロンメルが「これだから貴族のお坊ちゃんは……」と心の中で思うのも当然であろう。

もっとも、ヴルカンの発案者がヴィルヘルムだと彼が知っていたならばまた違った思いを抱いたに違いないが。

ともあれ、歩兵に頭を上げさせない、という点でヴルカンは最適な兵器だった。

そのとき、ヴィルヘルムが盛んに上を指差しているのにロンメルは気づいた。

つられて上を見上げると、そこには無数の航空機の群れが敵陣目掛けて向かっているのが見える。

後方に展開した戦術空軍が航空支援にやってきたのだ。

「単発機と双発機合わせておよそ5、60機か？ ふむ……米帝にはまだ及ばんな……いやまあ、他の戦線もあるだろうけど、二次大

戦後期の米帝ならそれでも5、6倍は投入できるしなあ」

グイルヘルムの呟きは砲声に掻き消されてロンメルには聞こえなかった。

生命研究センターの一室にて、エリカは開戦の報を知った。彼女の同僚や上司が熱狂する中、彼女は憂鬱な顔で自身の下腹部を優しく撫でた。

時間はグイルヘルムがエリカに次の戦争で従軍することを話したときにまで……およそ半年程遡る。

「嫌です！」

話した途端に返ってきたその言葉にヴィルヘルムは困惑した。そんな彼を余所にエリカは彼に抱きついて、その首筋に顔を埋める。

「嫌です……ヴィルヘルム様がそのような危険なところに行くなんて……」

「危険といつても、司令部にくつついていくだけだぞ？ 実際の仕事はレポート纏めるだけみたいだし」

「嫌……です……」

ほとほと彼は困り果てた。

彼は長い付き合いのメイド2人に助けを求める視線を送るが、その2人は会釈して、そそくさと部屋から出て行ってしまった。

内心、溜息を吐きながら彼は言葉を紡ぐ。

「陛下の命令だ。それに個人的にやっぱり武功が欲しいし……いや、自分でもそんな功績上げられるとは思えないけど」

戦場で指揮を取る、ということは付け焼き刃の知識でどうにかなるようなものではない。

もしどうにかなったならば、それは生まれ持った素質かただ運が良かったかのどちらかだろう。

「なら……陛下の命令を断ってください……私はお金も権力も何も入りません……ただ、あなたがいてくれれば……」

ひつくひつく、と泣き始めたエリカにヴィルヘルムは「あー」とか「うー」とか唸り始める。

彼自身、彼女にまるで恋人のように愛されているとは思っていなかった。

ただ縋る対象として、言うなれば宗教における神の代わりにされていると思っていたのだから。

いつの間に気持ちが摩り替わったんだ、と彼は思ったが、このような場面で考えるのは無粋だと思い、頭からその考えを追い出した。

「エリカ……」

彼はゆっくりと彼女の背中に両手を回し、耳元で囁いた。

「……ごめん」

「どうしてですか!？」

彼の謝罪の言葉にエリカは顔を上げて、彼を真っ直ぐに見据え、叫んだ。

そのとき、彼は見た。

彼女の綺麗な碧い瞳は涙で一杯になっているのを。

今までにない彼女の反応に彼は困惑しつつ、言葉を紡ぐ。

「陛下との付き合い、というものも勿論ある。それにさっきも言ったように武功を上げたいというのも本当だ。しかし……俺は今まで何人もの将兵を国家の利益……国益の為と割り切って死に追いやってきた。それに関しては後悔していない」

そこで一度言葉を切り、テーブルの上に置いてあった水差しからコップに注ぎ、一気に飲み干す。

喉を潤して、再び彼は口を開いた。

「きっと戦場はこの世の地獄だろう。安全といっても、戦死する可能性は勿論ある。だが、男はどうしようもない生き物だ。戦争と聞くと、心が昂ぶってしまう。例えどんなに忌避しても、心の奥底では祖国の軍服を着て、銃を持って戦いたいと思ってしまう。俺が戦場へ赴く理由は大したことじゃない。ただ祖国の為に最前線で例えそれで重傷を負っても、例えそれで死んだとしても、俺は後悔しない」

彼の口から言葉が飛び出してくる。

彼自身、ここまで饒舌になれるのか、と内心吃驚していた。

「それに……知っているか？ 將軍から兵卒まで、どいつもこいつも自然な笑顔なんだ。自分が国の為に戦える、と心の底から信じて笑って戦場へ行く。死の危険があるとしても、だ。そんな彼らを見て、感化された。きっとさっき言った理由はこじつけで、本当の理由はそんな風に笑える彼らが羨ましいからなのかもしれない」

そこまで言って彼は口を閉じた。

昭和後期生まれの、戦争どころか戦後の苦しい時代すら体験していない彼は国家の為に何かをする、ということが選挙での投票を除いて皆無であった。

それなのにひょんなことから、彼はこの時代に放り出され、その機会が与えられている。

また、前線に行っても問題ない、と彼自身が判断したのは、もはやドイツはそう簡単に滅亡しない、と判断したせいでもある。

各国の人材を青田買いし、良い環境を与え、技術でドイツが世界をリードできるようにし、特許料やら何やらで安定した財源を確保。また、ドイツが袋叩きに遭わないように列強最強のイギリスと潜在能力が非常に高いロシア、恩には恩でもって報いてくれる日本、弱体化しても超大国になりうる素質があるアメリカと友好的に付き合っていく。

そして、ドイツ国内の産業基盤を整え、発展させることで、国力そのものを底上げする。

ドイツが滅亡するのはそれこそ、ドイツが何がしかの抜け駆けをして列強から袋叩きにされるか、どうしようもない自然的要因によるものだとヴィルヘルムは考える。

そして、たとえ彼が死んでも、彼を宰相と知っている国民は皆無に等しいが故に対した混乱は起こらない。

未来の知識を持っている彼だからこそできた策は既に達成されていた。

そして、彼が転生直後に書き殴ったメモも綺麗に纏めてヴィルヘルム2世に提出済みだ。

やがて、小説家としてのヴィルヘルムは求められても、宰相としてのヴィルヘルムは求められなくなることを彼は気づいていた。

10年後には自分は今の地位にいないだろう、と。

おそらく、レーヴァテイン計画も「何に対して使うのか?」「頭の中にいる想像のドラゴンとでも戦うのか?」という議論になって打ち切られる筈だ、と睨んでいた。

それはそれで寂しいが、現実の前に浪漫は破れるからしょうがない、と半ば諦めてもいた。

彼自身、無理のある計画だよな、と提案したときはともかく、後

になって冷静に考えればそう思ってしまったのだ。

ともかく、そのような事情で国家としては自分がいなくても問題ないのだから、自分がここで前線に行っても良いだろう、と。

ヴィルヘルムの言葉を聞き、エリカは顔を俯かせている。

今回のことは彼女としては堪ったものではなかった。

確かに当初こそヴィルヘルムは彼女の継る対象だった。

そのままの関係ならば、エリカはヴィルヘルムに対して絶対に反抗しない存在になっており、今回も渋々ながら認める筈だった。

しかし、非常にベタであるが、彼に優しくされるうちに恋愛の対象へ摩り替わっていった。

ヴィルヘルムはベッドの上では勿論、日常においても、エリカに對し恋人に接するかのように接してしまった。

例えばソファに座って、エリカを寄り掛からせて、彼女の髪を手で梳いて、彼女を褒めたり。

例えば彼女の誕生日にはレストランを予約し、そこでプレゼントを贈ったり。

彼女が勘違いするのも無理は無かった。

エリカは顔を俯かせたまま、ポツリと呟く。

「……ヴィルヘルム様が自身の欲望に素直であることは私がよく知っています」

「だろうね」

「ですが、今回の件に関しては私も貴方様に我が伧を言わせてもらいます」

エリカは顔を上げ、ヴィルヘルムの目を見据える。

「ヴィルヘルム様……私に貴方様の子を孕ませてくださいませ」

予想外の我が伧な要望に彼は目を白黒させた。

してやつたり、と涙を拭いながら、笑みを浮かべるエリカがいた。

「ヴィルヘルム様……どうか、ご無事で……」

半年前のことを思い出し、半ば無意識に出てきたエリカの祈るような言葉は虚空に消えた。

同日 14時過ぎ

ヴィルヘルムは司令部と共にいよいよ前進となった。
そして、彼は予想とは違うやり方に目を丸くしていた。

「……凄く意外だ」

「そうでもないです」

彼の言葉にロンメルはそう返した。

オートバイに跨ったオートバイ擲弾兵、兵員輸送車という名目の
軍用トラックに乗車した擲弾兵、トラックに牽引される野砲や対戦
車砲、多連装ロケット発射台であるヴルカンを搭載したトラック、
申し訳程度の装甲を施し、7・92mm機銃を搭載した装輪装甲車。
それだけだった。

戦車も自走砲も無かった。

しかし、確かに第2連隊麾下の部隊には装甲大隊があつた筈だし、
現にヴィルヘルムは砲撃の後、戦車達を押し立てて、突撃していく
様を目撃している。

「いやだって、突破力が必要でしょ？ 敵の戦線を突破して後方に
回り込んで、と」

「ええ、そうです。その突破力に必要な速度が今の戦車では得られ

ません。ベルギーで得た戦訓です。あのときは鈍足の戦車と共に進軍した為にフランス軍が集まってきて非常に苦労しました。それから戦車は後詰として使われるようになってしまして」

暗にもつと良い兵器寄せ、と言っているようにも聞こえるロンメルにヴィルヘルムは苦笑する。

一番最初に敵陣に飛び込むのが脆弱なトラック達ということになる。

ドイツにとって不幸なことはベルギー戦前まではその鈍足な戦車達を先頭にゆつくりと進撃してもどうにかなってしまったことだ。

もっとも、一部の部隊というか、グデーリアン大佐はそれでは駄目だ、戦車よりは速いトラックやオートバイを先陣、後詰として鈍足の戦車を投入するという戦法に変化した。

無論、これは戦車の性能が向上するまで、という期限付きだ。

ヴィルヘルムはある疑問をロンメルに投げ掛けた。

「敵の戦車をどうやって破壊したんだ？」

「野砲の水平撃ち、対戦車砲による攻撃、ヴルカンの乱射、擲弾兵による地雷攻撃です。また、対戦車兵器としてベルギー戦時に配備されたパンツァーファウストですが、射程距離が非常に短い上に威力不足な為に肉薄攻撃の方がマシです」

ヴィルヘルムの顔がそれを聞いて蒼くなつた。

その蒼い顔のまま、彼はロンメルに震える声で尋ねる。

「それは、どうなつた？」

蒼い顔のヴィルヘルムに首を傾げながら、ロンメルは答えた。

「私の部隊のものは全て返却しました。他にも多くの返却があったらしく、兵器局は改良すると言っていました」

「……そうか」

深刻な顔つきのヴィルヘルムにロンメルは訳が分からずに首を傾げている。

全て、とは言えないが、これはヴィルヘルムの失点だった。

配備に関しては確かに彼は許可した記憶があるが、その返却云々に関しては記憶が無い。

帰ったら陛下に問い質そう、と彼は心に決めて、その問題は保留にすることにした。

「ルントシュテット中佐！　ロンメル中尉！」

2人は呼ばれた方を反射的に向くと、そこには若い兵士がいた。

階級章からは上等兵だということが分かる。

より正確に言うならば、上等装甲擲弾兵となる。

最下層の階級である兵よりも一階級上であるが、扱いとしては兵と余り変わらない。

彼は2人に駆け寄ってくるなり、見事な敬礼を披露した。

「連隊司令部直轄特務装甲擲弾兵小隊のベルネットであります！」

「特務装甲擲弾兵小隊？」

ヴィルヘルムとロンメルは顔を見合わせた。

そんな部隊、彼らの記憶には無い。

その2人の様子を察したのか、ベルネットは補足した。

「詳細はグデーリアン大佐にお聞きください」

彼のその言葉に2人は素直に従うことにした。

「率直に言えば君の兄であるルントシュテット大佐が原因だ」

司令部にいたグデーリアンは2人が尋ねてくるのが予期できたのか、やってきた彼らに対して手短に告げた。

そして、ヴィルヘルムはそれだけで納得できてしまった。

「偵察程度はやってもらうつもりだし、形だけでも何かやってもらわないと私が彼から怒られる」

「……私の仕事はレポートを纏めることだと聞いていたのですが？」

その問いにグデーリアンは苦笑し、告げる。

「上官命令だと思ってくれたまえ。それに陛下も承知していることだ」

すっかり外堀内堀も埋められていたヴィルヘルムは顔には出さずに内心溜息を吐いた。

グデーリアンもヴィルヘルムが素人に限りなく近いものであることは知らされている。

そんな彼に心の中で謝罪しつつ、グデーリアンは言葉を紡ぐ。

「君には1個装甲擲弾兵小隊を預ける。司令部の前方に展開して、適宜、状況を知らせてくれ」

司令部から出たヴィルヘルムとロンメルは足早に特務装甲擲弾兵小隊に向かっていた。

その途上、ヴィルヘルムは傍らのロンメルに言った。

「……中尉、何だか妙なことになったが、君のことは頼りにしている。よろしくないところは指摘して欲しい」

「分かりました、中佐。とりあえず、最初の指摘として、兵達の前で弱気なことを言わないことです。ハツタリでも良いから、ドンと構えていてください。それだけで兵達は安心します」

「わかった」

神妙に頷くヴィルヘルムにロンメルは彼の評価を若干上方修正した。

小隊長をはじめ、数十人の下士官や兵士達の視線を浴びながら、
ヴィルヘルムは口を開いた。

「私がヴィルヘルム・フォン・ルントシュテット中佐である。早速
だが私は諸君達に誓約する。私は諸君らと共に突撃し、敵を粉砕す
ることを。また、何か意見があつたならば遠慮なく言つて欲しい」

物怖じせずになぞ告げるヴィルヘルムの姿は傍目からすれば、一
丁前の将校だったが、内心は不安で一杯だった。
しかし、彼はその胸の内を少しも出さなかった。

「小隊長のビツトナーです。中佐、我々の任務は？」

少尉の階級章をつけたビツトナーはヴィルヘルムよりも2、3歳
年上だった。

また他の兵士達も洩れなく彼よりも若干年上、そして下士官に至
つては10歳近く歳が離れている。

今年の6月でようやく18歳となるヴィルヘルムに対して、彼ら
は興味深げな視線を、下士官達は厳しい視線を向けていた。

それらの視線を無視しながら、彼はビツトナーの質問に答える。

「我々の任務は司令部の前方警戒だ。前線部隊と司令部の間に位置

し、前線部隊が撃ち洩らした敵の掃討及び情報収集が主任務となる」

その言葉に明らかに落胆の表情を見せる若い兵士達。

彼らからすればようやく鍛えに鍛えた腕前を見せることができる機会なのだから、そう思ってしまうのは仕方が無い。

さすがに士官としての教育を受けているビットナーと下士官達はそのような顔はしない。

ともあれ、ヴィルヘルムは兵士達をやる気にさせるべく、言葉を紡ぐ。

「残敵掃討と情報収集は華やかさに欠けることは認める。だが、頭脳である司令部を予期せぬ事態から護る、というのは大切だ。それに残り物には福があるということわざがあつてだな、前線部隊が取り逃した大物がいる可能性も否定できない。それに諸君らが堅実な戦果を挙げればそれだけ早く華やかな仕事にありつけるだろう。以上だ」

ヴィルヘルムの言葉を聞いても、まだ不満顔の兵士達を下士官がそれぞれのトラックに乗車させていく。

「……まあ、及第点でしょう」

傍らに立っていたロンメル言葉にヴィルヘルムは肩を竦めてみせる。

「中佐！ 中尉！ こちらです！」

先ほどのベルネットが2人を呼ぶ。

彼は2人が乗ることになる装輪装甲車の関係者のようだ。

彼の横には緊張した面持ちで敬礼している彼の相方がいる。

この装輪装甲車は s d k f z 2 0 8 というものだ。

s d k f z とは S o n d e r k r a f t f a h r z e u g ドイツ語で特殊用途車両というコードであり、その後ろにある番号は車両番号だ。

なお、番号の付与については、あまり一貫した基準はない。

この s d k f z 2 0 8 は 1 9 1 2 年に開発が開始され、1 9 1 5 年に実戦配備が開始されたこの車両はドイツ軍初の装甲車だ。性能としては可も不可もない。

3 2 k m / h の最高速度と前述したトラックよりはマシ程度の装甲、オープントップ式の 4 輪車であり、7 . 9 2 m m 機銃を 1 丁備えている。

運転手と射手の他に 3 名程度乗る余地があった。

「そっちの君は？」

ベルネットの隣にいる相方にヴィルヘルムが問い掛ける。

「自分はディーツであります！」

そう答える彼にヴィルヘルムは軽く頷き、口を開く。

「ベルネット、ディーツ、よろしく頼むぞ」

ヴィルヘルムの言葉にベルネットとディーツは声を揃えて、大きな声で「どうぞお乗りください！」と言った。

彼とディーツは貴族の将校を間近で見て、言葉を交わしたのはヴ

イルヘルムが初めてのことだ。

そして、彼らは装甲車に乗り込んだ。

出撃はすぐ間近にまで迫っていた。

第20話 大戦勃発（後書き）

就職するか、進学するかで迷いに迷ってました。

結局、就職活動をして色々経験を積みつつ、進学も考えるという微妙なことに。

とりあえず、更新できなくてすみませんでした。

ブログとかその辺を今、見ると、悶えたくなるような恥ずかしさに襲われます。

順次改訂していく予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6525f/>

独逸奮闘記

2010年10月8日13時18分発行